松本市文化財調査報告 No.89

SYŌZUMA

松本市生妻遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1991・3

松本市教育委員会

SYŌZUMA

松本市生妻遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1991・3

松本市教育委員会

序

松本市街の南東に位置する中山地区下和泉は、以前より土器や石器が出土し、周囲の丘陵には県下最古級の弘法山古墳をはじめ30数基の古墳が分布する、古い歴史の地であります。ところが、折から進行中の県営ほ場整備事業が当地にも及ぶことになり、生妻池の南方に広がる生妻遺跡の西側もその対象地となりました。そこで当該文化財の保護を図るため、松本市が長野県松本地方事務所から委託を受け、ほ場整備の工事に先立って発掘調査を実施して記録保存を行うこととなりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成元年10月から12月にかけて実施されました。作業は大量の湧水に見舞われるなど困難を極めましたが、参加者の皆様の並々ならぬ御尽力により無事遂行することができました。結果は、縄文、弥生、古墳各時代の竪穴住居跡や縄文時代から中近世にわたる広範な時期の各種遺物の発見で、文字通り古い歴史が証明されたわけです。

本調査の終了と同時に、該当地区の生妻遺跡は消滅しました。私達が祖先から受け継ぎ後世に伝えるべき文化遺産であったことは言を待ちません。しかしその一方、日々の生活の向上を図ることも重要で、その狭間で文化財保護に携わる者は、苦悩を深めているのが現実です。国際化社会といわれる今日、それ故にいっそう我が国独自の文化と伝統が問われている時に、祖先が残した文化財を保護し、研究することはやがて大いに必要となりましょう。今回の調査が微力ながらもその一翼に連なることが適うなら、調査に携わった者一同、至上の喜びです。

最後に、本調査実施にあたり多大な御理解と御協力をいただきました中山土地改良区、地元協力者、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成３年３月

松本市教育委員会　教育長　松村好雄

例　言

1．本書は平成元年10月12日から同年12月９日にかけて行なわれた、松本市中山下和泉に所在する生妻（しょうづま）遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は平成元年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、松本市が長野県より委託を受け、松本市教育委員会が実施した。

3．本書の執筆は第１章：久保田剛、第２章第１節：太田守夫、第２節：中島経夫、第３章第３節1.(1)：新谷和孝、(2)～(4)：直井雅尚、2.3.：関沢聡、その他：高桑俊雄が行なった。

4．本書作成に関わる作業は次の方々の協力を得た。

遺物整理……　村山牧枝、百瀬二三子
遺物復元、拓影……　上条尚美、川窪命子
実測、トレース
　土器……　松尾明恵
　石器、土偶、土製品　久根下三枝子、高桑弘子、関沢聡
遺構図整理、トレース　神沢ひとみ、丸山惠子
一覧表作成……　林和子

5．遺物の写真撮影は宮嶋洋一氏による。

6．第３節1.(1)の早期末～前期初頭の土器については島田哲男氏にご協力頂いた。
また、石器実測については望月映氏の手をわずらわせた。

7．本書の編集は事務局が行なった。

8．本調査に関する出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目　　次

序

例言

目次

第1章　調査経過

第1節　文書記録 …… 3

第2節　調査体制 …… 4

第3節　調査日誌 …… 6

第2章　遺跡の環境

第1節　地形と地質 …… 7

第2節　周辺遺跡 …… 9

第3節　中山和泉地区の歴史的環境 …… 11

第3章　調査結果

第1節　調査の概要 …… 13

第2節　遺構

1．住居址・単独出土土器 …… 15

2．土坑・ピット …… 24

3．水田址・溝 …… 27

第3節　遺物

1．土器

(1)縄文土器 …… 29

(2)弥生土器 …… 30

(3)古墳時代の土器 …… 31

(4)平安時代の土器 …… 31

2．石器・石製品

(1)石器 …… 48

(2)石製品 …… 48

3．土製品 …… 57

第4章　調査のまとめ …… 63

図　目　次

第１図　調査範囲……5
第２図　地形と地質……8
第３図　遺跡の位置と周辺遺跡……10
第４図　遺構配置図……14
第５図　第１・４・５号住居址……16
第６図　第２・３号住居址……18
第７図　第２・３号住居址炉、埋甕、単独出土土器……19
第８図　第６・７号住居址……21
第９図　第８号住居址……22
第10図　第９号住居址……23
第11図　土　坑……25
第12図　ピット……26
第13図　土層観察、水出址、溝……28
第14図　第２号住居址出土土器……32
第15図　第３～５・７・９号住居址出土土器……33
第16図　土坑・ピット・その他・検出面出土土器……34
第17図　検出面出土土器……35
第18図　検出面出土土器……36
第19図　検出面、第８・９号住居址、土坑出土土器……37
第20図　ピット、検出面、その他出土土器……38
第21図　縄文早期末～前期初頭土器拓影　(1)……39
第22図　縄文早期末～前期初頭土器拓影　(2)……40
第23図　第２・３号住居址出土土器拓影……41
第24図　第３・４号住居址出土土器拓影……42
第25図　第５・６・８・９号住居址出土土器拓影……43
第26図　ピット・検出面出土土器拓影……44
第27図　土坑・溝・検出面出土土器拓影……45
第28図　検出面出土土器拓影……46
第29図　検出面出土土器拓影……47
第30図　石　器　(1)……52
第31図　石　器　(2)……53
第32図　石　器　(3)……54
第33図　石　器　(4)……55
第34図　石　器　(5)……56
第35図　土製品　(1)……59
第36図　土製品　(2)……60
第37図　土製品　(3)……61
第38図　土製品　(4)……62

第１章　　調査経過

第１節　　文書記録

昭和63年９月12日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

12月22日　昭和64年度補助事業計画書提出。

平成元年４月３日　平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。

４月３日　平成元年度文化財保護事業補助金（県費）内示。

５月15日　平成元年度県営ほ場整備事業中山地区生妻遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。

５月24日　平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

７月18日　平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

７月25日　平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

９月11日　平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

９月12日　平成２年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

９月16日　生妻遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

12月21日　生妻遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。

12月22日　平成２年度補助事業計画書提出。

12月25日　生妻遺跡埋蔵物の文化財認定。

平成２年４月４日　平成２年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。

４月４日　平成２年度文化財保護事業補助金（県費）内示。

６月２日　平成２年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

７月24日　平成２年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

８月17日　平成２年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

10月12日　平成２年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第２節　　調査体制

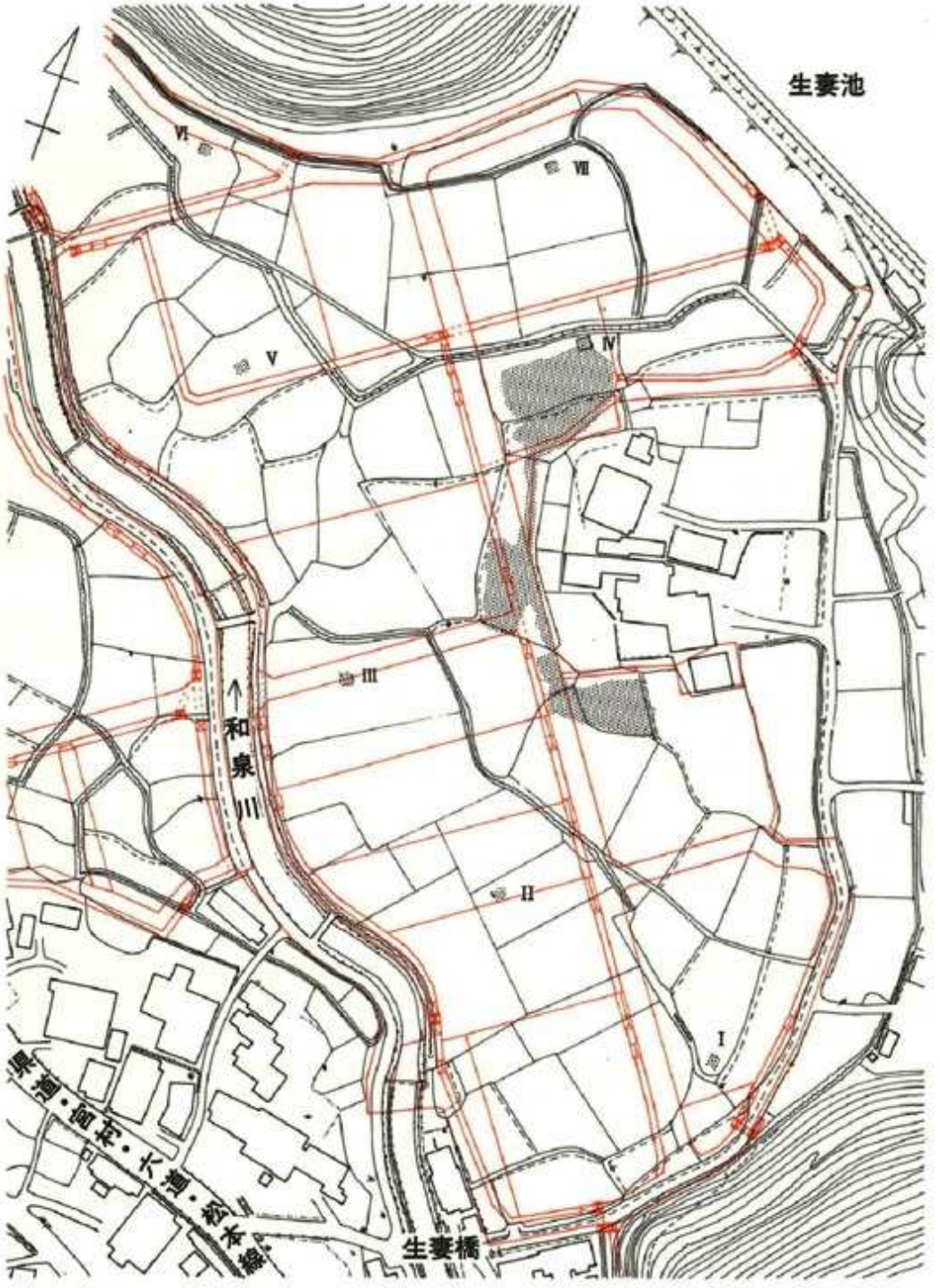
調査団長：松村好雄（松本市教育委員会教育長）

調査担当者：高桑俊雄（社会教育課）

調　査　員：太田守夫、中島経夫、松尾明恵

協　力　者：赤羽包子、赤羽とみ子、石合英子、乾靖子、内澤紀代子、内田和子、江成喜久、遠藤ひろみ、大谷光枝、奥原富蔵、小野光信、開嶋八重子、上條春子、上條尚美、川上とよみ、川窪命子、神沢ひとみ、久根下三枝子、小松小きん、後藤みさを、下里みつへ、関五十鈴、高田好子、高田芳子、高橋八重子、田多井うめ子、田多井亘、中島春、中島久江、中島冨美子、中村嵩、巾崎助治、林伊和夫、藤森公子、堀内美代子、松尾さだ子、丸山麻子、丸山久司、丸山惠子、丸山誠、丸山よし子、見村芳子、宮島みつよ、村山牧枝、村山正人、百瀬きゑ、百瀬喜和子、百瀬静子、百瀬央士、百瀬二三子、百瀬義友、森崎文一、横川博子、横山真理、吉澤克彦、米山明子

事　務　局：浅輪幸市（～Ｈ１）／荒井寛（Ｈ２～）（社会教育課長）、田口勝（課長補佐、Ｈ２～）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚（主事）、関沢聡（Ｈ２～）（主事）、降旗英明（主事）、山岸清治（～Ｈ１）（主事）、赤羽美保（Ｈ１）、荒井由美（Ｈ２～）



スクリーントーンは調査範囲を表す

0　50　100 m

第1図　調査範囲

第3節　調査日誌

平成元年10月12日　重機による試掘を行なう。3×3mの試掘坑6か所、第4地点より縄文土器が多出する。ここは湧水も激しい。他の5か所は遺物なし。市教委：高桑（以下市教委は同様）

10月16日　1地区より重機にて検出を開始。上部に近代の暗渠あり。作業員：田多井亘（以下員数のみ記載）

10月17日　重機による検出継続。プレハブ、トイレを設置する。作業員：2名

10月18日　2地区、3地区上段重機で検出。作業員：2名　19日　重機作業継続。発掘用器材を搬入。作業員：2名

10月23日　作業員による検出作業を開始する。重機にて排水のための溝を掘る。作業員：10名

10月24日　1地区での検出作業を27日まで継続。2・3地区のピット・土坑半分割開始。作業員：10名

10月25日　第1号住居址（以下○住とする）掘込終了。2住・3住掘込開始。1地区土層断面検出作業。作業員：10名

10月26日　2住掘込継続。3住は終了。ピット半分割作業継続。作業員：10名　27日　前日と同様。作業員：9名

10月30日　重機にて2地区を拡張。3地区下段の検出作業を開始するが、土色判然としない。作業員：7名

11月2日　3地区下段の検出作業継続（9日まで）。南東部より徐々に水が湧く。作業員：11名

11月6日　前日と同じ。作業員：26名　7日　3地区検出作業継続。ピット半分割。作業員：19名

11月8日　2地区検出作業。8住掘り下げ。水田址へトレンチを入れる。作業員：19名

11月9日　4～7住を検出し、各々徐々に掘り込みを開始する。作業員：19名

11月13日　1地区再検出作業。水田址トレンチ終了。3地区住居址掘込作業継続。作業員：22名

11月14日　1地区検出作業継続。3地区上段の縄文早期の遺物出土地周辺を探る。作業員：24名

11月15日　3地区下段の4～7住を掘り込み中。ピット・土坑半分割作業。作業員：22名

11月16日　測量作業を開始する。トランシット測量。1～3住の土層図を作成。作業員：10名

11月17日　測量継続。1地区検出作業。土器洗いのための資材を搬入する。作業員：9名

11月20日　2・3住のベルトを外す。現場近くで土器洗い作業開始（同作業は29日まで継続する）。作業員：18名

11月21日　1地区検出作業継続。2住ピットを半分割。測量作業継続。作業員：21名

11月22日　1地区北の土層図（A－A′）作成。2地区水田址・溝・土坑・ピット等の土層図作成。作業員：21名

11月24日　2・3地区の平・断面測量継続。調査地内の地質観察を依頼・実施する。作業員：21名

11月27日　1地区から縄文・弥生土器、土師器などの遺物多くを取り上げる。作業員：15名

11月28日　1地区にトレンチ(B－B′)を設ける。3地区下段の遺構外遺物取り上げ。作業員：14名

11月29日　トランシット測量再開。平面測量継続。遺構写真撮影中。作業員：17名

11月30日　1地区トレンチ断面図作成。平面測量継続。4～7住ベルト外し。作業員：19名

12月1日　1地区・3地区のピット土層図作成。2～3住は完掘。内部にて土器洗い作業を開始する。作業員：17名

12月4日　3地区ピット土層図作成、完掘中。2住内埋甕精査。8住床面精査。作業員：18名

12月5日　1地区トレンチ土層図作成。3地区ピット完掘中。4～7住精査。作業員：18名

12月7日　平面図作成中。3地区一括遺物・単独出土土器等取り上げ。2・3住の炉精査。作業員：7名

12月8日　平面図作成継続。全景写真撮影。作業用具、資材撤去開始。作業員：8名

12月9日　全地区からの遺物取り上げ。2住内炉精査。測量は終了。作業用具、資材撤去終了。作業員：7名

第２章　　遺跡の環境

第１節　　地形と地質

１．地　形

周辺の地形は東側の鉢伏山地の北端に当たる支脈と、西側の中山丘陵、その間に発達した断層谷状の谷底からなる。山地の地質は第三紀中新世の内村層の堆積岩（砂質泥岩・砂岩・礫岩）に属し、東側には石英閃緑岩が広く分布している。谷底は断層線（推定）に沿い、北西から南東に延びているが、場所によれば和泉川の浸食や堆積も見られる。図Ａは中山地区の谷中における和泉川の傾斜を示したもので、上流での浸食、弥生前遺跡付近の扇状地堆積、750～1000m付近の浸食、下和泉の堆積状況が読める。平均傾斜は３°、120mの高さから距離2.5kmを流れ下っていることになる。またこの谷底に迫る東西の山麓線は極めて対照的なのが目につく。即ち中山丘陵側が直線状で急傾斜の崖錐性の堆積面を示すのに対し、鉢伏山地側は屈曲性に富み、多くの支脈の尾根と谷を発達させている。支脈に挟まれた谷は北埴原や上・中和泉では崖錐性・扇状地性の堆積物によって埋められ、平均傾斜６°を超える西の山麓傾斜地を形成する。これに対し谷口の本調査地付近は隣接する神田や林地区の山脚で見られる沈降性の地形に続き、沈降性の堆積谷の傾向をもつ。

調査地周辺に限っても生妻池を含めた下和泉地籍は、開成中学校が載る北側の山地の支脈のほか、東と南側の支脈の湾入により囲まれていて、小規模な沈降性の堆積盆地状地形になっている。これを証明するように、調査地の３地区の北に続く水田では、ほ場整備中に極めて厚く軟質の黒灰色土層（緑色粘土を含み泥土状になりやすい）の堆積が広範囲に分布しているのが見られた。調査地はこれを囲むように、東方から扇状に開いた崖錐性の堆積物上（平均傾斜１°以下）に載っている。

現在、地形面は山脚から集落と畑地の載る面－(1)、第１次湧水線の小崖と水田面－(2)、道路下小崖の第２次湧水線と水田面－(3)、段丘下の生妻池堰堤下・棺護山下・和泉川の氾濫原の面－(4)の四つの面に分けられ、緩傾斜の棚田（階段状水田）となり和泉川まで続いている。また(3)の面には山地の続きとも見られる台地上の地形が介在し、現在人家が載っている。さらに(3)と(4)の間には、和泉川の曲流によって出来た段丘崖があり、(4)の面には流れを示す跡や堆積物も見られる。１地区は台地状地形の南側(3)の面、２地区は台地の先端(3)の面、３地区は台地北側(3)と(4)の面に載っている。湧水（地下水）は地下の堆積構造に支配されていると思われるが、(3)の面に多く見られる。特に１地区に顕著で、その末端は低湿地となっている。これらの湧水や湿地の集排水のため、多くの暗渠が設けられていた。

２．堆積層と遺跡

発掘地周辺の地形面は前記の通りで、発掘面は主に(3)の面である。第２図Ｂ－１は１地区の地層

断面であるが、２の堆積層は前記の第１次湧水線（(2)の面）から、(3)の面の末端までの地層の一般といえる。粘土層は不透水層となり、この層上を伏流水が流れるので、多量時は上層にまでしみ込み、湧水ともなる。黒色土層は低湿地性で腐植を多く含み、茎片も見られる。

１地区では黒色土層中に多数の角礫・亜角礫の細・中礫が無層理に近く堆積し、更に土器片（縄文・弥生・古墳期）が多数混在し出土している。礫は周辺山地に分布する石英閃緑岩がほとんどで、恐らく東側の山地から、崖錐性堆積物として供給されたと考えられる。ただこれはかつての住居域が低湿地となったため、埋め土の下へ一括放棄されたとも見られる。また一部の地層中には、下部堆積へ上部堆積が漸次階段状に積み重なって上流側へ後退している所が見られるが、これは低湿地の堆積の後退によるものと思われる。多く見られる暗渠排水の施設は後になって低湿地を水田化したときのものであろう。ここの遺物は、縄文・弥生・古墳・土師期のもので、土器・石器等が多い。

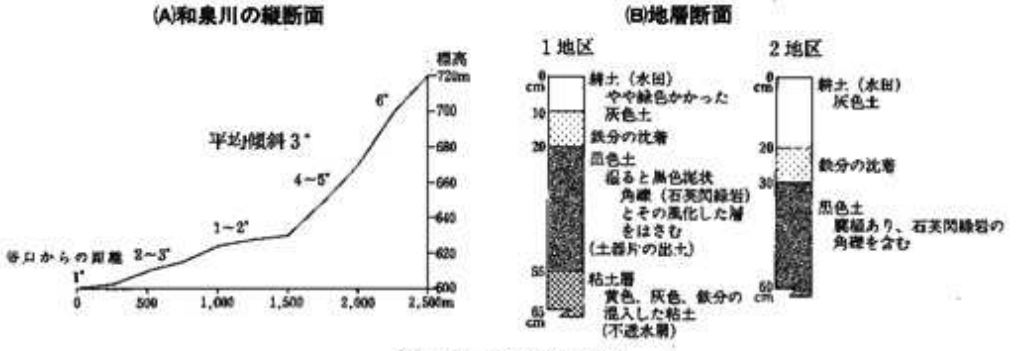
２地区は台地の先端に当たるため、１地区ほど地下水の浸透はないが、地層の堆積状況はほとんど同じといえる。ここでは縄文期と弥生～古墳期の住居址と中世のものと思われる水田址が発見されている。(4)の面とは１mほどの段丘崖をもって境をしている。

３地区は台地の北側に当たり、上・下二段からなる。上段は(3)の面に属しており、一部に砂礫が混じり、縄文期の遺構や遺物が発見されている。下段は上段と約１mほどの比高をもち、黒色の泥土層の発達した(4)の面に属し、多くの暗渠施設が見られる。

発掘地外となった(4)の面は、明らかに和泉川の曲流により生まれた氾濫原の堆積で、土層中に径２cm大を中心にした円礫（主に石英閃緑岩）が多数含まれていて、(3)の面と堆積環境を異にしていることが分かる。また土層は第三紀層の堆積岩（主として砂質泥岩）を起源とする砂質粘土で、水を含むと泥土化する傾向が強い。

３．地形の形成と遺跡の立地

遺跡の立地は生妻の谷の堆積盆地や和泉川の氾濫原より一段高い場所を選んだもので、縄文－弥生－古代－中世と展開しているもののように思われる。その間古代に一度低湿化したが、その後低湿地は次第に水田化され、今日に及んでいると考えられる。遺跡の立地と地形環境との相関を見る上に、良好な場所と見られるが、(1)(2)の面や台地の発掘がなされていないのが残念である。



第２図　地形と地質

第２節　　周辺遺跡

当地はいわば、市街地の平野部から中山の丘陵地帯への入口部にあたる。北西700mには県下最古の弘法山古墳を望み、北に棺護山古墳群、そして東の山中、西の中山にも、多数の古墳が造られている。時期ごとに近接する遺跡を見るならば、まず縄文時代には南１kmに本遺跡と並行して調査した弥生前遺跡があり、住居址は中期後葉22、同中葉２、後期初頭３などの成果を得た。弥生時代には弘法山古墳の北際に、平安時代までの遺構を検出した平畑遺跡がある。またその北東部には薄川までの間に松本工業高校敷地・富士電気工業敷地遺跡があり、薄川の後背湿地を利用した生活の痕跡を予想することができる。古墳時代では集落として、神田の東側に千鹿頭北遺跡がある。ここでは該期の住居址47ほか、奈良・平安時代の遺構を調査した。奈良・平安時代になると、先の平畑遺跡、その北の神田遺跡などがある。なおここより南２kmの推定牧監庁跡以南は中山丘陵の南斜面となり、向畑・坪ノ内・南中島という縄文時代あるいは古墳時代の大集落を立地させているが、今回の調査地のように中山の北向き斜面にあり、縄文時代早期から中期、弥生～古墳、平安時代という多時期のものを複合させた遺跡は中山独立丘陵北端にある平畑遺跡を除くと、特異な遺跡といえる。

遺跡名と主要時期

1. 富士電機工業敷地遺跡（弥～平）
2. 三才遺跡（弥～平）
3. 神田遺跡（縄～平）
4. 千鹿頭北遺跡（古～平）
5. 御神符遺跡（古）
6. 御神符古墳（古）
7. 林遺跡（古～平）
8. 平畑遺跡（弥～平）
9. 棺護山古墳群（古）
10. 中山36号墳（古）
11. 弘法山古墳（古）
12. 中山北尾根古墳群（古）
13. 山行法師遺跡（縄）
14. 宮平八幡宮裏山遺跡（？）
15. 和泉遺跡（縄・古）
16. 弥生前遺跡（縄）
17. 小丸山古墳（古）
18. 柏木古墳（古）
19. 鍬形原古墳群（古）
20. 埴原北遺跡（縄）
21. 推定牧監庁跡（奈・平）
22. 山影遺跡（古）
23. 小山下古墳（古）
24. 向畑遺跡（縄・古）
25. 坪ノ内・向畑古墳群（古）
26. 坪ノ内遺跡（縄）
27. 瀬黒遺跡（？）

第３図　遺跡の位置と周辺遺跡

第3節　中山和泉地区の歴史的環境

今回発掘調査を行なった生妻（しょうづま）・弥生前（やしょうまえ）両遺跡[1]を含む中山の和泉地区の歴史的環境について述べてみたい。

生妻・弥生とは、ともに珍しい地名である。その語源について考えてみよう。弥生から生妻の南端を流れ下る和泉川の下流域、弘法山の北の辺りを〝あらしょう〟という。当地方では大雨の時、大水を流す所を〝あらしょう〟または〝あらしょ〟といっている。和泉川は坂々の源流から荒れ川で、源流には崩落の痕跡がある。弥生には北川原、やや上に中川原という氾濫常習の地名が残っており、中山丘陵もまた崩落常習地である。常にこの川は土砂を押し流していて、弥生から下流では天井川になっている。次に生妻の〝つま〟は〝きわ・へり・はし〟などの意味があり、「生妻」とは〝あらしょうのへり・きわ〟に始まる地名かと思われる。弥生も多分同様に〝あらしょう〟に関わる発生と思われるが、「弥（や）」は〝多い〟という意味としても、その転訛の過程ははっきりしない。

両者ともに筑摩郡和泉村258石548[2]の中に散在する7小部落の内の一つである。その戸数は延宝5年（1677）年絵図[3]では、和泉38戸の内、生妻5、弥生10で、弥生は下和泉と書かれている。慶長17（1612）年には和泉村の全体戸数は30戸であった[4]。和泉は近世初頭まで、「和泉郷」と書くことが多いが、「泉」とだけ書いてある文書もある。文書面の初見は、諏訪上社『御符礼之古書』[5]の「文明11（1479）己亥年花会明年頭足　一宮頭、内田・埴原…村井中内田与和泉知行候…」である。今までは、村井氏は中内田と埴原を知行と書いているのに、この時だけ和泉を加えている。多分、村井氏はずっと中内田・埴原・和泉を知行していて、和泉は埴原に含まれていたものが、この頃から何らかの事情で分離したのであろう。そのため和泉と埴原の境界は半分くらいが畑の中を通り、一部百姓家の屋敷を切って通っている部分もある。また柏木部落は和泉と埴原に切り分けられている。

埴原というと、古代には千石・古屋敷・大久保原を牧場とし、鳥内に牧の役所を置き、また沖田を牧田とする左馬寮管轄の勅旨牧の埴原牧があった。そして信濃の勅旨牧を監督する信濃牧監がここにいた[6]。この時期に和泉や埴原の内で、埴原牧に関係ない地域は山家郷に属したようである。そのことは上和泉の奥の山辺へ越える小さな峠の下に坂々・産ケ坂・酒ノ入の地名があることから窺える。共に峠の古名の〝坂〟に始まる地名である。これらは古代に山家郷の郷庁がある山辺へ、その範囲であった和泉・埴原から越えていった峠であろうと思われる。

和泉の名の起こりは、原海道の上にある箱井権現を祀る泉をその初めとする[7]のが妥当であろう。この泉の水掛かりの田は5反歩強で、〝じんでん〟と呼ばれている。その付近で平安時代中期の土器が、僅かではあるが表採される。箱井権現は箱井大権現を祀るが、本当は鉢伏の蔵王権現を祀っているものと思われる[8]。ここには現在、原海道と和泉分の柏木[9]の人々の祝殿があるが、神を祀るようになったのは中世以後のことで、もとは箱井の泉があっただけであろう。更に上和泉の奥の「酒ノ入」では元正天皇（715～724）の時代に「醴泉が涌き出て五日で涸れたが、これにちなんで『和

泉」と名づけた」との伝承があり、また松本盆地開拓伝説の「泉小太郎」は同じく上和泉の奥の「産ケ坂」の生まれと伝えられる。時代は下って、鎌倉時代初期の建暦年間に北条氏の倒滅の戦いを企てた「泉小次郎親衡」はここの人ともいい(10)、南方5kmにある牛伏寺に、後世のものではあるが、同人使用といわれる180cmの大太刀と兜の鉢が残っている。

中山において、生妻は沖田とともに古く、そして豊かな水田地帯である。和泉・埴原ともに名主は村内の適当な百姓が交代で勤めている。近世初頭の和泉村名主の孫二郎（慶長6・7年）・惣兵衛（寛永10～15年）・孫兵衛（同16～18年）は生妻の百姓である(11)。この家は天正17年（1589）五貫文で溝口貞秀に仕えた中島総次郎(12)の家か、またはその分家である。他に和泉・埴原で中世末に武家奉公しているのは、柿ノ窠に居たと思われる中島刑部左衛門、胡桃沢の仙石（百瀬）帯刀左衛門と雅楽助、南中島の百瀬甚兵衛(13)などであるが、それらの地域と並んで、生妻も当時豊かな地域であったことを示すものである。

註(1)『松本市弥生前道路』（松本市教育委員会、1991年3月刊行予定）

(2)「筑摩安曇両郡郷村御朱印御高附」『信濃資料叢書』11

(3)和泉村から上和泉・原海道・柏木・丸山をさいて上和泉村を作り、旗本原詰左近太郎の埴原村に附けた時のもの（中島経夫氏蔵）

「延宝五年絵図写」の和泉の百姓家数（雲屋根・板屋根別）

	二山	生妻	弥生	七曲	上和泉	原海道	柏木	丸山	
雲	3	3	5	1	2	3	2	0	19
板	0	2	5	2	6	1	1	2	19
	3	5	10	3	8	4	3	2	38

(4)「慶長17年　泉之38郷御見地帳　子之霜月三日」　（中島公也氏所蔵／『信濃史料』21-211）

(5)『信濃資料叢書』2

(6)『延喜式』第48巻

(7)延暦17年の太政官符『類聚三代格』（『信濃史料』2-160）

(8)昭和39年　松本市中山埴原北島内「推定信濃牧監庁跡」発掘調査の際、大場磐雄博士談

(9)柏木部落は現在、埴原と和泉にまたがっている。「延宝五（1677）年絵図写」では埴原分のみ柏木と書き、和泉分は"かうしかいと"と書いている。用水や道祖神・念仏講などからみて、もとから一まとまりの集落であったことが窺える。

(10)以上の伝承は『長野県町村誌』による

(11)慶長6年　いつミ郷丑ノ納御勘定ノ事　孫二郎　（中島元康氏旧蔵中島文書／『信濃史料』19-178）

同 7年　泉之郷寅納御勘定之事　孫次郎　（同／同19-524）

寛永 7年　いつミ村巳納私日録之水　いつミノ惣兵へ殿（同／同25-367）

同 9年　いつミ村午之納私日録之事　いつミノ左十殿（同／同25-625）

同10年　いつミ村申之納私日録之事　惣兵衛殿　（同／同26-94）

同11年　いつミ酉之納私日録之事　惣兵衛殿　（同／同26-294）

同12年　いつミ戌之納私日録之事　惣兵衛殿　（同／同26-456）

同13年　いつミ乙亥　[　]　（同／同26-692）

同14年　いつミ丙子之納私日録之事　惣兵衛殿　（同／同27-73）

同15年　いつミ丁丑之納私日録之事　惣兵衛殿　（同／同27-311）

同16年　いつミ戊寅ノ納私日録之事　孫兵衛殿　（同／同27-479）

同17年　いつミ己卯之納私日録之事　孫兵衛殿　（同／同27-661）

同18年　いつミ庚辰之納私日録之事　孫兵衛殿　（同／同28-195）

(12)天正17年　中島総次郎　埴原検地割内の功績で、5貫文を給され、鉄砲を持って溝口貞秀に仕える。（中島元康氏旧蔵中島文書／『信濃史料』17-69）

(13)中島刑部左衛門　小笠原貞慶家臣　天正10年和泉で45貫文知行、同11年和泉で25貫文加増、同17年野溝で35貫文加増　（原詰中島崇光氏蔵文書／『信濃史料』15-408、同16-109、同17-43）

仙石帯刀左衛門　武田時信に従い、天文17年胡桃沢で本領と加増分合わせて70貫文知行（仙石三津江蔵文書／『信濃史料』11-407）

百瀬雅楽助　小笠原貞慶家臣　天正10年埴原と胡桃沢で22貫文余を知行（仙石三津江蔵文書／『信濃史料』15-469）

百瀬甚兵衛　小笠原秀政家臣　慶長18年埴原之郷で13貫文余知行（百瀬正武蔵文書／『信濃史料』21-262）

第3章　調査結果

第1節　調査の概要

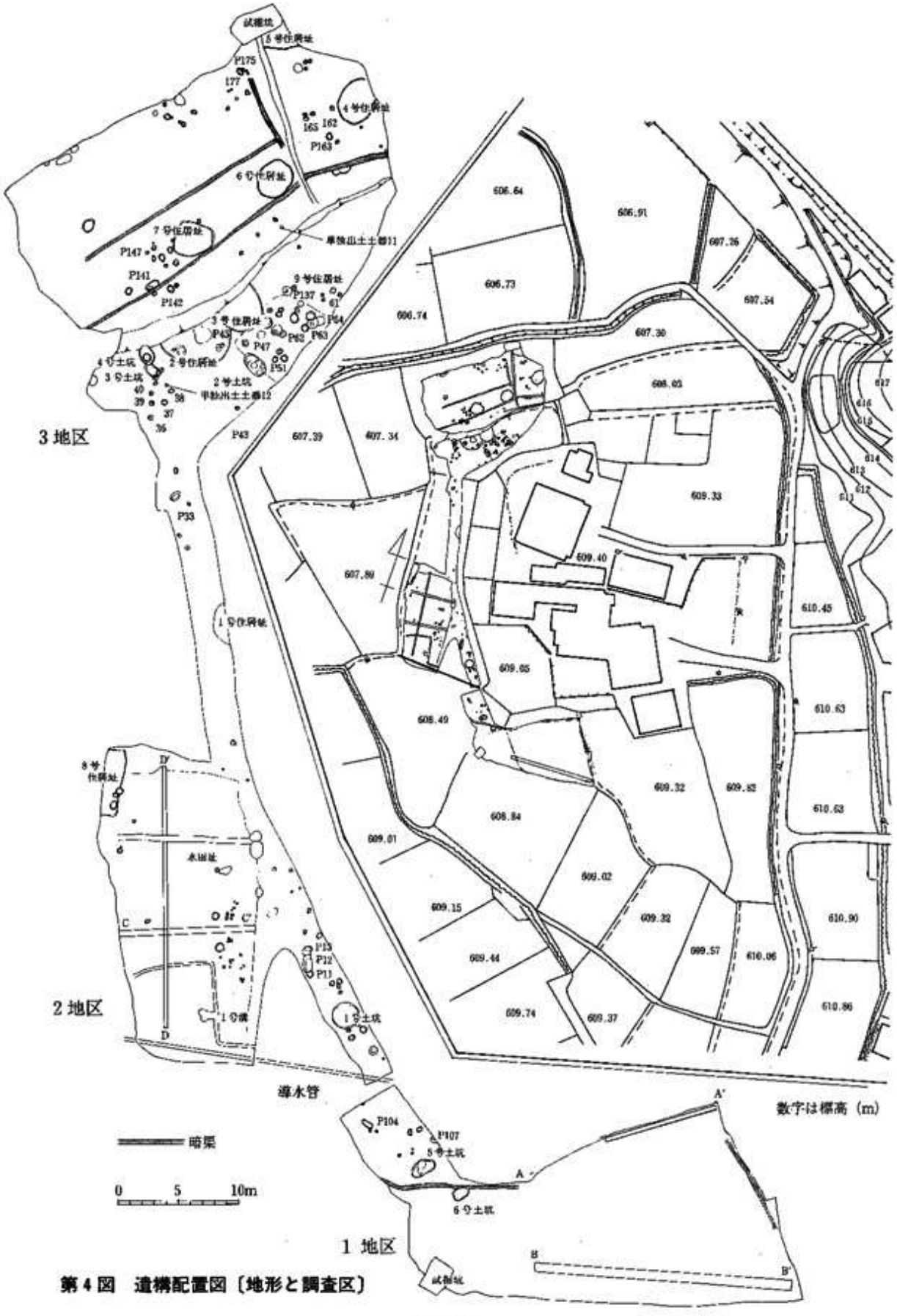
遺跡は和泉川の東部山裾に位置し、ほとんどが水田として利用されているところである。調査区を限定するために、重機で任意の7か所（Ⅰ～Ⅶ）を試掘した。その結果、Ⅳで縄文時代の多量の遺物を見る。他の6か所からは全く遺物が得られず、Ⅰ・Ⅱは砂地ないし砂礫層となって、流水の痕跡を残していた。またⅢからは激しい湧水をみる。今調査に先立ち行なった試掘では、Ⅱの北側、つまり人家の南側で古墳時代の遺物を得ており、これらのことを踏まえ、本調査に入ることとなった（ほ場整備前後図参照）。

1地区は図示した以外にも、東西南北に木組みした暗渠が入れられ、東・南の外側も浅いところで水が湧き、湧水地であることを示している。検出面はちょうどこの暗渠を取り除いたレベルに設定したが、土層は安定せず、耕作土下は腐植土を思わせる漆黒色土が深く堆積し、鉄分を沈澱させた黄色土もシミ状に入り、山から転入した角礫もたくさんみえる。遺物は縄文時代中期後葉の土器・石器を中心として、他に弥生時代後期の高坏・甕類、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器などもみえる。地区内の西部を除いて、これらの遺物は層位的には混在した状況で、土層観察の所見からすると、特定の時期の遺構としては捉えることができなかった。

2地区は地山の上に耕作土が薄く乗る。検出面は明瞭な黄色土ないし黄褐色土であった。遺構は縄文時代と思われる住居址1軒、弥生末から古墳時代前期の住居址が各1軒、また大形の方形の落ち込みは中世以降の水田址として捉えた。これらの遺構からの遺物はほんのわずかである。他には土坑・ピットなどがあり、この中には平安時代中期の遺物を出土するものがあった。

3地区は南部（上段）を畑地に利用していた。2地区と同じ高さで検出面となり、土色は黄色土である。北部（下段）は南側を削平し石垣を設け、北側を石などで埋め平らにし、水田として利用していた。地表から50cmほど除去すると、1地区と同様縦横に暗渠が入れられており、やはり南より湧水があり、苦労した。検出面の土色は全体的に黒っぽくなるが、1地区のような漆黒色ではなく、黄色ないし黄褐色もところどころにみえた。遺構は上段では縄文時代中期後葉の住居址2軒、古墳時代中期の住居址1軒など、下段では縄文時代の住居址4軒がある。いずれも小形で炉・柱穴はみえない。このうち第6号住居址からは早期末葉の土器を得ているが、これらは広い範囲から散発しており、遺構の時期を決定できるものとはいえない。土坑・ピットなどからの土器・石器等は中期後葉から末葉のものを中心としている。

今調査は山沿いに展開する遺跡の西北端にあたる。低い尾根の緩斜面上に位置し、縄文時代を中心として中世に至るまでの小さな遺跡の一様相をみることができる。



第4図　遺構配置図〔地形と調査区〕

第2節　遺構

1．住居址・単独出土土器

(1)第1号住居址（第5図）

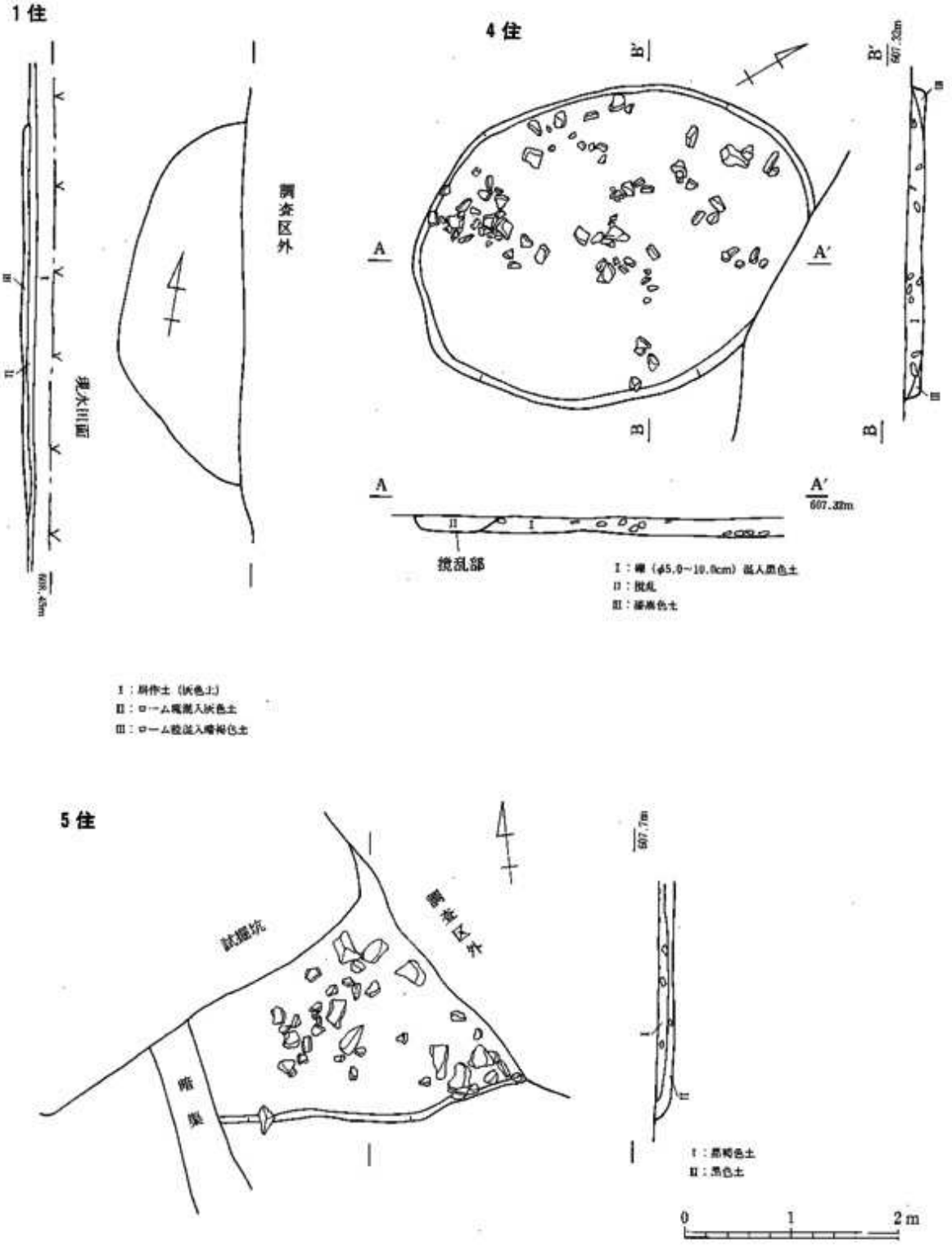
調査2地区北部の長く延びる中間の辺りに位置しており、耕作土直下で検出した。東側は調査区域外にかかっているため、全体の⅓を調査し得たにとどまる。規模は現況で長軸3.4m、短軸1.2mを測る。ローム層中に掘り込んではいるが浅く、壁の残存高は最大でも6cmを測るのみであった。これは開墾による削平のため、当時の生活面が大きく失われたことによる。覆土はローム粒混入暗褐色土を呈する。床は平坦ではあるが、特に堅さをみせていない。またピット・炉など住居に伴う施設も検出されていない。

遺物は縄文土器の小片が数点であった。これらと円形プランを考えると、本址の時期は縄文時代中期のものと思われる。

(2)第2号住居址（第6図・第7図）

3地区の中央の南寄りに位置する。北西側は後世の水田開拓の際に大きく削られ、全体の6割程が遺存していた。また東側には、第3号住居址が小さく本址を壊して位置する。現況で長軸5.8m、短軸3.6mを測り、平面形は円形を呈するものと考える。遺存する壁はややなだらかな状況を示し、最大壁高は14cmを測る。覆土はローム塊混入の黒褐色土である。黄色ロームの床は平坦で部分的に堅く、比較的良好な状態であった。住居内の施設としてP_1〔(42)×33×49cm〕、P_2(50×39×41.5 cm)、P_3（92×73×22cm）と炉が検出されている。3個のピットはすべてが柱穴に該当するものと考える。炉はほぼ中央に位置する。周囲の石は抜き取られたらしく、145×130cmの不整形を呈す大きな穴となっている。焼土はこの中央部に90×60cmの範囲で、厚さ7cm存在しており、この内部及び周囲上部から多量の土器や礫類が出土した。なおP_3西際には大形の深鉢が完形のまま、正位で埋設してあった。これらから主軸方向はN－117°－Wとなる。またP_{45}は後世のものである。

遺物は土器のほか、土偶が3点、ミニチュア土器、石鏃、石錐、打製・磨製石斧などの石器がある。出土した埋甕と大多数の土器は曽利Ⅲ式期のものである。よって縄文時代中期後葉の時期を与える。



第5図　第1・4・5号住居址

(3)**第3号住居址**（第6図・第7図）

先述の第2号住居址と同様に北西側は欠失しており、全体の7割を確認した。規模は現況で長軸方向4.2m、短軸3.7mを測り、平面形は楕円形を呈すると推定する。覆土はローム塊が混入する暗褐色土であるが、南と西の立ち上がり部分に褐色土、東側には黒褐色土がみられた。床面はロームとなり、平坦で堅さも明瞭に残る。壁はやや外傾しており、最大壁高は16cmを測る。住居内の施設は中央やや東寄りに炉が検出されている。楕円礫を9個使用した円形の石囲炉で、53×50cmと小型である。深さは20cm程であったと予想するが、炉内に確認した焼土は極めて少ない。

遺物は土器と石器とがあるが、量的には少ない。土器には縄文時代後期のもの、また隣接する2住より混入したものがある。これらを差し引くと曽利Ⅰ～Ⅱ式期のものが目につき、本址は縄文時代中期後葉と考える。なお石器には石鏃など4種8点がある。

(4)**第4号住居址**（第5図）

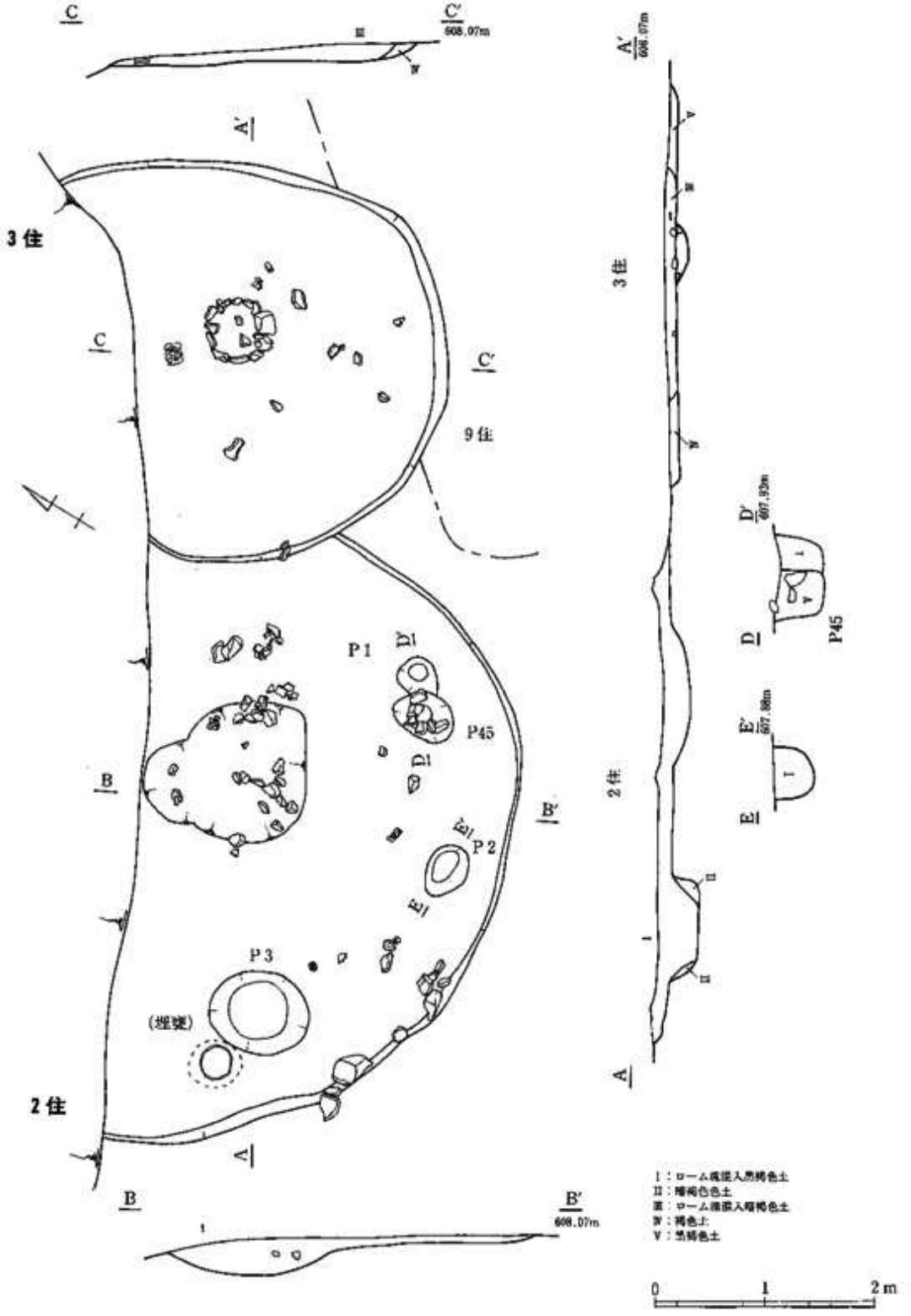
3地区の東端に位置する。本址を含め第7号住居址までが3地区の下段部分にあたる。北東壁がわずか調査区域外となり、また南側の一部に攪乱を受けている。長軸3.8m、短軸2.9mの規模をもち、楕円形のプランを呈する。壁はほぼ直に立ち上がり、最大壁高は18cmを測る。覆土は礫混入黒色土と漆黒色土の二層であり、上層から下層まで北西部を中心に拳大から小児頭大までの石が多く、また全体的に遺物も多く混入する。床面は北寄りで拳大以下の礫が多くなり、そこを生活面として捉えた。やや明るい黒褐色土を呈する。この床面上には拳大の礫と少量の土器が西側に出土している。

遺物は土器と土製品、石器等がある。いずれも多く、土器は曽利Ⅰ～Ⅱ式期のものを中心としている。これらより本址の時期は、縄文時代中期後葉となろう。

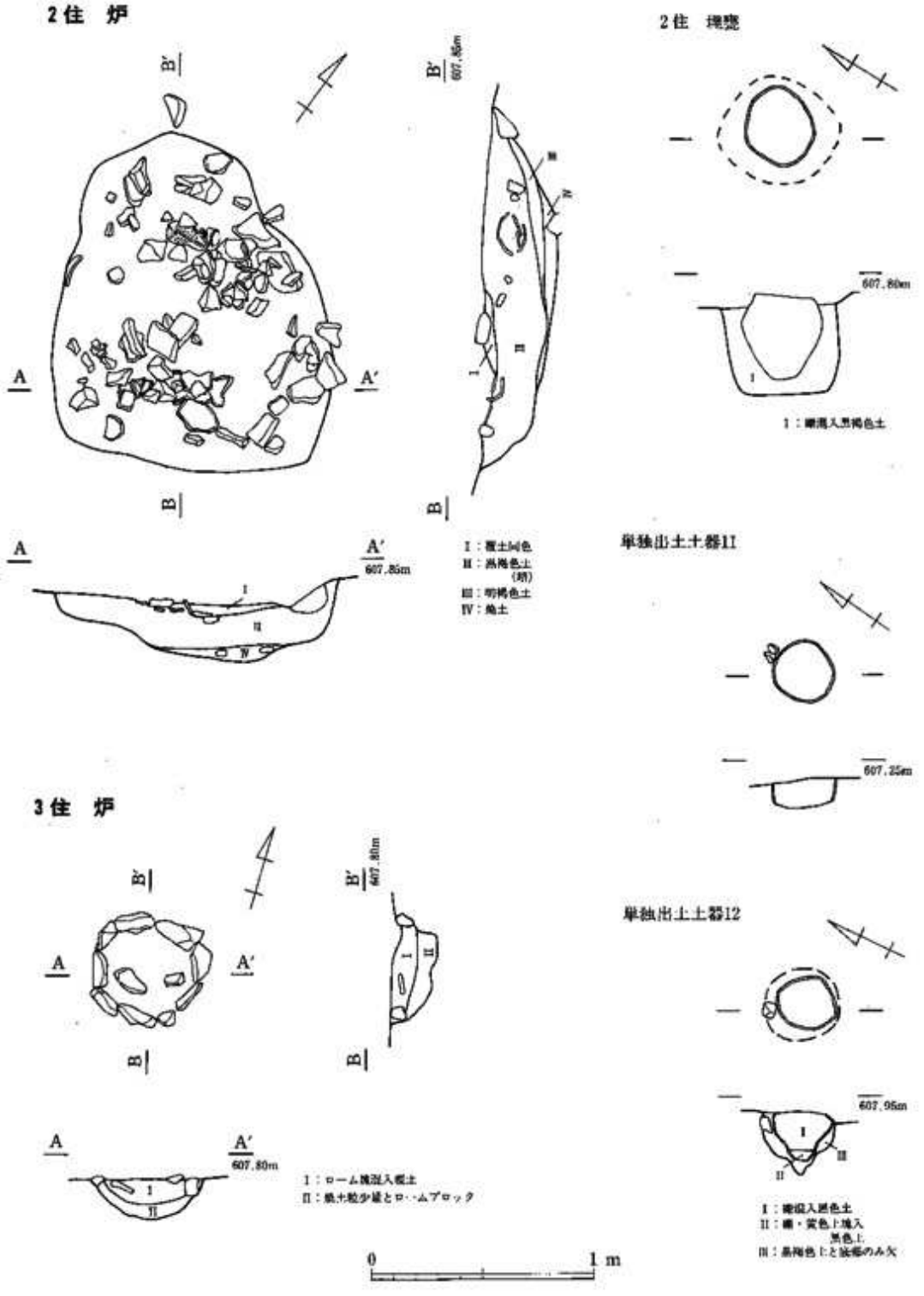
(5)**第5号住居址**（第5図）

3地区の北隅に位置する。本址は重機による表土削平時に多量の遺物が出土して、それと判明した。北側と西側をそれぞれ試掘坑と暗渠に破壊され、また東側は調査区域外にかかっているため、規模・平面形は全く不明であるが、現況東西3.2m以上はあろう。壁は緩やかな傾斜を示しており、残存壁高16cmを確認した。覆土は検出面が黄色の小礫が含まれるのに対し、それが全くみられず、黒色土の上に黒褐色土が乗る二層で、上層から下層まで非常に遺物が多い。床面は土色・堅さでは判然とせず、遺物の止まりでそれと判断した。床面からは拳大から小児頭大までの多数の礫が、遺物とともに遺存していた。なおピット・炉などは全く検出できなかった。

遺物には土器、石器がある。土器には混入したと思われる弥生時代のものもあるが、量的に主体を成すものは、縄文時代中期後葉曽利Ⅱ式期のものである。


3住
2住
9住
P1
P2
P3
P45
(埋甕)
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
I：ローム粒混入黒褐色土
II：暗褐色土
III：ローム粒混入暗褐色土
IV：褐色土
V：黒褐色土
0
1
2m

第6図　第2・3号住居址



第7図　第2・3号住居址炉、埋甕、単独出土土器

(6)第6号住居址（第8図）

3地区の中央やや北東寄りに位置し、南東壁の一部が暗渠に破壊されているが、ほぼ全容を捉えられた。規模は長軸3.3m、短軸2.7mを測り、平面形は不整楕円を呈する。壁高は最大14cmを測るが、北側は高く、南側は低くなっている。覆土は一層でローム塊が少量混入する黒色土で、拳大の石と遺物も若干混入する。床面は不明瞭で、南半部に人頭大までの石が突出し、土器も見えている。このレベルから下には遺物がなく、ここを生活面として捉えた。

遺物は土器と石器があり、いずれも多くはない。曽利Ⅲ式期のものと、縄文時代早期末葉の繊維土器があり、量的には後者が中心となる。これらの撚糸文・条痕文形の土器は3地区上段、3住北東部から本址周辺に多く見えていた。さて本址の時期であるが、遺構の規模・覆土の様子が付近にある第4・7号住居址とよく似ており、早期の遺物は混入したものと考える。従って縄文中期後葉の時期と予想する。

(7)第7号住居址（第8図）

3地区のほぼ中央に位置する。規模・平面形は長軸3.2m、短軸2.7mの不整方形を呈す。壁は緩やかな状況で、最大壁高は東側で18cmであった。覆土は主に黒色土であるが、北側で漆黒色土が確認されている。床面は堅さもなく判然としないが、南東部に粘質黄色土がみられ、その上面を生活面として考えたい。住居内の施設は何もみつからない。

遺物はほんのわずかで、礫の混入も特に少ない。土器は曽利Ⅲ式期の様相を見せており、縄文時代中期後葉に属しよう。

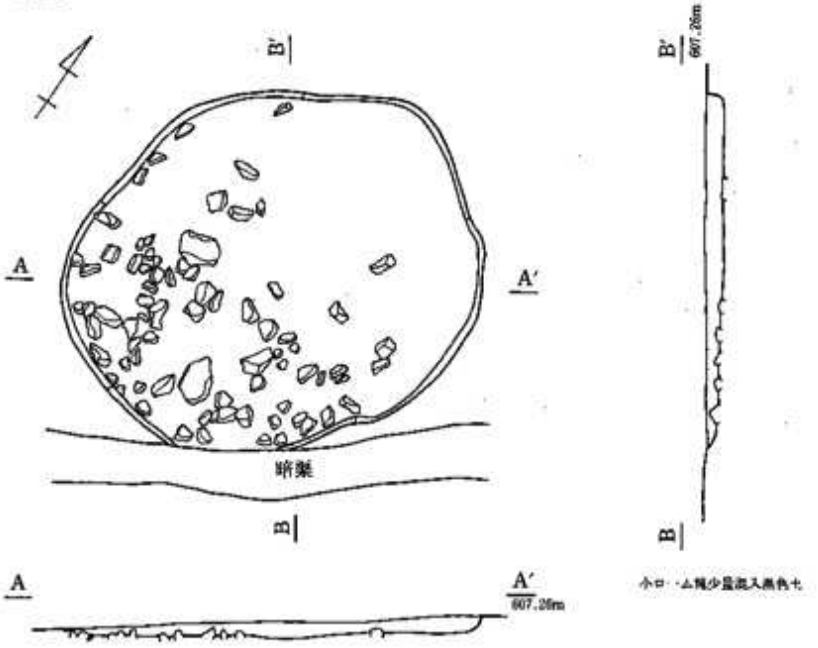
※単独出土土器（第7図）

10余点の遺物を得ているが、図化できるような個体は以下の2点であった。

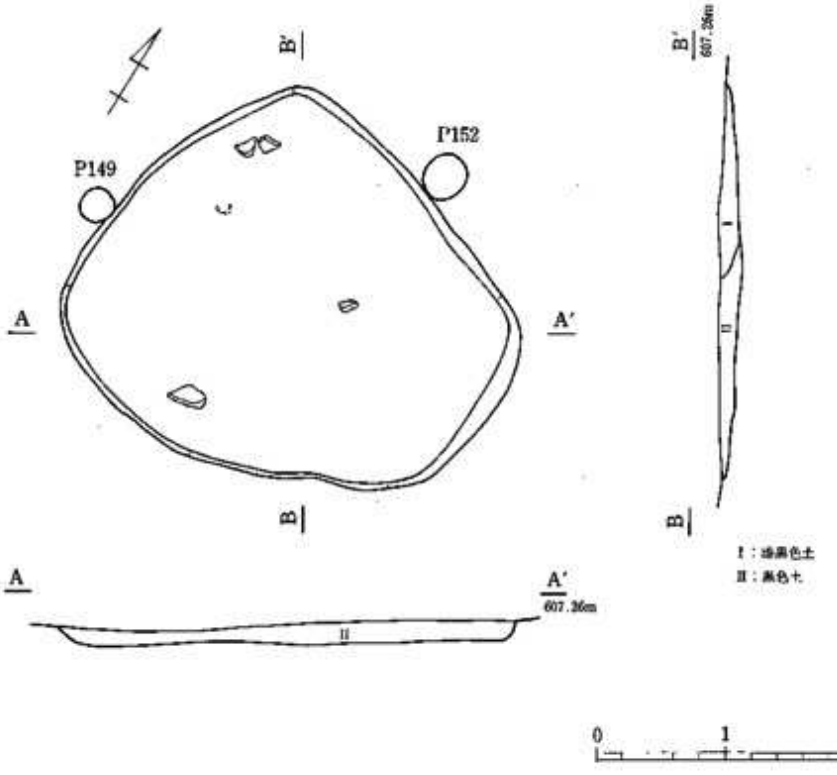
No.11は第6号住居址の南外1.7mにあり、住居址と同じ検出面で確認した。土器は深鉢の胴部で、上部は検出作業時に重機で破壊している。底部は故意に打ち欠いて埋設しているが、その掘り方は検出できなかった。

No.12は第2号住居址の南西2mのところにあり、黄色ローム中に直径32cm、深さ28cmのピットを設け、深鉢土器の底を抜き正位に埋めている。口縁部側は重機により欠いたため、不明である。土器周囲の土は堅く、掘り方、土器内部の土層は人為的な埋没を示している。付近にはP_{36}～P_{40}の5個の穴が巡り、これらをピットとして住居址が存在した可能性もある。なお遺物は縄文時代中期末葉のものと考える。

6住



7住

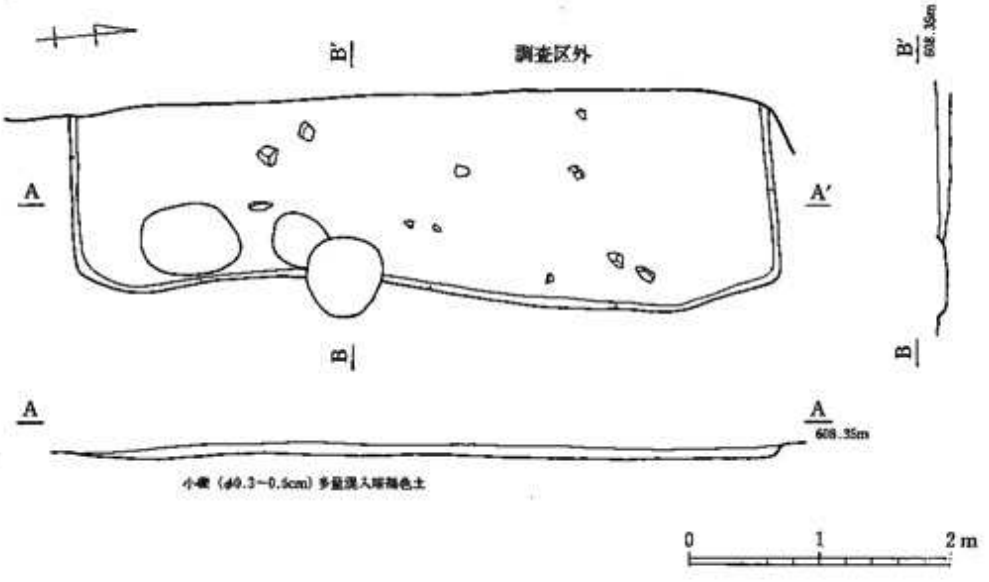


第8図　第6・7号住居址

(8)第８号住居址（第９図）

２地区の西隅に位置する。地形は西に向かって傾斜しているところで、後の水田耕作により遺構の西側が既に破壊されている。確認できたのは全体のおよそ⅓程度であろうか。本址南部には後世のピット３個が存在する。規模は現況で南北5.5m、東西は1.7mのみであった。平面形はやや不整の方形を呈するのであろうか。覆土は小礫（径３～５mm）が多量に混入する暗褐色土の単層である。わずかに残る壁はややなだらかな傾斜を示し、低く、最大高10cmを測る。床は礫混入の黄色土であり、平坦であるが堅さはない。本址に伴う炉・ピット等の施設は検出されていない。

遺物は土器と石器がある。土器は小片まで含め30点余りと少ないながら、床面から得たものが多く、壺・鉢などが見えている。これらの遺物は弥生時代から古墳時代への過渡的な様相を呈するものである。

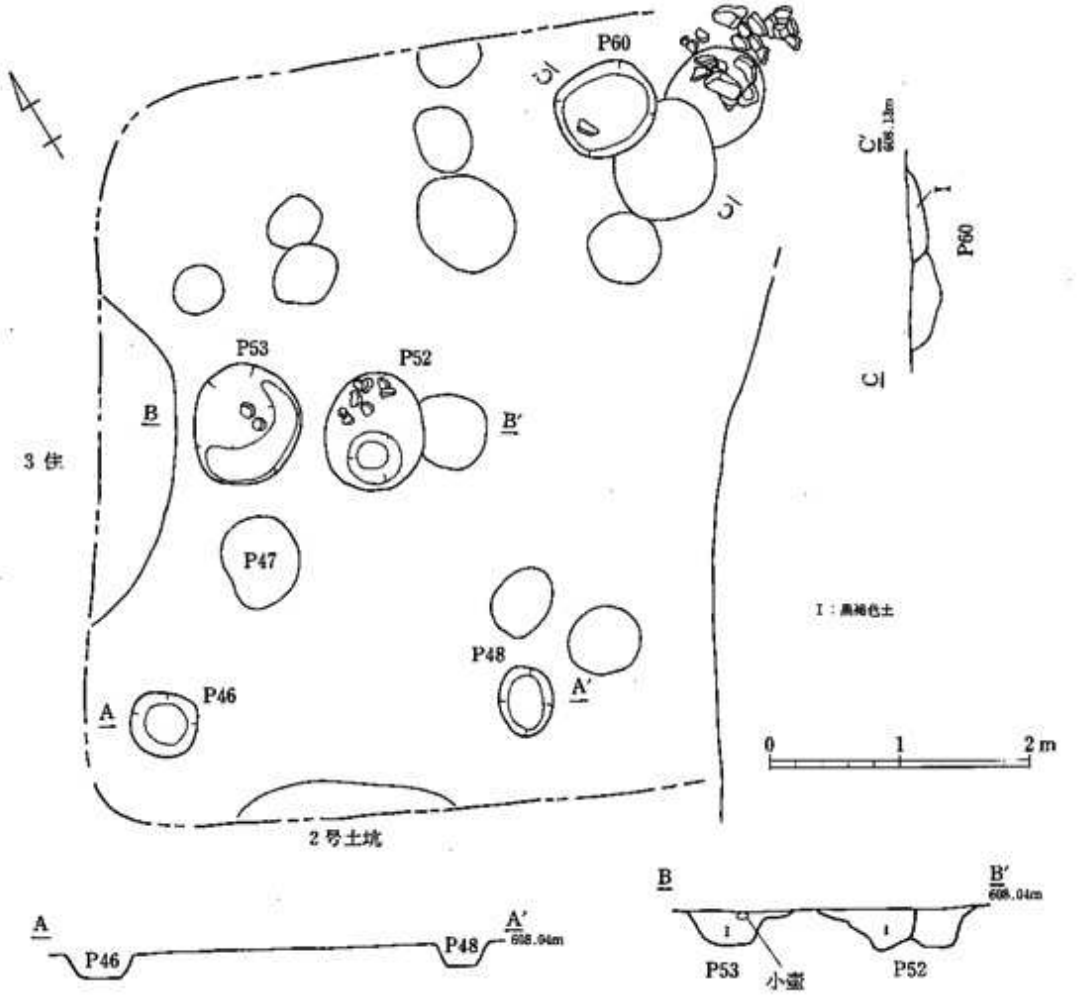


第９図　第８号住居址

(9)第９号住居址（第10図）

３地区の第３号住居址の南東では検出面及びピットの中から古墳時代の遺物が出土した。これらの総量は少ないものながら、この場所にのみ限定されたため、その範囲を住居址として想定したものが本址である。検出面の土色は山の小角礫を多量に含む黄色のロームで、ピットの覆土は黒褐色土と明瞭なものである。ピットは番号を付してある５個〔P_{46}・P_{48}・P_{52}・P_{53}・P_{60}〕がこれにあたり、このうちP_{53}の覆土上層にはミニチュア土器がみられる。想定する住居の広さは、5.9×5.0m以上（南東部は調査区域外）となる。なおP_{47}中には焼土が多量に残るが、縄文時代の遺物が多く、本址の炉とは考えにくい。

出土遺物には甕・高坏などがある。これらの遺物は古墳時代中期末頃のものである。



第10図　第９号住居址

2．土坑・ピット（第11図・第12図）

土坑　2地区で第1号、3地区で第2～4号、1地区で第5～6号の計6基である。各々の平面形と規模及び所見は、以下のとおりである。

1．円形、228×211×23cm、ここは耕作土を除去すると山土である礫を含む暗黄色土が現われ、これを検出面としている。端正な円形を呈し、黒褐色土の覆土中には拳大～小児頭大までの石が多く含まれ、縄文時代中期の土器片も少数ながら出土した。

2．楕円形、209×130×30cm、第3・4号とともに3地区上段に位置する。黄色土中に掘り込まれ、明瞭に検出した。南北に長い遺構で、底部は中央が低く、周囲に段をなしている。北部には40×20cmという大石が入っていた。遺物は縄文時代中期の土器が少量である。

3．楕円形、(133)×86×35cm、南に2個のピット、北に第4号土坑と重複する。覆土上層中に深鉢底部が見られる。遺物は縄文時代後期初頭のものである。

4．楕円形、(156)×114×50cm、北側は斜面下方となる。中央部が一段低い二段底となっている。遺物は多く、土器のほか石器も見られた。縄文時代中期末葉のものである。なお土器には古墳時代のものもあるが、検出面近くであり、後世の混入品と考える。

5．不整楕円形、215×120×28cm、この辺の検出面は淡い褐色土で、黒色土を覆土とする。遺構は東西に長く、底部は中央が緩やかに窪む。遺物も多く、これらの中には時期は縄文時代中期中葉あるいは後葉のものがある。

6．楕円形、191×136×12cm、第5号土坑の南東3mに位置する。西側は暗渠により破壊されている。遺構は浅く、中央に40×20cmの平坦な石が黒色土の覆土中に見える。また北西からは拳大の石が数個まとまって出土した。遺物は縄文時代の土器が少量である。

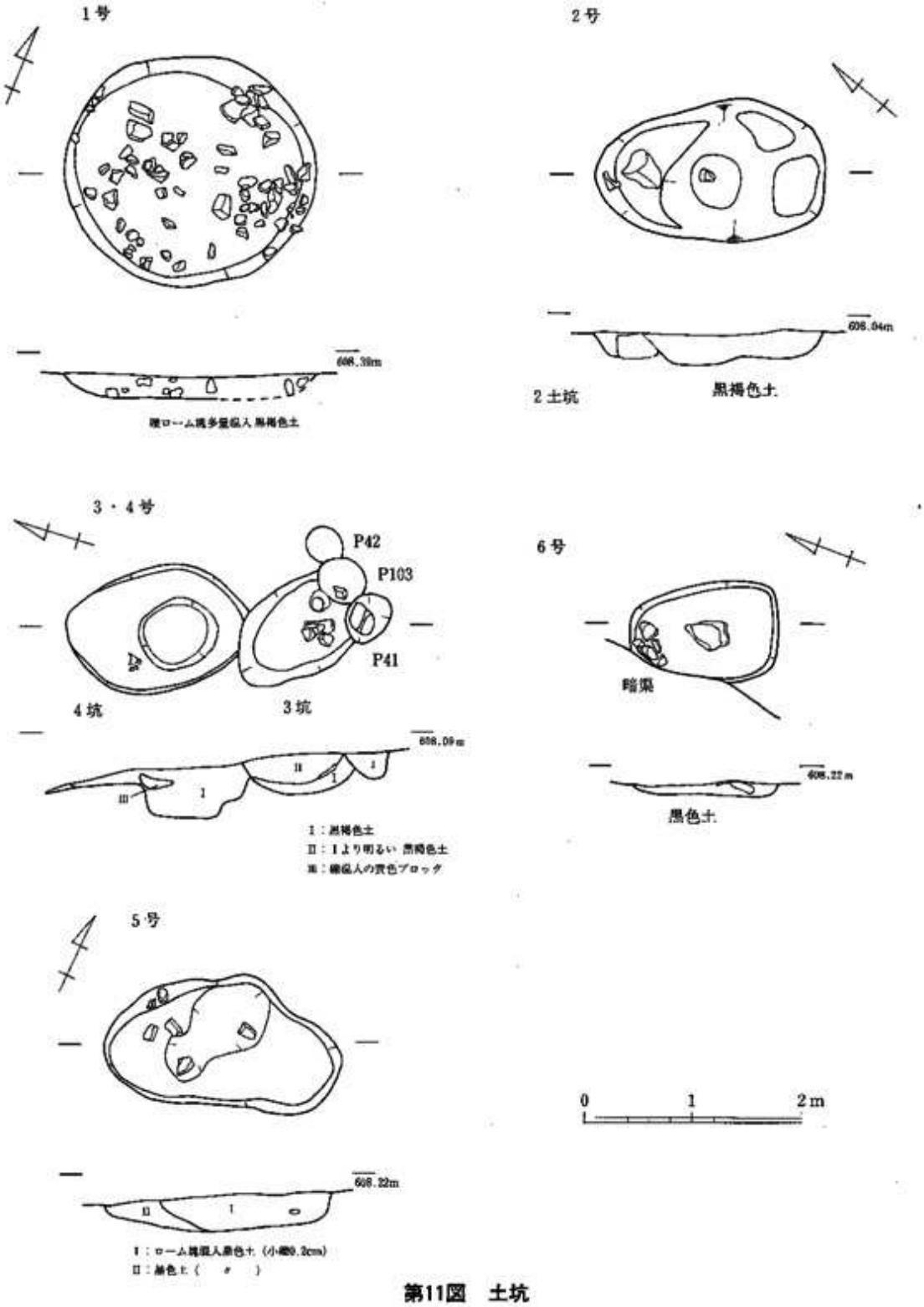
ピット　これらは1地区10、2地区66、3地区上段43、下段55の合計174個である。本書にはこのうち特徴的なものを20個ほど掲図してある。ここではこのうちの幾つかについて触れることとする。

P_{33}は2地区北端に位置する。楕円形を呈し、96×62×6cm。検出の段階で、土師器の内黒椀と灰釉陶器の椀が見える。遺構の外にも土師器が転じていた。この状況から、平安時代後期の住居址の一部がこのように残ったものと考える。

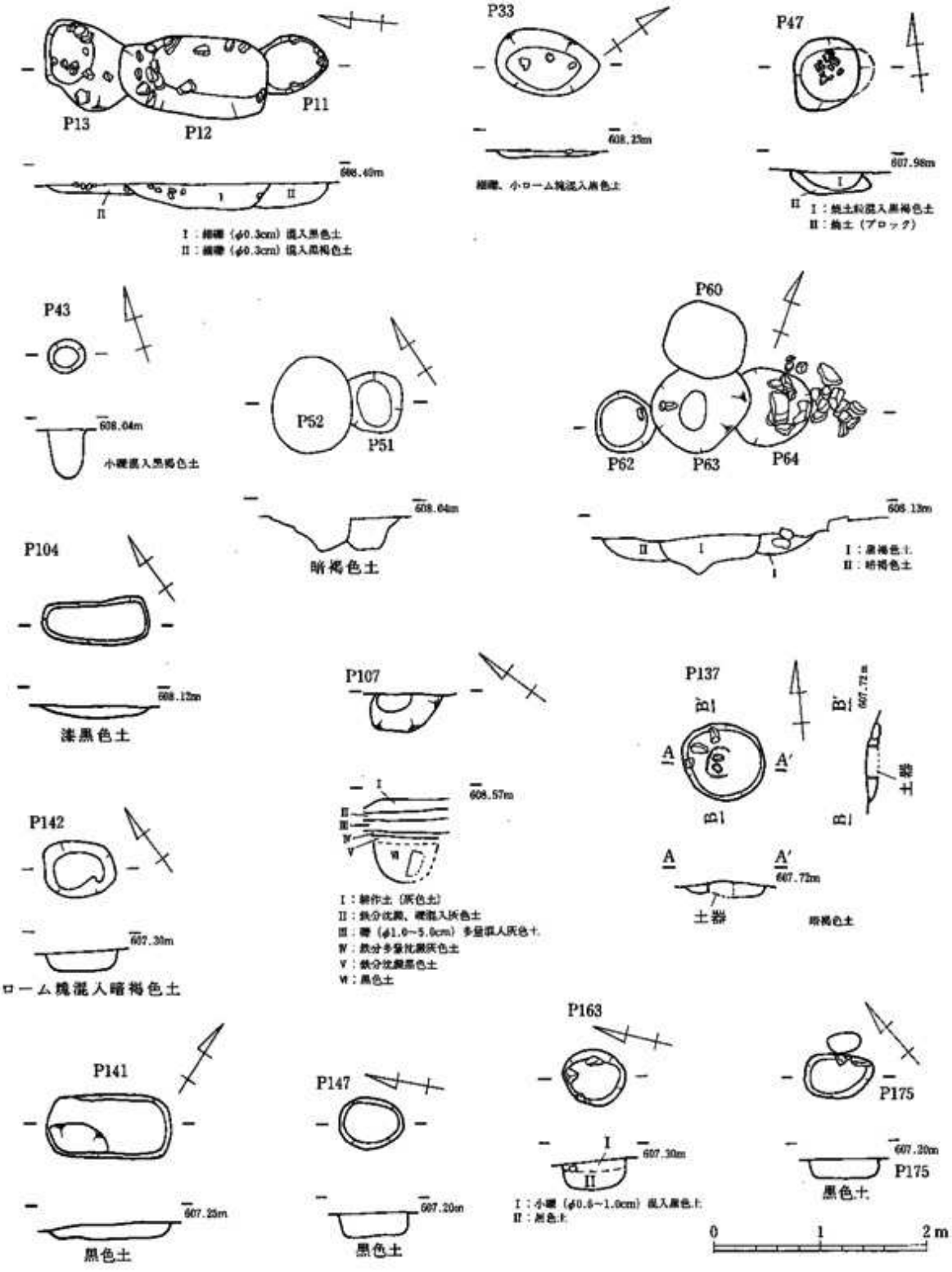
P_{47}は不整円形で66×58×21cm。底面にはブロック状となった焼土があり、袋状を呈す周壁東部は被熱して赤化している。ここは第9号住居址として、古墳時代の遺構を想定した場所であるが、遺物は縄文時代中期のものが主となり、同住居址の炉としては好ましくない。

P_{107}は1地区北西部にあり、80×55cm。北東部は発掘区外となる。覆土下層からは頭部を欠いた土偶の優品が出土した。

P_{137}は円形、76×74×11cm。中央に胴下半部を欠いた直径30cmの深鉢がピット底に密着して埋設されている。土器は⅓周程を欠き、上部も重機により欠かれた。遺物のあり方は、単独出土土器とよく似る。


1号
608.39m
2号
608.04m
2土坑
黒褐色土
3・4号
P42
P103
P41
4坑
3坑
608.09m
Ⅲ
Ⅱ
Ⅰ
Ⅰ：黒褐色土
Ⅱ：Ⅰより明るい 黒褐色土
Ⅲ：礫混入の黄色ブロック
6号
暗渠
608.22m
黒色土
5号
608.22m
Ⅱ
Ⅰ
Ⅰ：ローム塊混入黒色土（小礫0.2cm）
Ⅱ：黒色土（ 〃 ）
0
1
2m

第11図　土坑

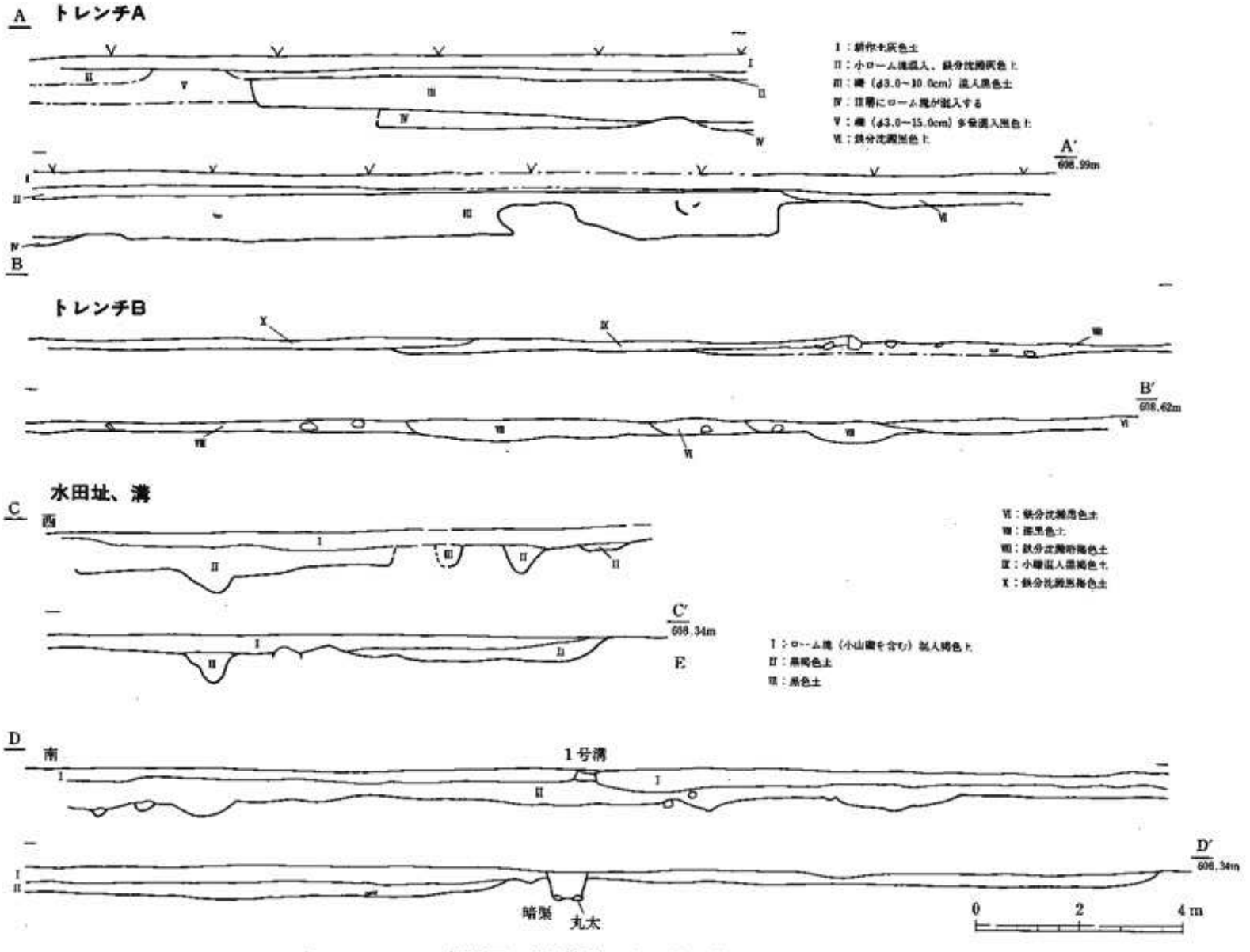

P13
P12
P11
608.40m
I：細礫（φ0.3cm）混入黒色土
II：細礫（φ0.3cm）混入黒褐色土
P33
608.23m
細礫、小ローム塊混入黒色土
P47
607.98m
I：焼土粒混入黒褐色土
II：焼土（ブロック）
P43
608.04m
小礫混入黒褐色土
P52
P51
608.04m
暗褐色土
P60
P62
P63
P64
608.13m
I：黒褐色土
II：暗褐色土
P104
608.12m
淡黒色土
P107
608.57m
I：耕作土（灰色土）
II：鉄分沈殿、礫混入灰色土
III：礫（φ1.0～5.0cm）多量混入灰色土
IV：鉄分多量沈殿灰色土
V：鉄分沈殿黒色土
VI：黒色土
P137
607.72m
土器
607.72m
土器
暗褐色土
P142
607.30m
ローム塊混入暗褐色土
P141
607.25m
黒色土
P147
607.20m
黒色土
P163
607.30m
I：小礫（φ0.5～1.0cm）混入黒色土
II：黒色土
P175
607.20m
P175
黒色土
0
1
2 m

第12図　ピット

3．水田址・溝（第13図）

これらは２地区南半部に位置する。ここは方形落ち込みの北東部を検出したため、急遽調査区を拡張したところである。方形の落ち込みは水田址と思われる。この北西部には弥生時代終末期の第８号住居址がある。水田址は現況で東西10m、南北21mを確認した。黄色土中において黒褐色土を覆土としている。遺構はさらに南と西に延びているが、南は調査区外となり、また西はこれより２mほど外側で段を成している。現在の水田が造られたため、削られて低くなり、失われているようである。本址中には北部に材木を入れただけの暗渠が東西に走っている。それはちょうど遺構の東端に２個の大形ピットを設けてあり、そこから始まっている。また南東部には直径60cmのピットのほか、直径・深さ各20cmという小ピットが20個余りみえるが、これらはすべて水田より新しいものであり、遺物は皆無であった。土層をみるに、遺構はⅠ・Ⅱ層に分かれ、下部の２層目が古いもので、上部第１層が上述した規模の新しいものである。下部の古い水田を見ると、耕作土床面には緩やかな起伏があり、規模も南北15mと上部（新）のものに比べて小さく、暗渠手前までとなっている。また東西トレンチには直径80cmのピットのようなものもみえているが、断面だけの確認のため全容はわからない。一方新しい水田址はこの上に乗り、耕作土床面も安定している。小規模なものから拡張して大きな水田としたが、後になり、山側からの湧水に対処して設けたものが、上述の東西の暗渠である。出土遺物は縄文時代のものがわずかで、土師器・須恵器・陶器・磁器などがある。

溝は１号のみである。この他に暗渠も１・３地区内に多数みられるが、これらのほとんどは検出時に除去したため、一部を全体図に示しているが、ここでは触れない。本址は水田址中の南部にあり、東の調査区外からまず西へ4.5m、北へ曲がり6.5m、途中に水溜めのような小ピットを１個設けている。さらに西へ7.0mと続き、浅くなって検出面に消えている。溝幅は平均20～30cmで、深さ４cmと浅い。土層を観察すると、さらにこの下部に古い溝（第２層）があることがわかる。この古い溝は新しい上部の水田により幅が狭められているため、深さは現状12cmであるが、元の溝幅は新しいそれに比べ、倍以上のものであったと考えられる。遺物はほとんどない。新旧の溝下部はやや砂質となり明瞭であるが、あまり長期間にわたったものではないようである。この溝と水田址とを照らし合わせると、各々新旧の組み合わせを考えることができる。さてこれらの遺構の時期であるが、明確にはわからない。下部（旧）の水田は歴史時代以降であり、上部に設けられた暗渠は近世になってからのものと考えると、中世の一時期の水田址となろうか。



第13図　土層観察、水田址、溝

第3節　遺　　物

1　土　器

(1)縄文土器

早期末～前期初頭の土器（第21・22図）

本遺跡の主体は中期であるが、この時期の土器片も少量ながらまとまっている。この土器群を施文方法で大別すると縄文及び撚糸文系（1～37)、絡条体圧痕文系（38)、条痕文・無文系（他の土器の一部である可能性もある：39～41)、沈線文系（42・43)、薄手指圧痕条痕文系（46～50）等があり、他に無文系等も認められるが図示はしていない。これらの一群中で主体を占めるものは、縄文及び撚糸文系で、次に無文系・条痕文系である。薄手指圧痕条痕文系は東海地方に中心をもつ土器（塩屋式・木島Ⅲ式）である。

この土器群のほとんどは、東海系の薄手指圧痕条痕文系の一群を除き、胎土中に繊維を含んでいる。器形の判明するものはほとんどないが、1～5は縄文及び撚糸文系の口縁部、44・45は縄文・撚糸文系ないしは条痕文系の尖底部、39・41は条痕文系の尖底部、46は薄手指圧痕条痕文系の口縁部である。口縁部は、東海系の46を除き、緩やかに外へ開く平口縁の破片を思わせるが、3・15(口縁端部が欠けている）は口縁が肥厚化し、有段状で、他の同期の遺跡出土例から小突起が付く可能性も考えられる。しかし基本的には、平口縁である。46は4単位の波状口縁であろう。尖底部は、ある程度尖るもの（39・41)、尖底の角度が割合鈍角で、丸底に近いもの（44・45)、の二種がある。

これらの土器群は、主に3地区から出土、量的には少ないが6号住居址出土土器のうちではこれらがほとんどを占めている。これのみで6号住を該期と決めつけることは問題であろうが、当遺跡からの遺物は時期的には、ほぼ一時期にまとまるものと考えてよい。そして、近年同類の資料は、長門町中道遺跡（児玉1984)、岡谷市梨久保遺跡（小沢1986)、茅野市高風呂遺跡（守矢1986)、松本市坪ノ内（新谷1990）など充実し、徐々にこの時期の土器についての様相が明確となってきた。今回、主体となって出土した縄文・撚糸文系の土器群は、「縄文施文尖底土器」と呼ばれるもので、これについては中道遺跡（児玉1984)、高風呂遺跡（守矢1986）などでその変遷が示され、ある程度整理されつつある。松本平においては、三郷村黒沢川右岸遺跡、松本市旧射的場西遺跡・坪ノ内遺跡でこれに類似する資料が検出されている。これらを総合すると「縄文施文尖底土器」は、東海地方編年石山式～塩屋（木島）式が伴出することが中南信地方で多く、だいたいその時期にわたって使用されたものらしい。本遺跡のこの土器群に伴出した東海系土器群も塩屋式であり、塩屋式に併行した土器群であると考えられる。(本遺跡に近い坪ノ内遺跡でも、石山式、天神山式、塩屋式が伴出して多量の同資料が出土している。)

参考文献

児玉卓文　1984　「長門町中道」　長門町教育委員会

宇矢昌文 1986 『高瀬昌流遺跡』 茅野市教育委員会
小沢由雪利 1986 『梨久保遺跡』 岡谷市教育委員会
新谷和孝 1990 『坪ノ内遺跡』 松本市教育委員会
宇矢昌文 1990 『芥沢遺跡』 茅野市教育委員会

中期中葉の土器

遺構に伴うものは1地区の第5号土坑から出土している数片のみで、他は3地区の検出面からのものが多い。器形が復元できる破片は少なく、ほとんど拓影で図示した。概観すると、勝坂式の横割区画文がほとんどで、少量の縦割区画文や平出第三類A土器が存在する。器種は深鉢がほとんどである。時期的には下総考古学会の編年のII期（井戸尻編年の新道期）に属すると思われるものと、中葉終末段階のものが多い。第17図52、拓影第24図39、第28図159などが前者、第17図51、18図56、第28図156～158、163などが後者の資料である。平出第三類A土器の資料には、第24図32、第28図166などがあるが、いずれも小片で詳細な時期は不明である。第17図50は有孔鍔付土器の破片である。

中期後葉の土器

遺構内外より多量に出土している。中葉末から続く古い様相をもつものから終末まで各段階のものがあるが、量的には曽利III式期頃のものが最も多い。唐草文系の土器が主体で、少量の曽利、加曽利E系の土器を伴う。器種別では深鉢が多い。第4号住居址から出土した第15図12～14や、第17図53・54、拓影第24図30、25図58・67・68、28図170～173などは古い段階（曽利I式期）の資料である。この時期の資料は3地区に集中している。曽利II式期の資料は、第24図43・45など、第4号住居址の拓影資料の中に多くみられる。次の曽利III式期では、第2号住居址の良好な資料(第14図)がある。埋甕の深鉢(1)は、地文の条線文の上に沈線で文様を描いているが、他の深鉢（2～6）は区画後に沈線を入れており、土器の使いわけが行われた可能性がある。7は有孔鍔付土器が退化したもので、器形は壺に近い。孔は一か所のみである。9・10はさらに新しい段階のものの混入であろう。拓影（第23図1～19）で示した資料もすべてこの時期のものである。遺構外の資料も、3地区のものの中に多い。曽利IV式期の資料は拓影や実測図中の把手等の小破片中にみられるが、破片が小さく前後の時期との明確な判別が困難なものが多い。曽利V式期のものは、数点が小破片ながら1地区検出面より出土した（第16図28・29、第26図109・110・113）。

中期末～後期初頭の土器

第3号土坑と1地区からの資料がある（第16図26・30）。26の位置付けは小片のため微妙である。30は沈線で文様を描いているが、小破片のため、文様の展開は不明である。

(2)弥生土器

中期初頭と後期末の資料が出土しているが量は非常に少ない。中期初頭のものは第5号住に混入していた1片を拓影で示した(第25図81)。条痕をもつ壺の口縁部で端部上面に幅の太い刻みを連続させている。後期末の資料は第8号住居址（第19・25図）と検出面（第20図）から出土している。実測図5点（第19図78～81、第20図96)、拓影4点（第25図85～88）を提示できた。第25図85・88は

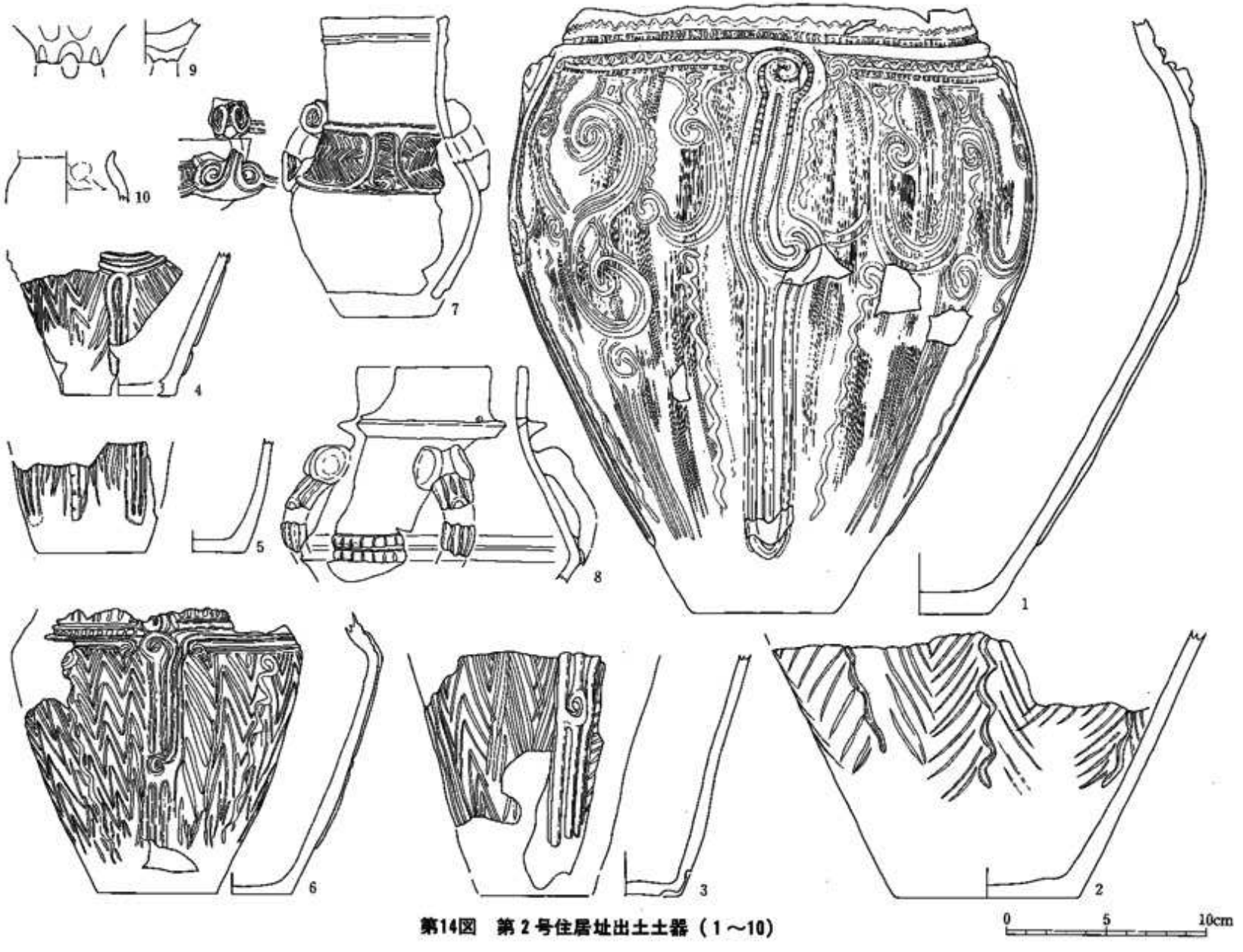
壷の頸部文様帯で櫛描T字文が描かれる。87も同文様帯だが櫛描原体が非常に細い。86はタタキの甕の頸部直下である。第19図78・81は壷の口頸部と底部、79は小型器台になるのであろうか。80はドーナツ状のあげ底をもち、鉢の一種と考える。第20図96は高坏の坏部上半で、内外面を赤彩されている。これらのうち第8号住居址からの出土品の中には古墳時代前期初頭的な様相の強いものがあり（第19図78～81、第25図86・87)、弥生土器として扱うのは適切ではないかもしれない。

(3)古墳時代の土器

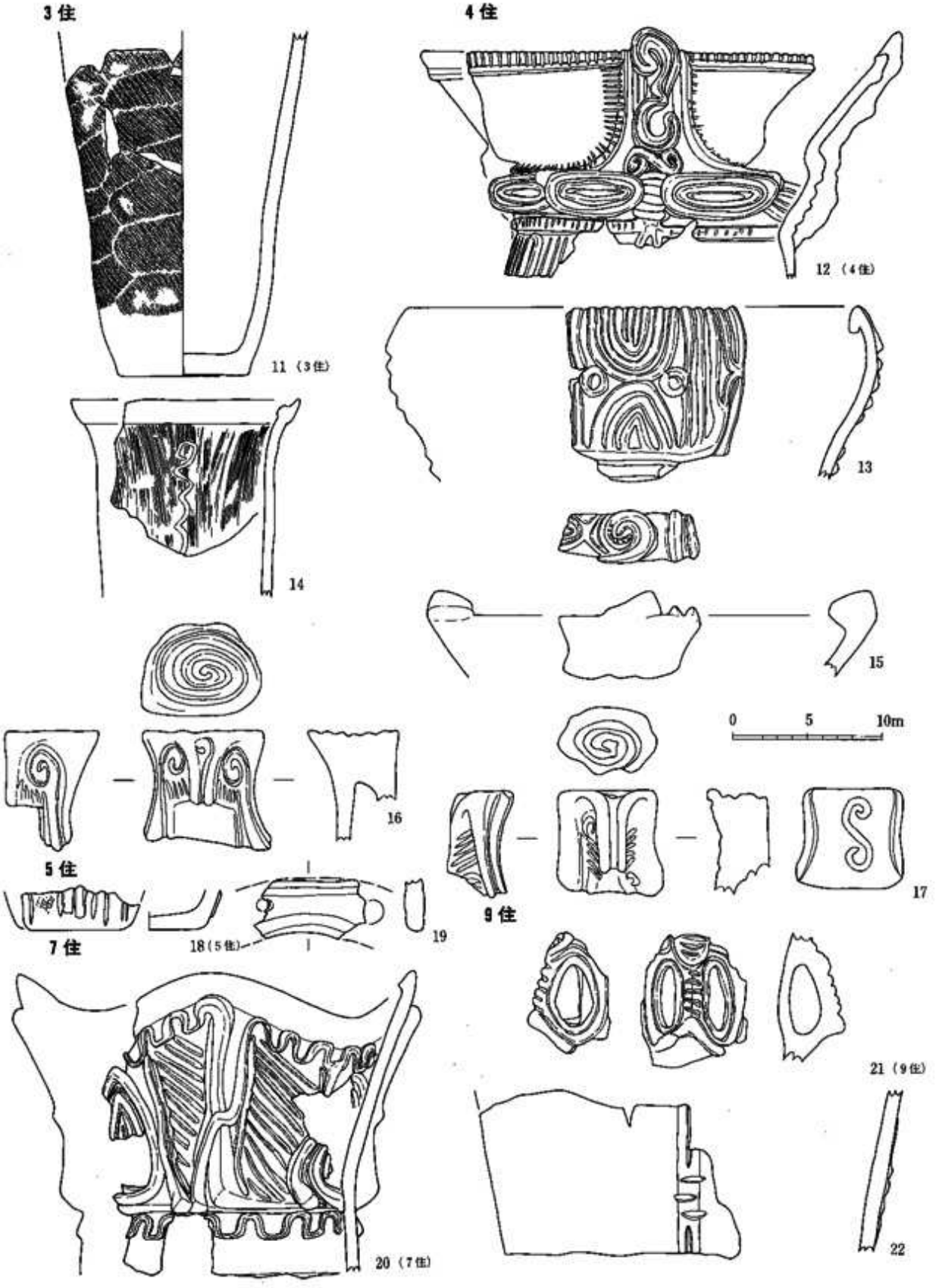
第19図83～87、第20図90～95・97～104の19点を図示できたが小破片からの復元で全容がよくわからないものも多い。各所から出土しているが、明確に遺構に伴うものは第9号住居址(第19図83～86)出土品にすぎない。他は検出面、包含層出土や混入品である。主な器種には壺（92・93・95・97)、甕（85・87・90・91・94・98)、高坏（83・84・103・104）がある。84の高坏の内面には黒色処理がある。時期は古墳時代中期に属するものがほとんどだが、87の甕は細かいハケメ調整と特徴的な口縁部から前期に遡り、第9号住居址出土品（83～86）は中期終末に位置付けられよう。

(4)平安時代の土器

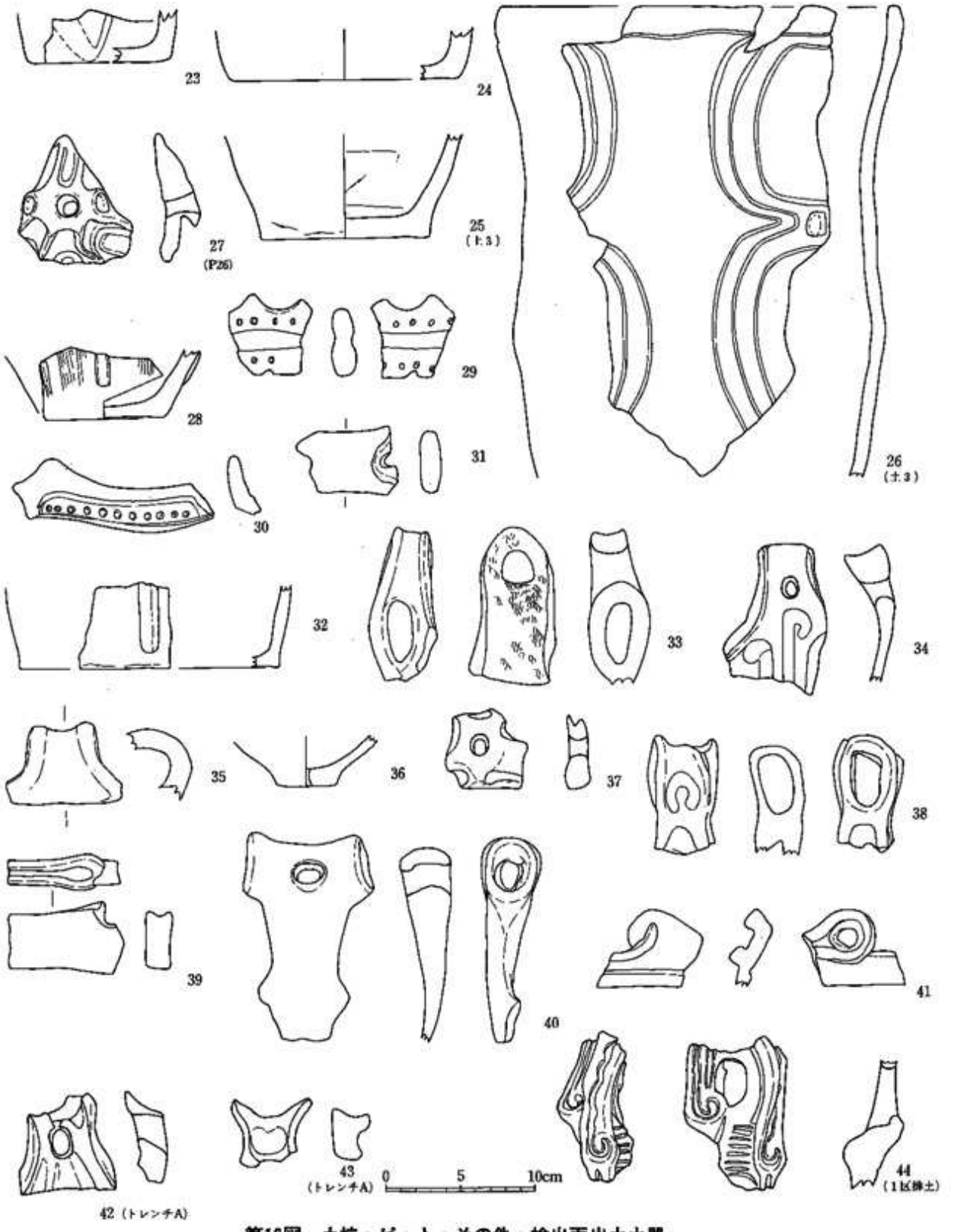
第19図82、第20図88・89・105・106が該当する。82が灰釉陶器の椀、88・89が土師器の椀、105・106が土師器の甕で、甕以外は10世紀前半、甕は9世紀中頃に比定できる。



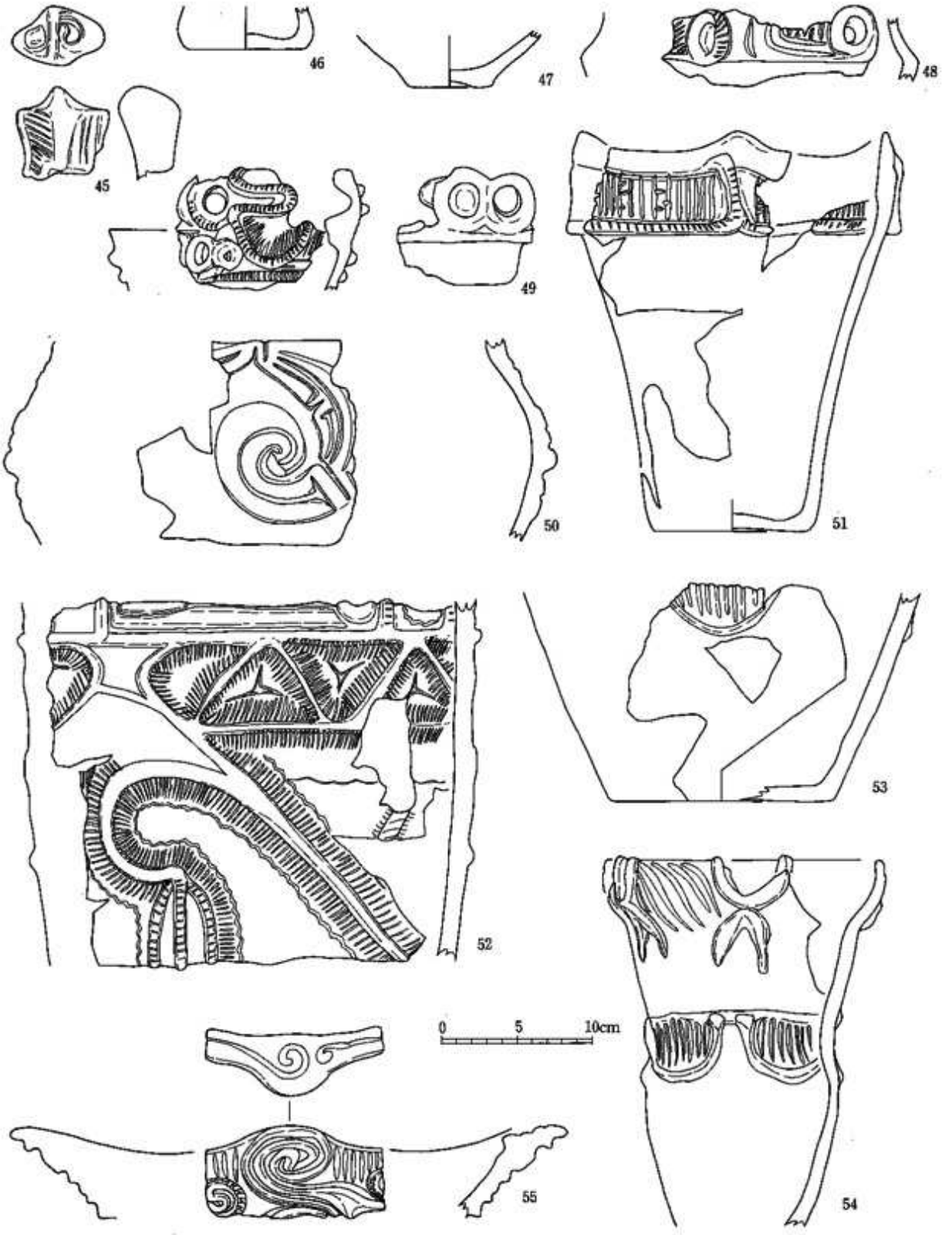
第14図　第２号住居址出土土器（１～10）



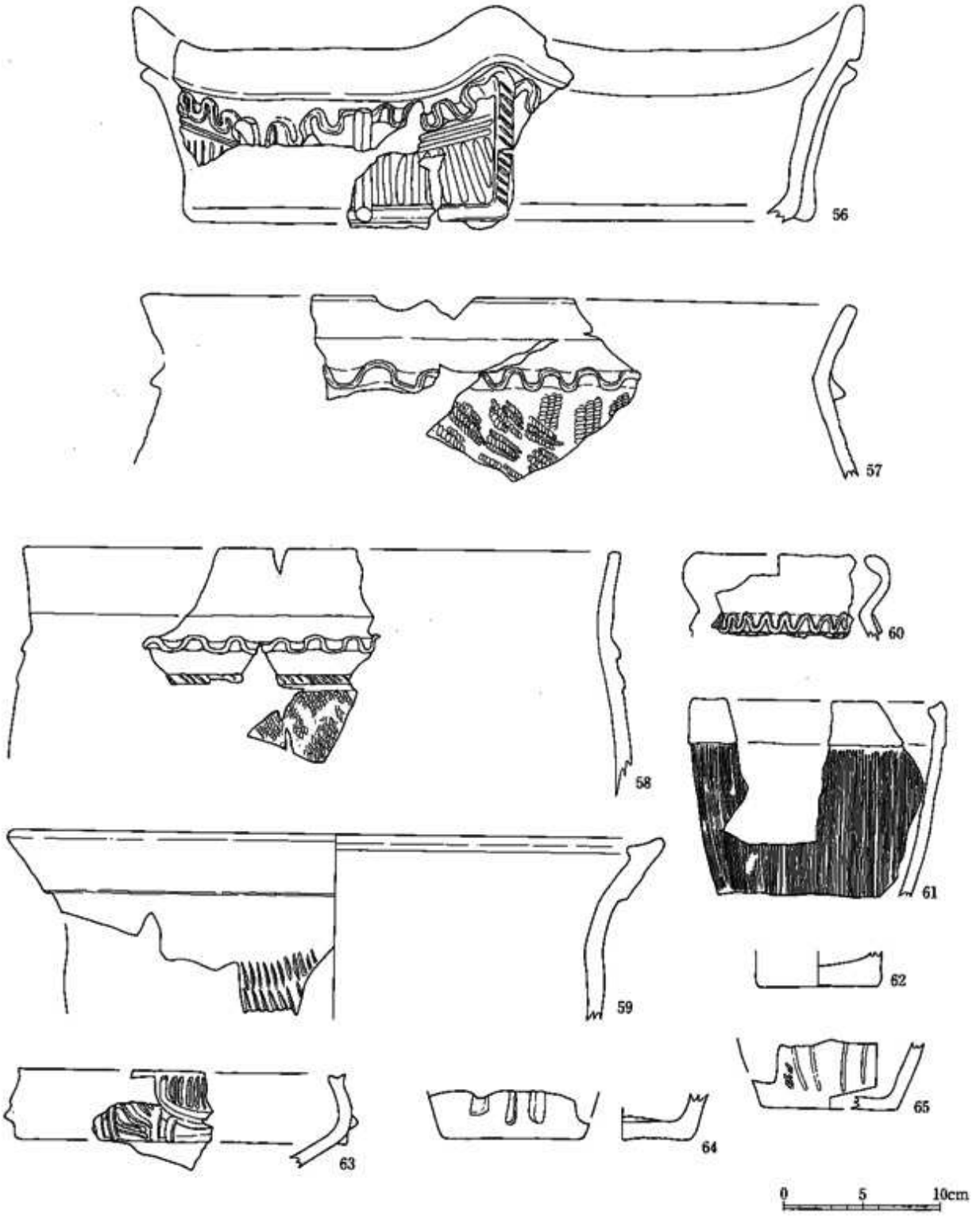
第15図　第3～5・7・9号住居址出土土器（3号：11、4号：12～17、5号：18・19　7号：20、9号：21・22）



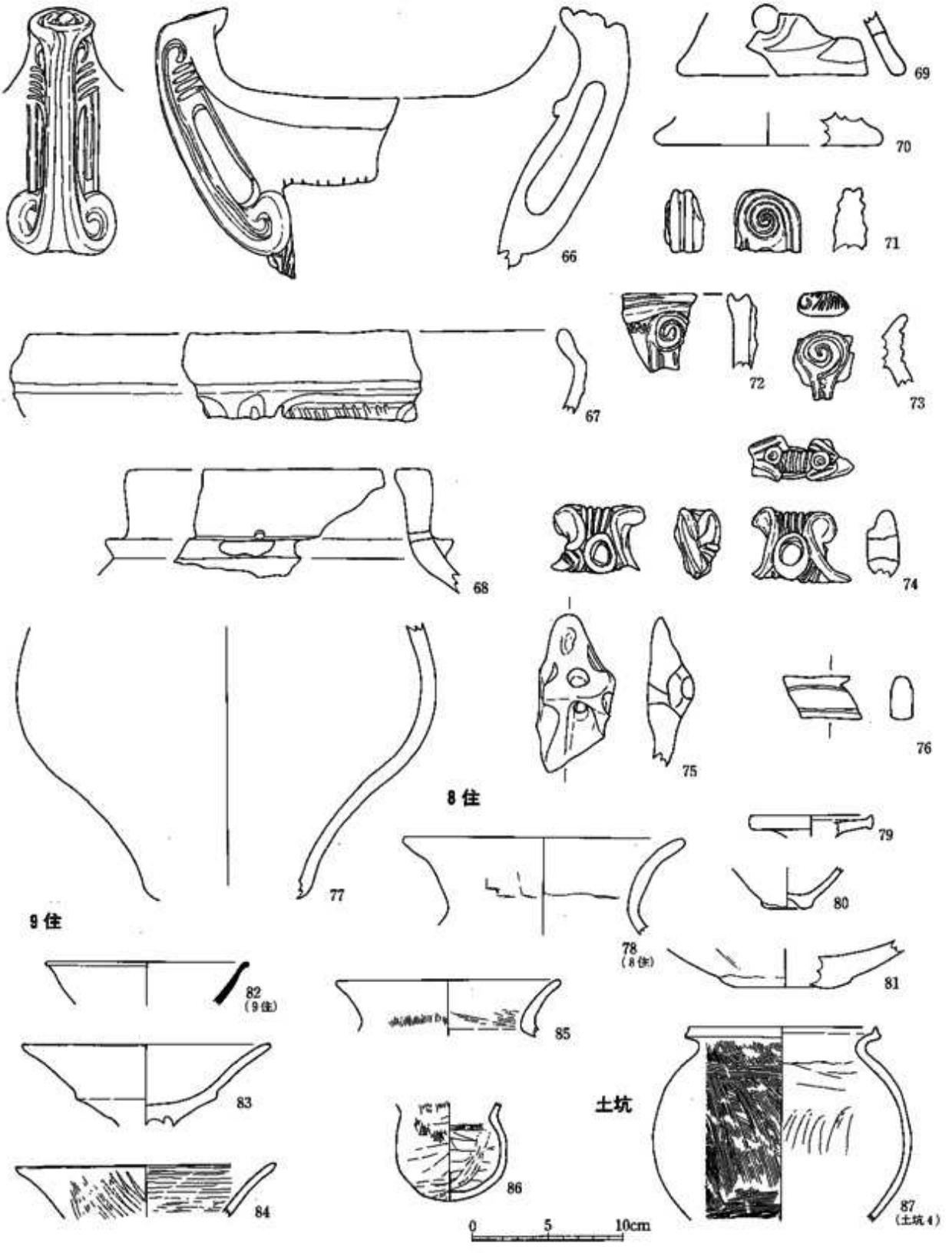
第16図　土坑・ピット・その他・検出面出土土器
（1区検：23・24・28〜41、土坑：25・26、ピット：27
トレンチA：42・43、1地区排土：44）



第17図　検出面出土土器（1地区検：45～47、3地区下段検：48～55）

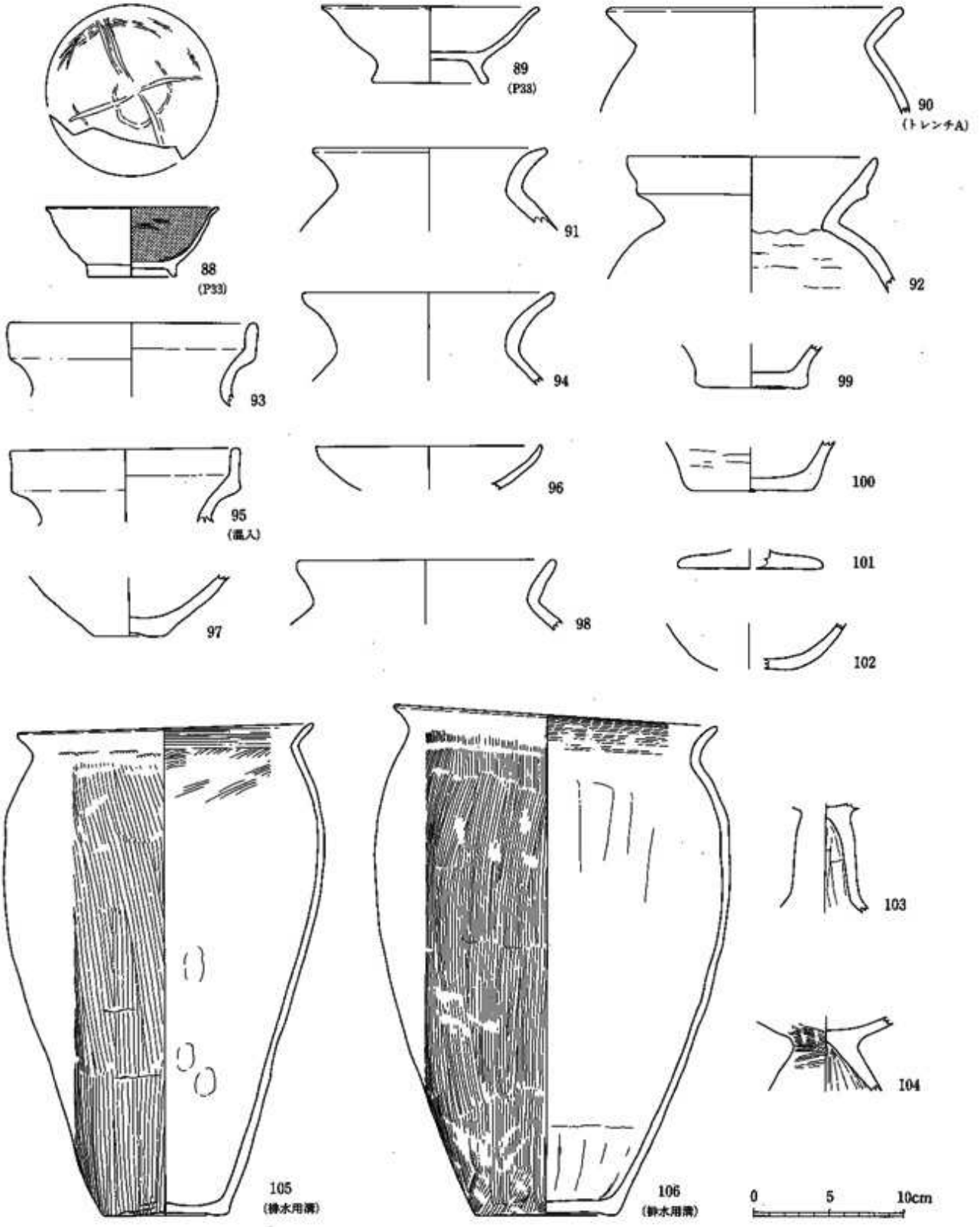


第18図　検出面出土土器（3地区下段検：56～65）

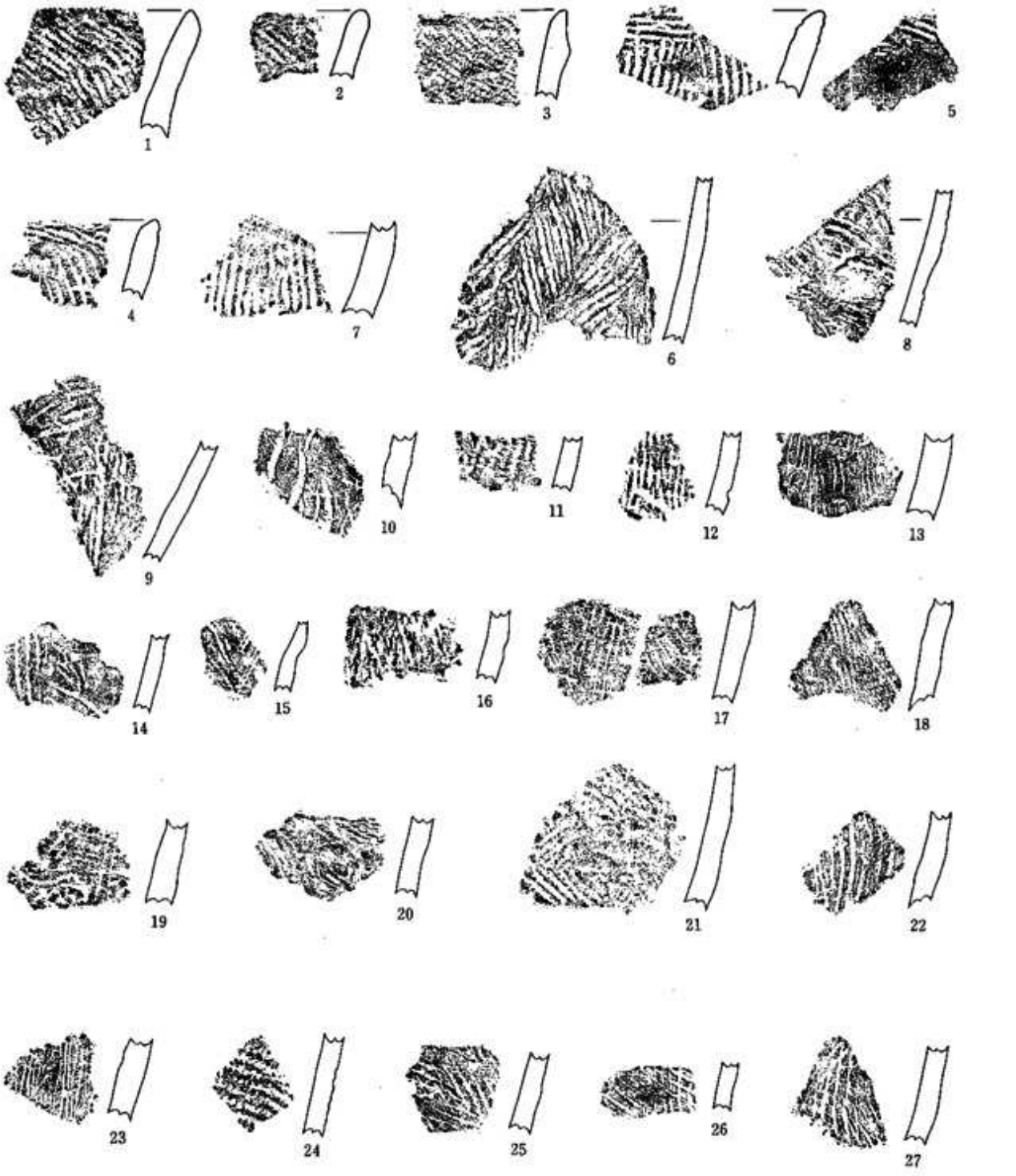


第19図　検出面、第8・9号住居址、土坑出土土器　（3地区下段検：66～77、8号：78～81
9号：82～86、土坑4：87）

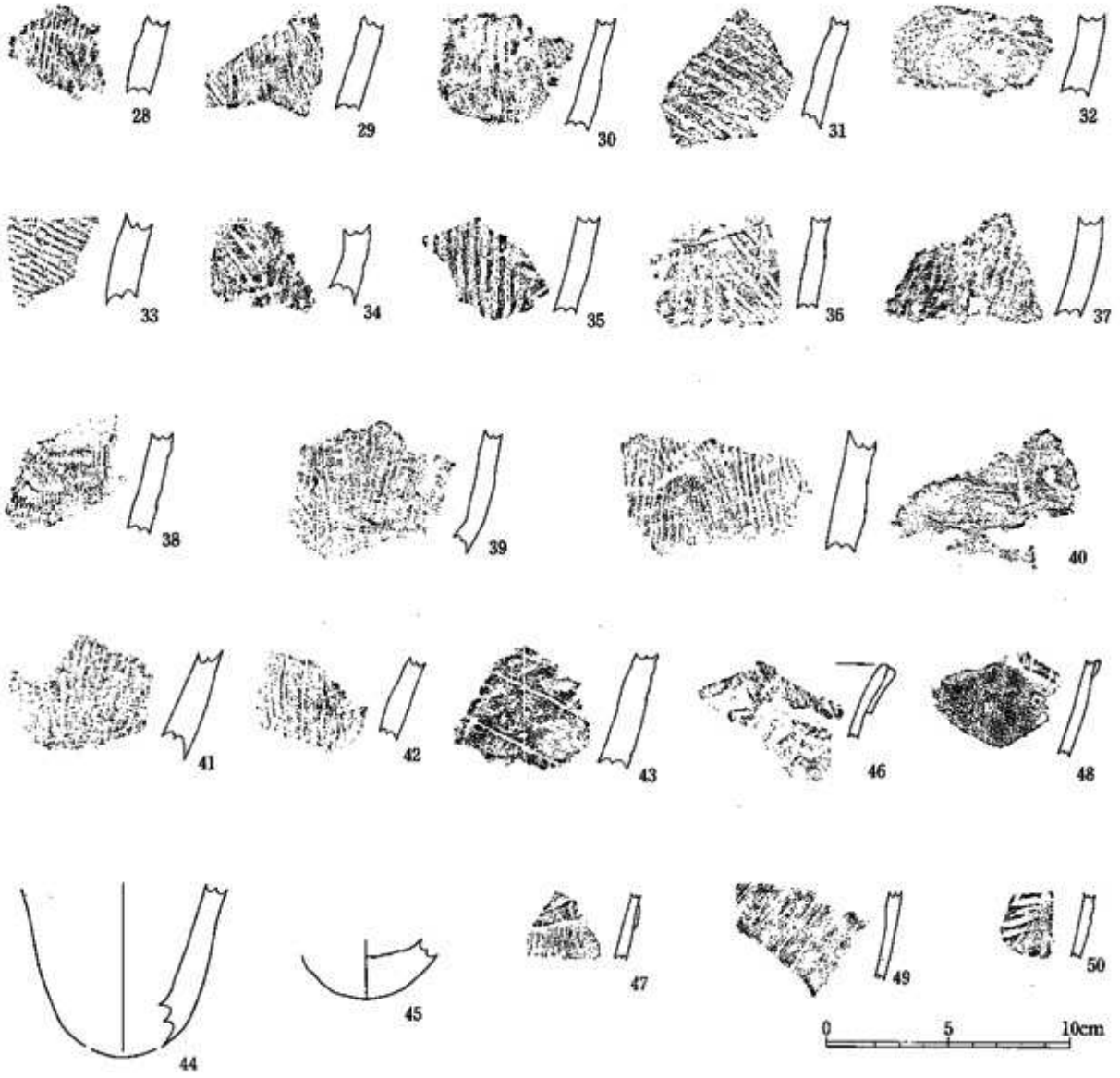
ピット



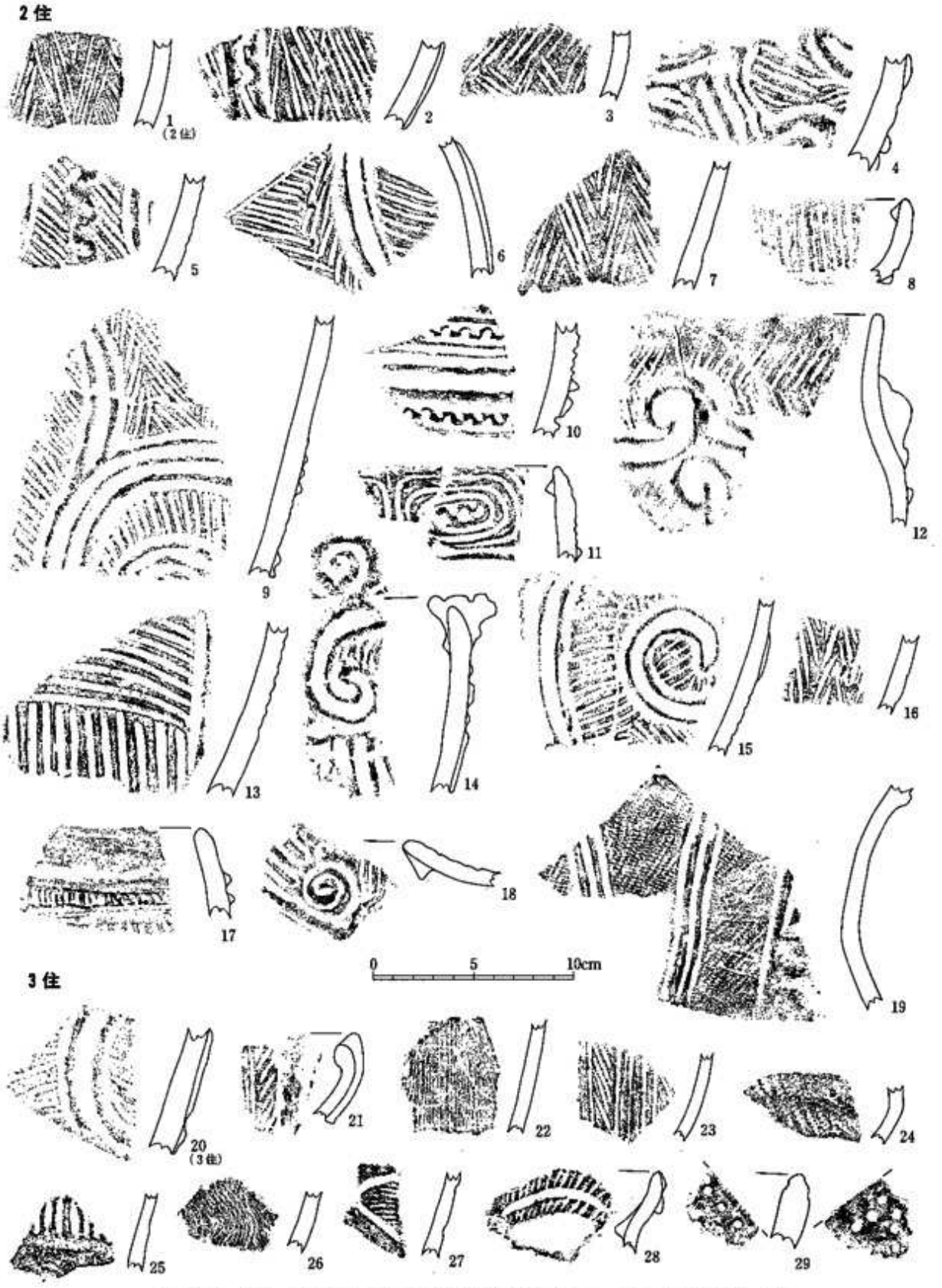
第20図　ピット、検出面、その他出土土器
（P33：88・89、トレンチA：90～94
混入：95～104、排水用溝：105・106）



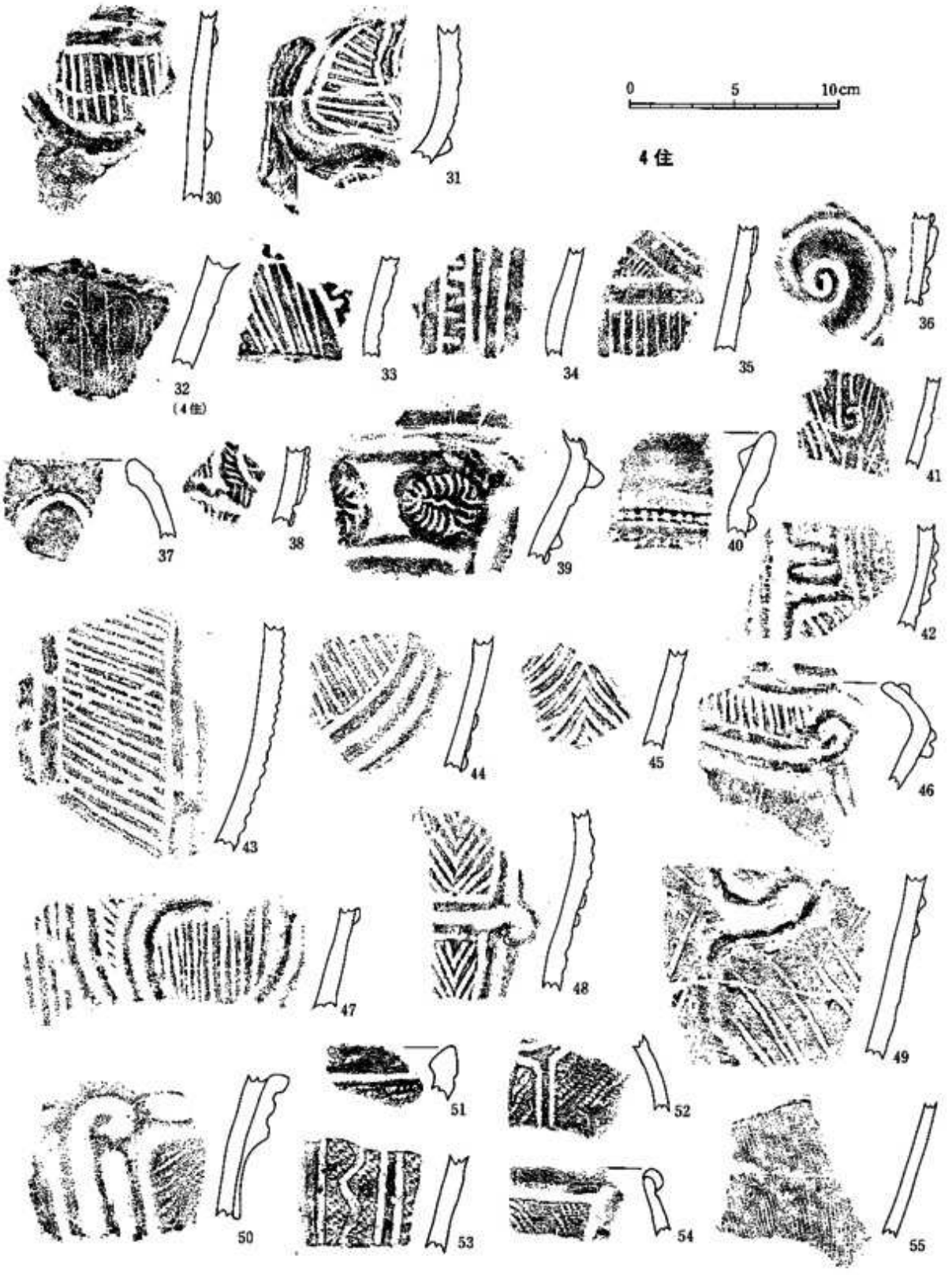
第21図　縄文早期末～前期初頭土器拓影(1)



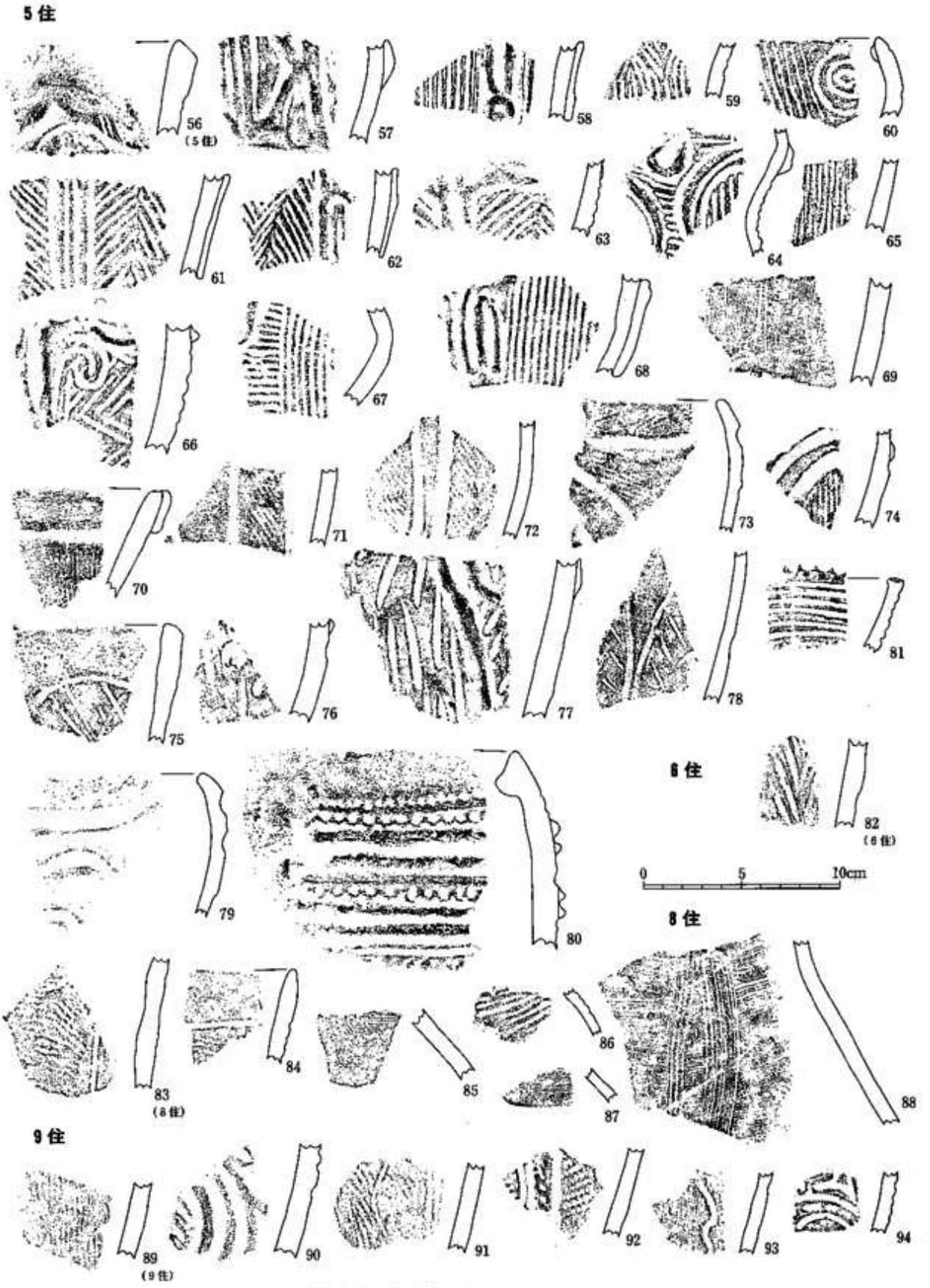
第22図　縄文早期末～前期初頭土器拓影(2)



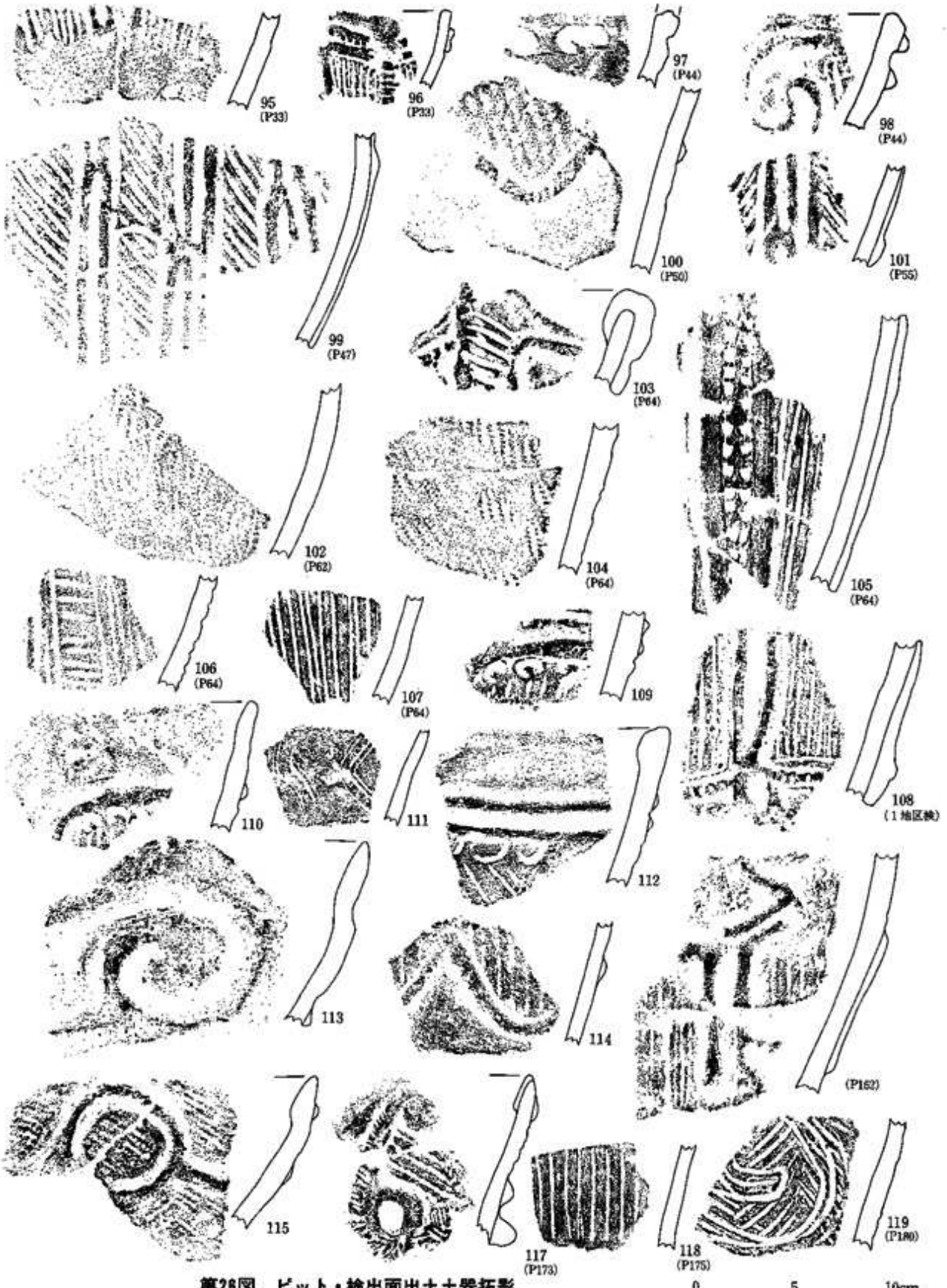
第23図　第2・3号住居址出土土器拓影（2号：1～19、3号：20～29）



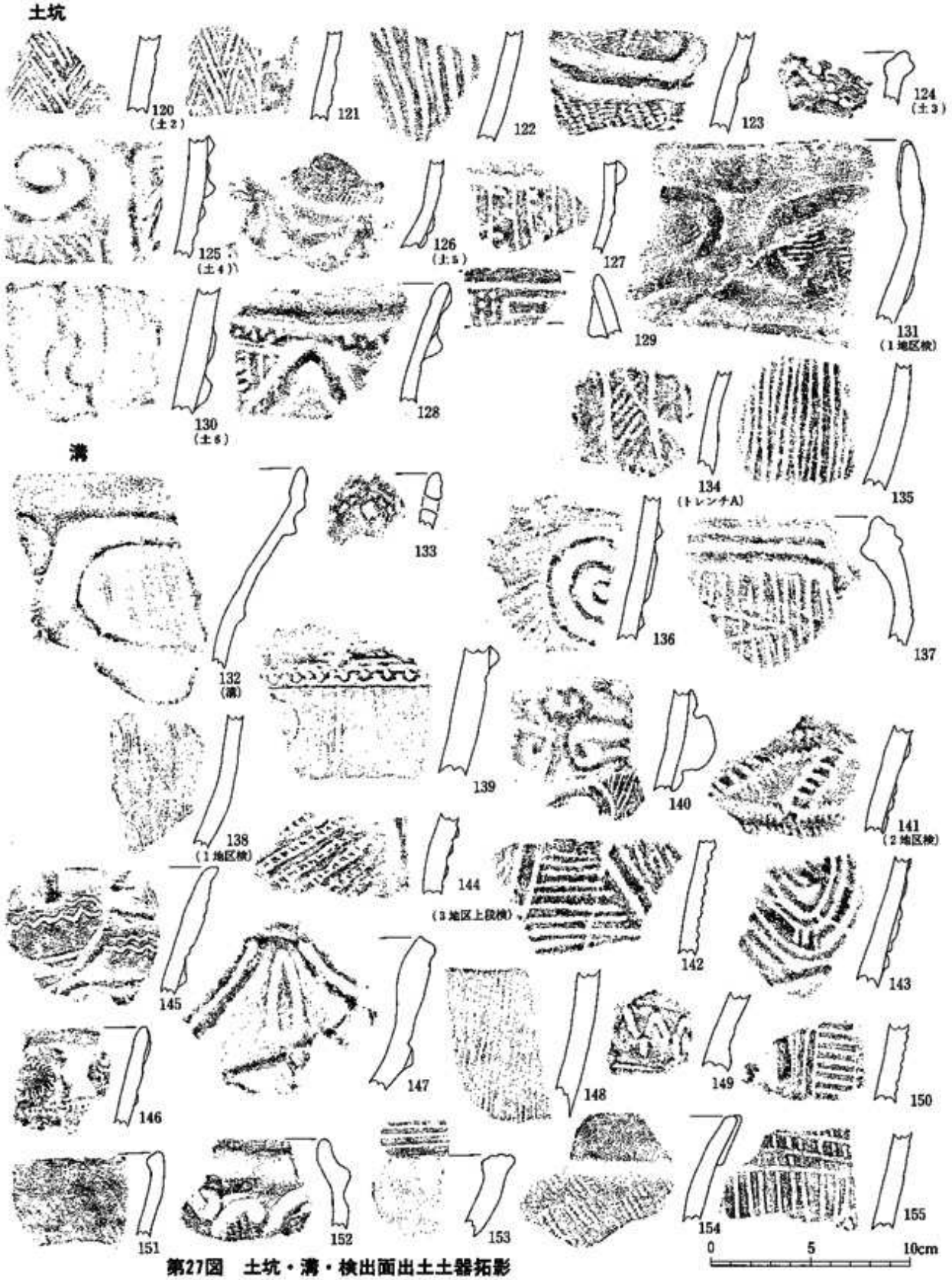
第24図　第3・4号住居址出土土器拓影（3号：30・31、4号：32～55）



第25図　第5・6・8・9号住居址出土土器拓影(5号：56～81、6号：82、8号：83～88、9号：89～94)

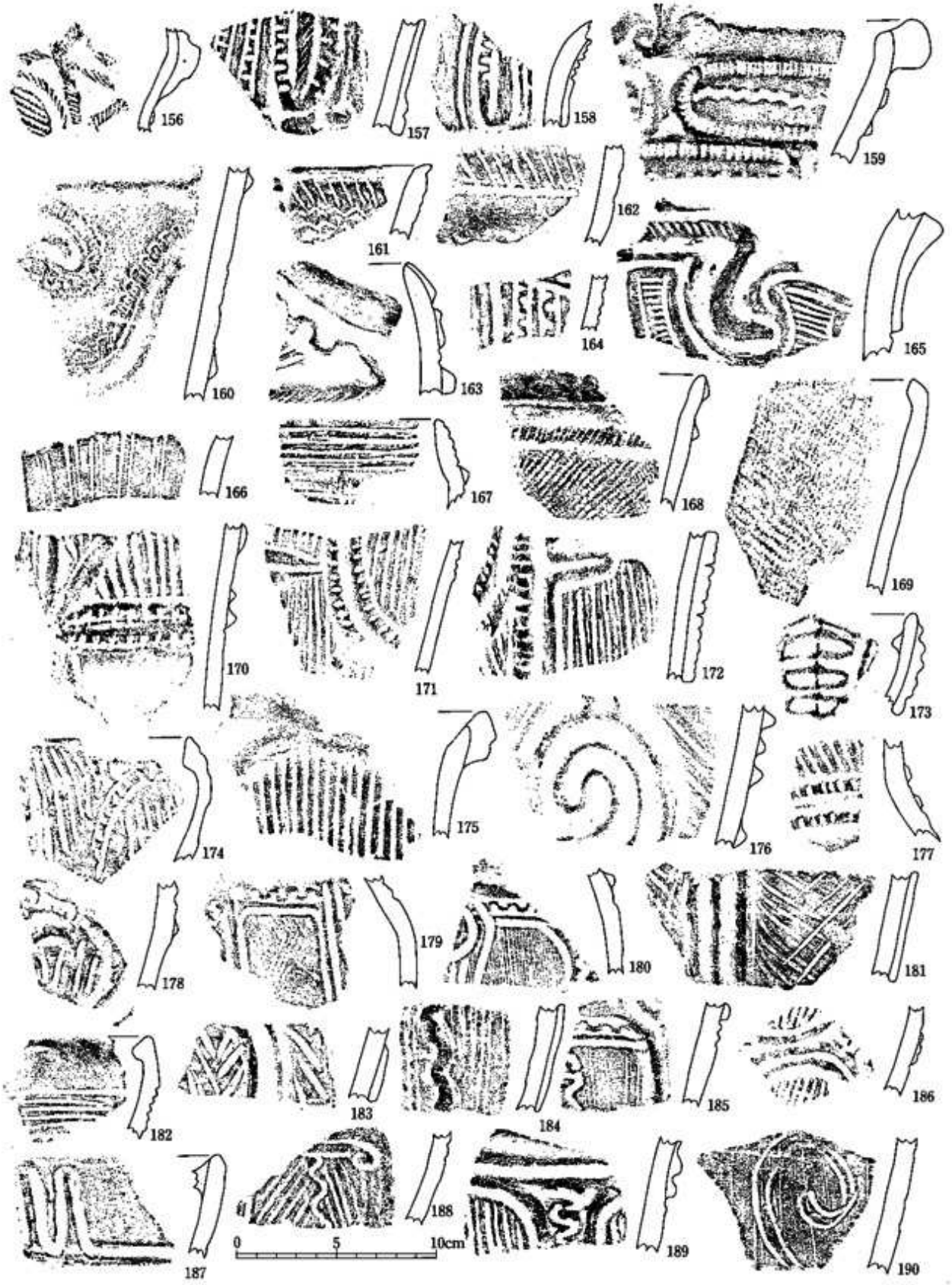


第26図　ピット・検出面出土土器拓影
（ピット：95～107・116～119、1地区検：108～115）

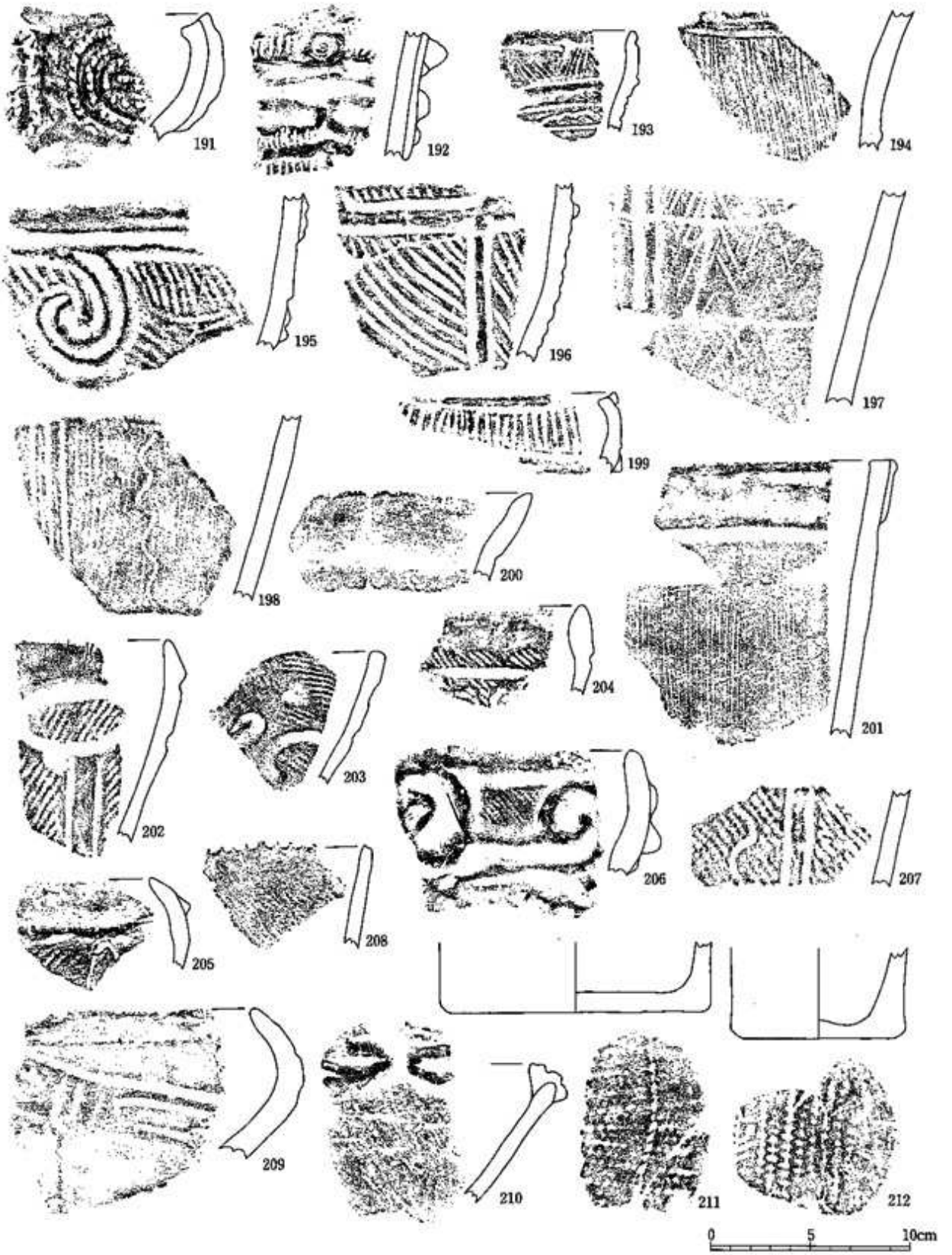


第27図　土坑・溝・検出面出土土器拓影

（土坑：120～130、溝：132・133　トレンチA：134～137
1地区検：131、138～140、2地区検：141～143　3地区上段検：144～155



第28図　検出面出土土器拓影（3地区下段：156～190）



第29図　検出面出土土器拓影（3地区下段：191～212）

2．石器・石製品（第30～34図）

(1)**石器**　今回の発掘調査で出土した石器群のうち定形的な石器、原石・石核の点数（全体の構成比）は以下のとおりである。

①石鏃	15点(12.1%)	⑦磨製石斧	3点(2.4%)
②石錐	2点(1.6%)	⑧凹・敲・磨石	37点(29.9%)
③ピエス・エスキーユ	16点(12.9%)	⑨砥石	2点(1.6%)
④石匙	1点(0.8%)	⑩研磨礫	1点(0.8%)
⑤スクレイパー	11点(8.9%)	⑪原石・石核	3点(2.4%)
⑥打製石斧	33点(26.6%)	総　計	124点(100.0%)

このほかに２次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、砕片等が少量出土しているが、報告書では削愛している。石器群の分類方法、一覧表の略号については坪ノ内遺跡の報告書(1)に従っている。また、石質鑑定については森義直氏のご教示を受けている。

本項では各石器の概要は実測図と一覧表にかえ、生妻遺跡の石器群がもつ特徴・問題点を述べることにする。

生妻遺跡からは総計124点の石器が出土している。しかし、これらの約⅔（82点）は検出面や排土からの出土で、遺構に伴う石器は42点を数えるのみである。石器を出土した遺構は竪穴式住居が７軒(うち１軒は弥生時代)、土坑が３基、ピット８基がある。このうち、第２～４号住居では４種類以上の石器が出土しているが、量的に少なく石器組成を反映しているとは考えられなかった。なお、土坑４で石鏃、ピエス・エスキーユ、スクレイパーが各１点出土しているのが注目される。

時期別にみると、弥生時代に属する第８号住居址から出土した石器（石鏃と凹・敲・磨石）のほかは縄文時代に属するものと考えられる。

本遺跡の石器群は出土状況が良好でなく、歴史資料としての価値は限定される。しかし、定形的な石器の構成比率をみると、打製石斧は33点、凹・敲・磨石は37点が出土しており、各約３割の比率を占めている点が特徴的である。いっぽう石鏃・石錐・石匙などの小形石器の構成比は少ない。大半が遺構に伴わない石器群ではあるが、こうしたあり方は本遺跡の縄文集落の中心時期である中期後葉に典型的な石器組成と考えることができよう。なお、磨石とセットの使用が考えられる石皿は出土していない。また、ピエス・エスキーユが石鏃と同点数出土している。その構成比が比較的高い点は本遺跡の特徴と考えている。

(2)**石製品**　チャート製の海浜石１点が１地区から出土している。

註1　松本市教育委員会　1990.3　『松本市坪ノ内遺跡』　P.227～234

第1表　石器一覧表

①石鏃

No.	図No.	分類 基部	分類 基部	分類 側縁	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	1	?	?	?	2住	(2.17)	(1.62)	0.33	(1.10)	黒曜石	F	
2	2	平	無	IV	〃	1.95	1.73	0.45	1.70	チャート	O	未成品？
3	3	〃	〃	V	3住	(2.15)	1.32	(0.53)	(1.55)	〃	A	
4	4	?	?	?	8住	(1.49)	(1.14)	(0.19)	(0.30)	黒曜石	F	
5		〃	〃	〃	坑4	—	—	—	(0.25)	〃	G	
6	5	凹	無	III	1地区検	(2.21)	(1.45)	0.28	(0.80)	〃	A	
7		?	?	?	〃 〃	2.40	1.47	0.30	0.85	〃	?	未成品
8	6	凹	無	V	〃 〃	(1.67)	(2.06)	(0.25)	(1.15)	〃	A	
9	7	?	?	?	検	(1.89)	(0.91)	(0.15)	(0.35)	〃	F	
10	8	凹	無	IV	1地区検	(2.10)	(1.23)	(0.30)	(0.85)	〃	D	
11		?	?	?	〃 〃	(1.50)	(1.48)	(0.32)	(0.75)	〃	G	
12	9	凹	無	IV	3地区検	(2.70)	(1.42)	0.34	(1.25)	チャート	C	
13		平	〃	V	〃 〃	2.30	1.61	0.49	1.90	〃	O	未成品
14	10	凹	無	IV	〃 〃	(2.39)	(1.31)	0.21	(0.60)	〃	D	
15	11	〃	〃	〃	〃 〃	(2.58)	(1.23)	(0.30)	(1.05)	黒曜石	〃	

② 石錐

No.	図No.	分類 形態	分類 調整	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	12	棒	両	2住P3	(2.41)	1.08	0.45	(1.30)	黒曜石	錐部端欠	
2	13	つ	〃	3地区検	1.88	1.63	0.32	1.05	〃	完形	

③ ピエス・エスキーユ

No.	図No.	分類 剥離	分類 縁部	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1		I		3住	1.62	1.23	0.37	0.70	黒曜石		
2	14	〃	○	〃	1.80	1.36	0.80	1.75	〃		
3		〃	△	4住ユ	2.04	1.20	0.54	1.30	〃		
4		II	●	5住	1.75	1.24	0.45	1.20	〃		
5		I	▽	坑4	2.19	0.90	0.52	1.25	〃		
6	15	II	●	坑5	2.00	1.16	0.65	1.35	〃		
7	16	I	▽	Dトレンチ	2.44	1.82	0.96	3.80	〃		
8	17	〃	○	1地区検	2.94	1.63	1.54	8.30	〃		
9		〃		〃 〃	1.70	1.97	0.94	3.80	〃		
10		〃	▽	〃 〃	1.64	1.45	0.40	0.95	〃		
11	18	〃	○	3地区検	2.10	1.32	0.52	1.65	〃		
12	19	〃	△	〃 〃	1.85	1.72	0.60	1.75	〃		
13	20	III	●	〃 〃	1.69	1.90	0.84	2.65	〃		
14		I	▽	〃 〃	1.66	1.50	0.64	1.40	〃		
15	21	II	●	〃 〃	1.39	1.30	0.57	1.05	〃		
16		I	○	検	1.99	1.14	0.84	1.70	〃		

④ 石匙

No.	図No.	分類 位置	分類 刃部	分類 調整	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	22	?	?	?	3地区検	(2.99)	(2.70)	(0.53)	(4.90)	チャート	刃部欠	

⑤ スクレイパー

No.	図No.	分類 刃部	調整	素材	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	23	外	片	横	3住	6.70	8.05	2.13	101.30	チャート	完形	
2	24	〃	〃	〃	〃	(3.22)	4.66	(0.78)	(10.70)	〃	上端欠	石匙？
3		直	〃	縦	坑4	2.90	1.77	0.50	2.75	黒曜石	完形	
4	25	外	〃	〃	P33	3.23	3.15	1.13	10.35	〃	〃	
5	26	?	〃	横	P63	(2.61)	(3.75)	1.03	(12.70)	チャート	片側欠	
6	27	外	〃	縦	P177	5.89	2.89	0.95	18.00	〃	完形	
7	28	〃	〃	〃	1地区検	5.40	1.64	0.53	4.45	〃	〃	
8		〃	両	〃	3地区〃	2.39	1.65	0.54	2.25	黒曜石	〃	
9	29	直	〃	縦	〃 〃	6.98	3.63	0.94	26.50	〃	〃	
10		〃	片	縦	〃 〃	(1.66)	(1.60)	(0.36)	(1.25)	〃	片側欠	
11	30	外	〃	?	〃 〃	1.80	1.74	0.35	1.35	〃	完形	

⑥ 打製石斧

No.	図No.	分類 平面	刃部	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	使用痕 頭部	側部	刃部	破損状況	備考
1		撥	?	2住検	(13.20)	(6.07)	(1.99)	(218.10)	ホルンフェルス(粘板岩)				A_3	
2	31	〃	偏	3住No.1	10.02	4.89	1.54	92.00	粘板岩			●	O	
3		?	?	〃 No.2	(8.38)	(5.73)	(1.32)	(69.30)	〃				A_2	
4		分	円	4住	(8.27)	(4.80)	(1.40)	(67.70)	〃		○		B_3	
5		短	?	〃	(8.56)	(4.89)	(1.91)	(100.20)	〃				C	
6		撥	〃	5住	(12.06)	(4.70)	(1.97)	(109.40)	硬砂岩				A_3	未成品？
7	32	?	〃	坑6	(12.86)	(5.65)	(2.04)	(167.60)	粘板岩				C	未成品
8	33	撥	偏	P37	(14.35)	7.17	2.06	(249.90)	砂岩		○	●	B_3	
9	34	〃	〃	P137	13.60	5.20	2.27	(190.00)	粘板岩		○		〃	
10	35	〃	円	P162	(11.34)	5.60	(1.53)	(141.00)	砂岩			●	〃	
11		?	?	1地区検	(5.16)	(3.58)	(1.49)	(41.35)	粘板岩				A_1	
12	36	撥	偏	〃 〃	11.23	3.94	1.21	66.60	〃		○	●	O	
13		〃	?	〃 〃	(9.67)	(4.21)	1.13	(55.80)	砂岩				A_3	
14		〃	〃	検	(7.04)	(4.55)	(1.30)	(61.25)	粘板岩	●	○		A_1	磨製石斧の転用？
15		短	〃	〃	10.87	4.77	1.78	112.80	砂岩				O	未成品
16	37	撥	偏	1地区検	12.32	6.92	2.15	201.80	粘板岩				〃	
17		〃	〃	〃 〃	10.65	5.67	0.91	79.00	〃				〃	
18		?	?	〃 〃	(7.90)	(5.61)	(1.34)	(77.00)	硬砂岩				C	未成品？
19		〃	〃	〃 〃	(7.56)	(5.60)	(2.71)	(150.60)	粘板岩				A_1	
20	38	撥	偏	〃 〃	(9.74)	5.23	1.32	(91.50)	〃				B_3	
21	39	〃	円	2地区検	9.92	5.55	1.03	74.55	砂質粘板岩		○	●	O	
22		〃	?	3地区〃	(8.60)	(4.38)	(2.18)	(102.30)	粘板岩				A_3	
23		?	〃	〃 〃	—	—		(31.40)	〃				残片	
24	40	撥	円	〃 〃	(9.48)	4.77	1.75	(76.20)	粘板岩？				B_3	
25		?	?	〃 〃	—	—	—	(80.80)	粘板岩				残片	未成品？
26	41	撥	直	〃 〃	9.45	4.37	1.39	69.85	ホルンフェルス？				O	
27	42	短	?	〃 〃	(12.84)	(4.17)	1.82	(114.40)	粘板岩		○	●	A_3	
28		撥	〃	〃 〃	(8.40)	(3.77)	(0.96)	(39.75)	〃				〃	
29	43	〃	円	〃 〃	(12.11)	7.17	(2.00)	(236.20)	〃			●	B_3	
30		〃	?	〃 〃	(7.06)	6.34	1.54	(90.30)	〃				C	
31		〃	偏	〃 〃	(6.61)	5.89	2.24	(122.50)	〃				B_2	
32	44	短	円	〃 〃	10.23	5.03	1.49	108.20	粘板岩		○		O	
33	45	撥	偏	表採	12.82	7.26	2.45	231.90	珪質凝灰岩		○		〃	

⑦ 磨製石斧

No.	図No.	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	残存状況	備考
1	46	定角	2住No.13	(7.43)	(6.85)	(2.90)	(282.10)	閃緑岩	B_2	
2	47	〃	1地区検	(5.79)	3.87	(1.52)	(61.30)	硬玉質	B_3	
3	48	乳棒	〃 〃	(15.30)	(4.64)	(3.60)	(307.10)	砂岩	D	

⑧ 凹・敲・磨石

No.	図No.	使用痕 凹部	敲打	磨面	素材	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1				○	B	4住	6.84	6.22	4.05	216	安山岩	完形	
2		○(3)		○	〃	〃	(7.29)	6.57	5.01	(261)	凝灰岩	1/3欠	
3				○	H	〃	(10.56)	(5.74)	(2.02)	(165)	砂岩	〃	
4		○(1＋1)			C	〃	(6.80)	(8.18)	(3.69)	(268)	凝灰岩	1/2欠	
5	49	○(2＋2)		○	B	5住ユ	8.77	7.87	4.41	465	安山岩	完形	
6		○(1＋2)		○	E	6住	9.00	8.65	4.04	420	砂岩	〃	
7	50	○(1)			B	7住No.3	12.32	6.50	3.02	355	〃	〃	
8	51	○(3＋3)	○	○	E	8住	(8.53)	(5.20)	(4.20)	(226)	凝灰岩	1/2欠	
9			○		B	P61	10.73	8.70	4.96	600	安山岩	完形	
10		○(1)		○	〃	〃	12.47	9.24	7.03	1300	溶質凝灰岩	〃	
11	52	○(〃)			E	P165	11.05	9.60	4.35	600	凝灰岩	〃	
12	53	○(1＋1)			C	Cトレンチ	8.18	7.17	3.70	(390)	〃	ほぼ完形	
13		○(2)		○	B	1地区検	11.28	9.04	5.97	840	安山岩	完形	
14		○(1＋1)			〃	〃 〃	10.11	7.27	5.39	600	凝灰岩	〃	
15	54	○(2)	○	○	〃	〃 〃	11.06	(8.93)	4.12	(500)	砂質凝灰岩	1/4欠	
16		○(2＋2)	○		G	〃 〃	(13.45)	(5.60)	(3.56)	(445)	砂岩	〃	
17		○(3＋3)	○	○	B	〃 〃	(9.07)	(7.07)	(5.17)	(380)	溶質凝灰岩	1/3欠	
18				○	G	〃 〃	(7.82)	(2.26)	(2.16)	(55)	粘板岩	1/2欠	
19				○	?	〃 〃	−	−	−	(142)	溶質凝灰岩	残片	
20		○(2＋3)		○	B	〃 〃	(7.25)	(7.76)	(4.17)	(290)	安山岩	1/2欠	被熱
21			○	○	C	〃 〃	(5.60)	(9.09)	(2.57)	(210)	砂岩	2/3欠	
22	55			○	B	〃 〃	11.22	8.06	4.52	495	凝灰岩	完形	
23	56	○(1＋2)	○	○	〃	〃 〃	10.14	7.01	4.47	425	〃	〃	
24		○(1)			〃	2地区検	11.21	10.16	6.73	985	溶質凝灰岩	〃	
25			○		〃	3地区〃	(13.06)	8.40	4.34	(670)	砂岩	ほぼ完形	
26				○	C	〃 〃	8.60	7.50	2.75	293	溶質凝灰岩	完形	
27				○	〃	〃 〃	(11.03)	9.50	2.92	(480)	砂岩	1/3欠	
28		○(1)		○	〃	〃 〃	10.64	6.46	3.53	335	溶質凝灰岩	完形	
29				○	B	〃 〃	8.49	6.34	4.49	360	砂岩	〃	
30	57	○(2＋3)		○	F	〃 〃	9.80	8.67	3.69	495	溶質凝灰岩	〃	
31		○(〃)		○	B	〃 〃	11.67	7.56	5.60	665	安山岩	〃	
32		○(1＋1)		○	〃	〃 〃	(10.76)	(8.57)	(4.90)	(515)	凝灰岩	1/6欠	
33		○(2)		○	〃	〃 〃	9.55	6.72	4.14	370	溶質凝灰岩	完形	
34	58			○	F	〃 〃	7.86	7.00	3.54	320	安山岩	〃	
35			○		G	〃 〃	(10.48)	(4.93)	(4.67)	(425)	溶質凝灰岩	1/4欠	
36		○(1×3＋2)		○	C	検	(10.00)	6.06	3.43	(320)	〃	端部欠	
37		○(1＋1)			I	〃	(6.75)	(5.52)	(4.13)	(217)	砂岩	両端欠	

⑨ 砥石

No.	図No.	素材	砥面	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1	59	A	3	6住	(4.63)	(5.19)	(1.36)	(48)	砂岩	1/2欠	
2	60	〃	1	3地区検	23.80	17.50	3.50	2000	〃	完形	

⑩ 研磨礫

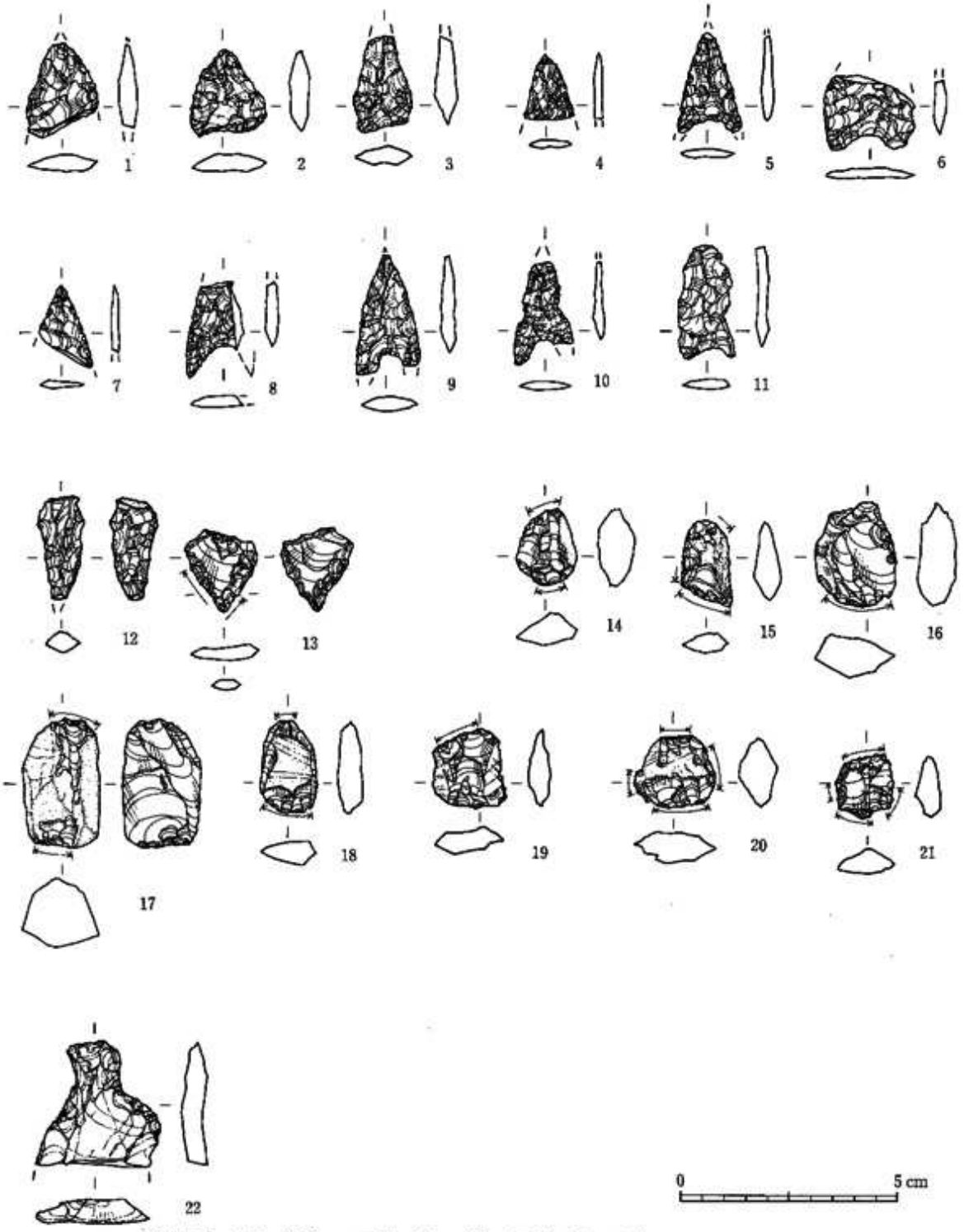
No.	図No.	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1	61	4住ユ	6.93	3.41	1.05	(35.60)	泥質凝灰岩	ほぼ完形	被熱

⑪ 原石・石核

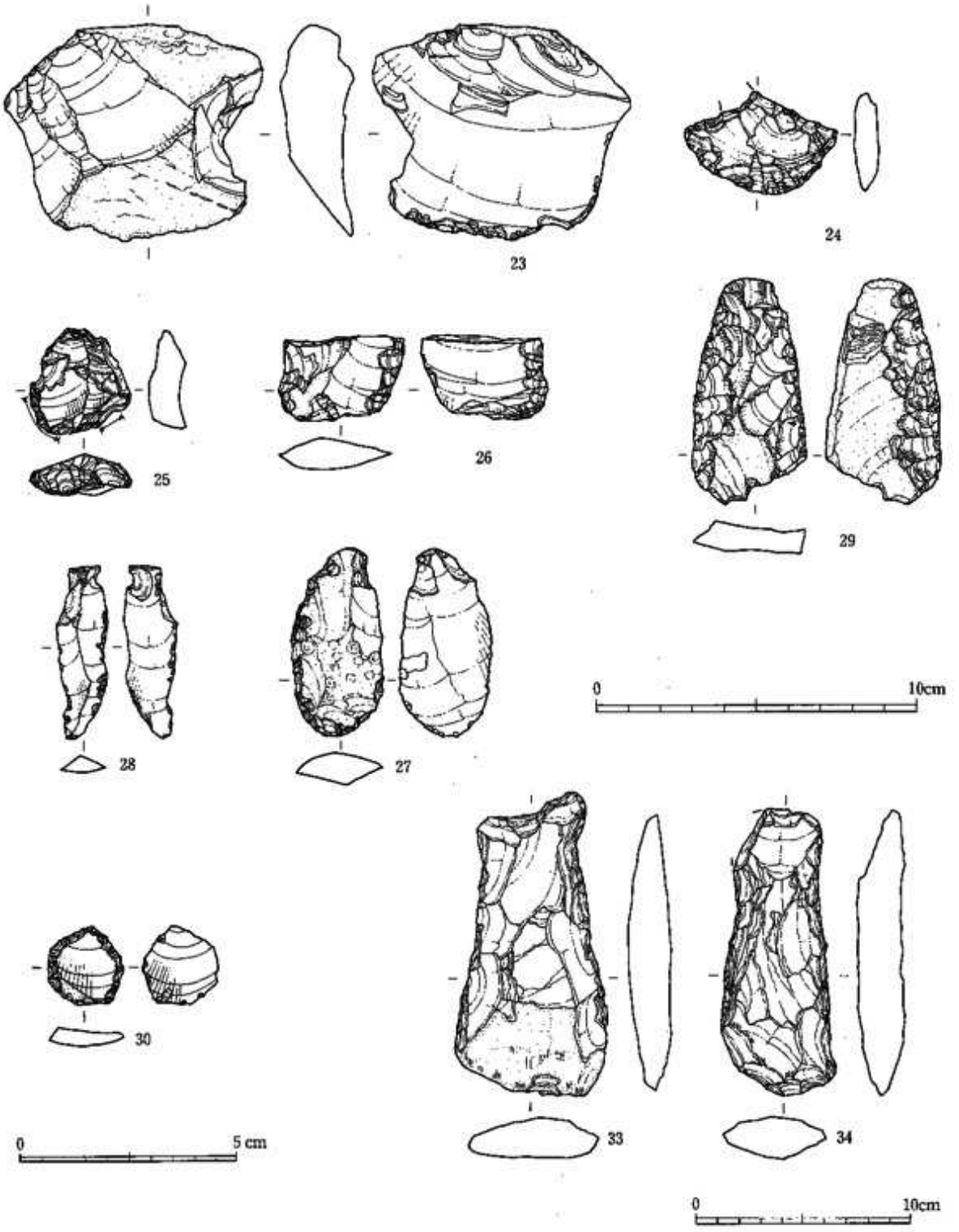
No.	図No.	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1		3地区検	4.41	4.40	1.55	35.65	黒曜石		
2		〃 〃	3.72	2.40	1.06	1.00	〃		石核
3		排土(1地区)	3.77	2.09	2.50	23.75	〃		

⑫ 海浜石

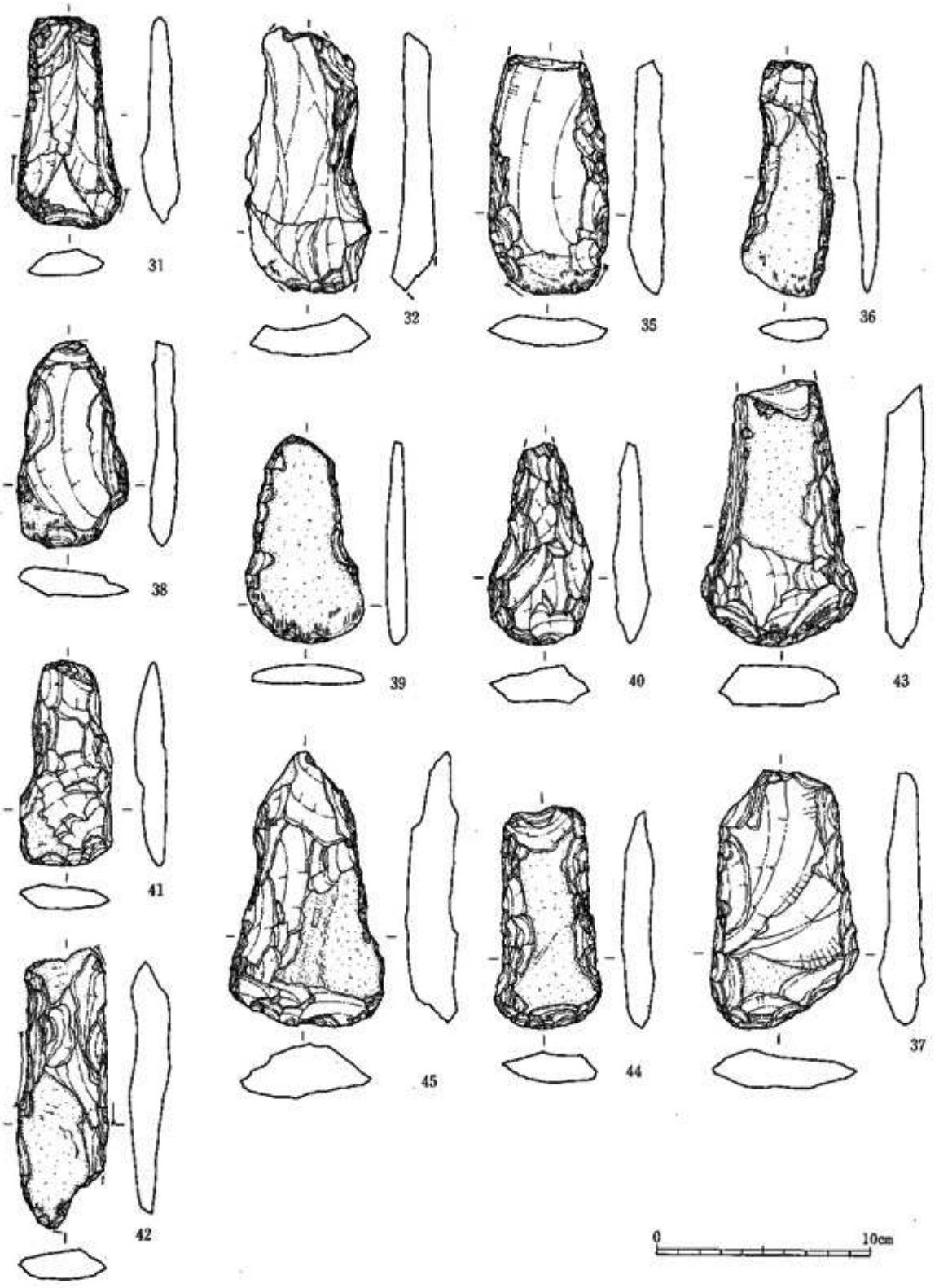
No.	図No.	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1		1地区	2.90	1.33	1.13	6.55	チャート	完形	



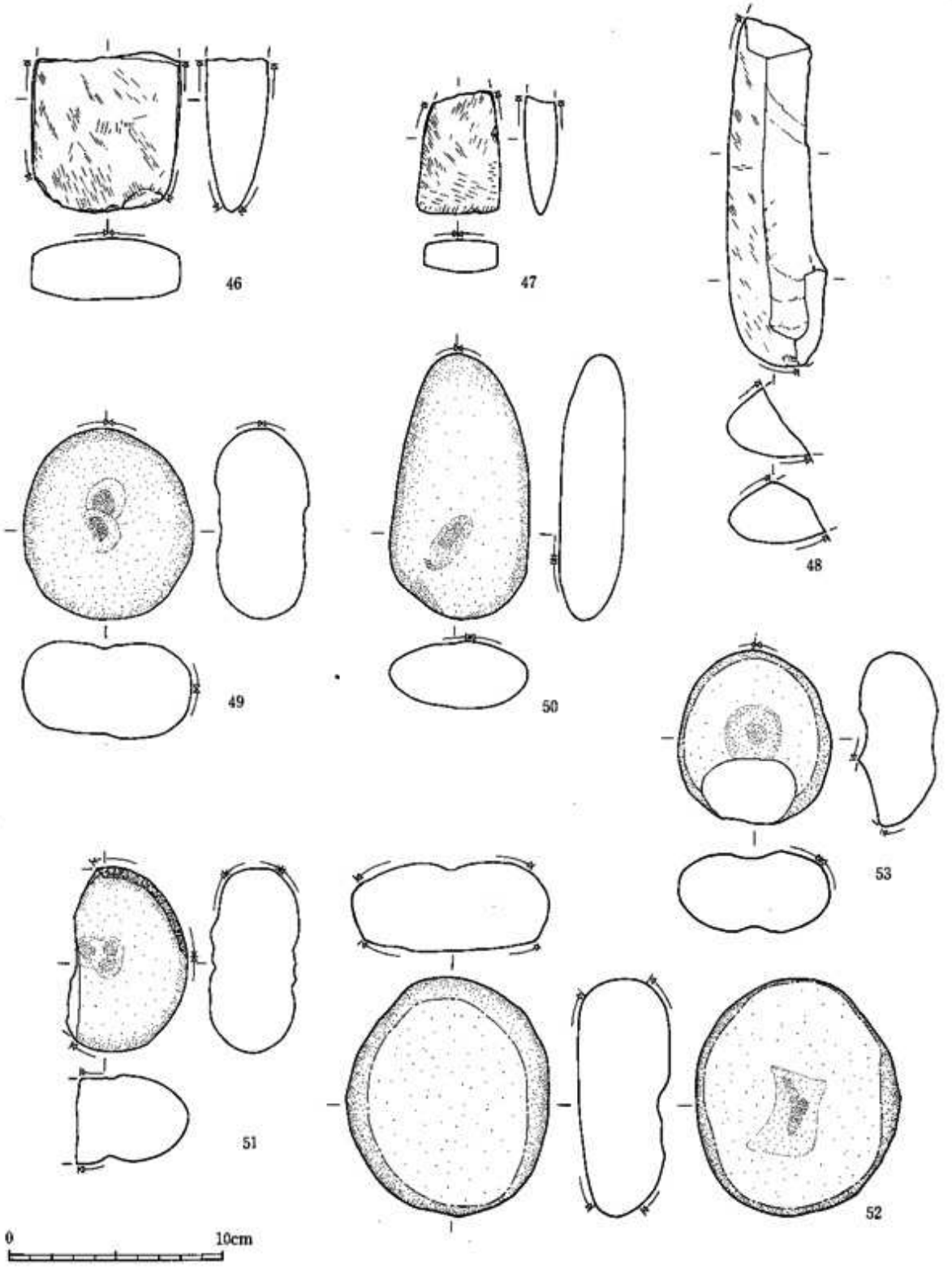
第30図　石器（1）　石鏃（1～11）、石錐（12・13）
ピエス・エスキーユ（14～21）、石匙（22）



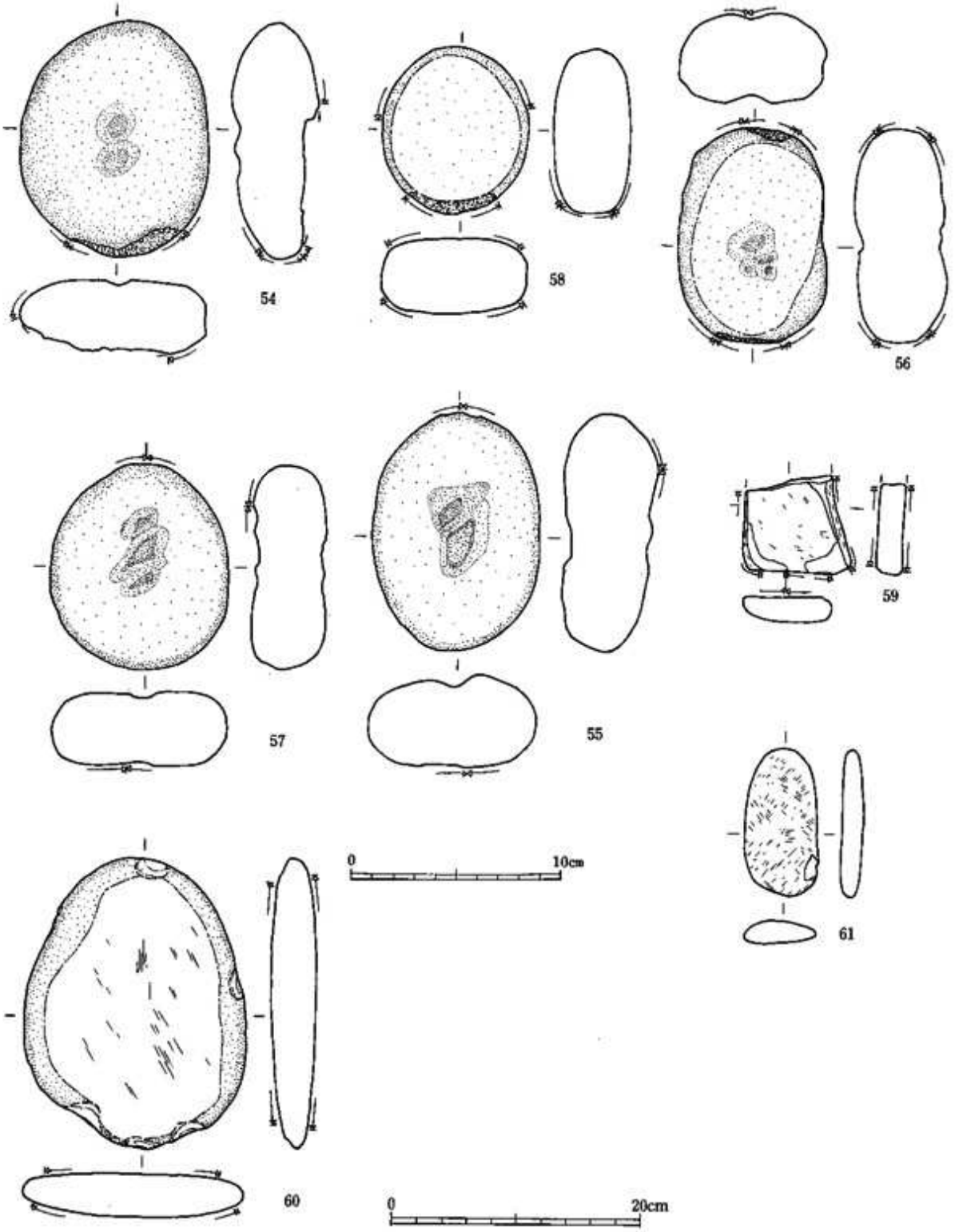
第31図　石器（2）　スクレイパー（23～30）、打製石斧（33・34）



第32図　石器（3）　打製石斧（31・32・35～45）



第33図　石器（4）　磨製石斧（46～48）、凹・敲・磨石（49～53）



第34図　石器（5）　凹・敲・磨石（54～58）、砥石（59・60）研磨礫（61）

3．土製品（第36～38図）

土偶・土製円盤・ミニチュア土器などが総計26点出土している。

土偶（1～9）は11点出土している。遺構別にみると竪穴式住居から5点、ピットから1点、検出面から5点が出土している。このうち第2・4号住居からは別個体の土偶が2点ずつ出土している。全形をうかがえる土偶はないので、以下では残存部位別に記述する。

頭部は1点出土している。1の顔は眉・目・鼻が沈線で、口が刺突で表現されている。なお、目は渦巻状に表現されているが、一般の土偶が直線またはわずかに湾曲する吊り目に表現されている点と比較して特異である。また、側頭部には耳飾りを着装したと考えられる表現がある。頭頂部は沈線と刺突によって髪が表現され、後頭部の2ケ所には穴があけられている。

5はピット107から出土した中空土偶である。頭部以下が残存しているが、中空の胴部に粘土で蓋をしただけなので脚部はない。腕は肘を曲げて、左腕は腹に、右腕は背中に手を添えたポーズをとっている。特に、左手を腹に添えた部分には穴があけられており、空洞部分とつながっている。文様は体側に沿って1条の沈線が巡り、下端には斜方向の短い沈線が全周している。さらに正面では沈線文（正中線）のほか、左腕に蛇行状、胸に渦巻状の隆帯が施されている。背面は上部にハ字状の沈線と左肘に沈線文が施されている。また、右側面は三角形文、左側面は渦巻文が沈線によって表現されている。

胴部は3点が出土している。4の正面はへその部分でJ字形に曲がる正中線と数条の幅広の沈線文が施されている。腰の直下では逆凹状の文様が正面で3単位、背面と左側面で1単位が施されている。8の正面はへその部分でJ字形に曲がる正中線と左右の体側に沿った沈線文が施されている。背面は2条の沈線がやはり体側に沿って施されている。両側面は腰の高さのところに隆帯で渦巻文が施されている。9の正面は中央の隆帯上に沈線で正中線が施されている。さらに、乳房は刺突と2本の沈線で表現されている。また、体側に沿って1条の沈線が巡っている。背面は両端が蕨手状になる2単位の沈線文と体側に沿った3条の沈線などが施されている。

脚部は4点出土している。2は表面が剝落しているため文様が不明であるが、3・6・7は沈線文が施されている。

このほかに、部位不明の土偶が1点出土している。

製作痕としては、7点の土偶の破損面に、分割した粘土塊を接合するための芯棒の痕跡がみられる。また、7の破損面には分割した粘土塊の表面が残っている。なお、2・3の脚部の底面（足の裏）には穴がひとつあけられている。粘土塊の接合とは関係のない部分なので注目される。

土製円盤（10）は1点出土している。表面には沈線文がみられる。周囲を打ち欠いて整形しただけで、研磨は行われていない。

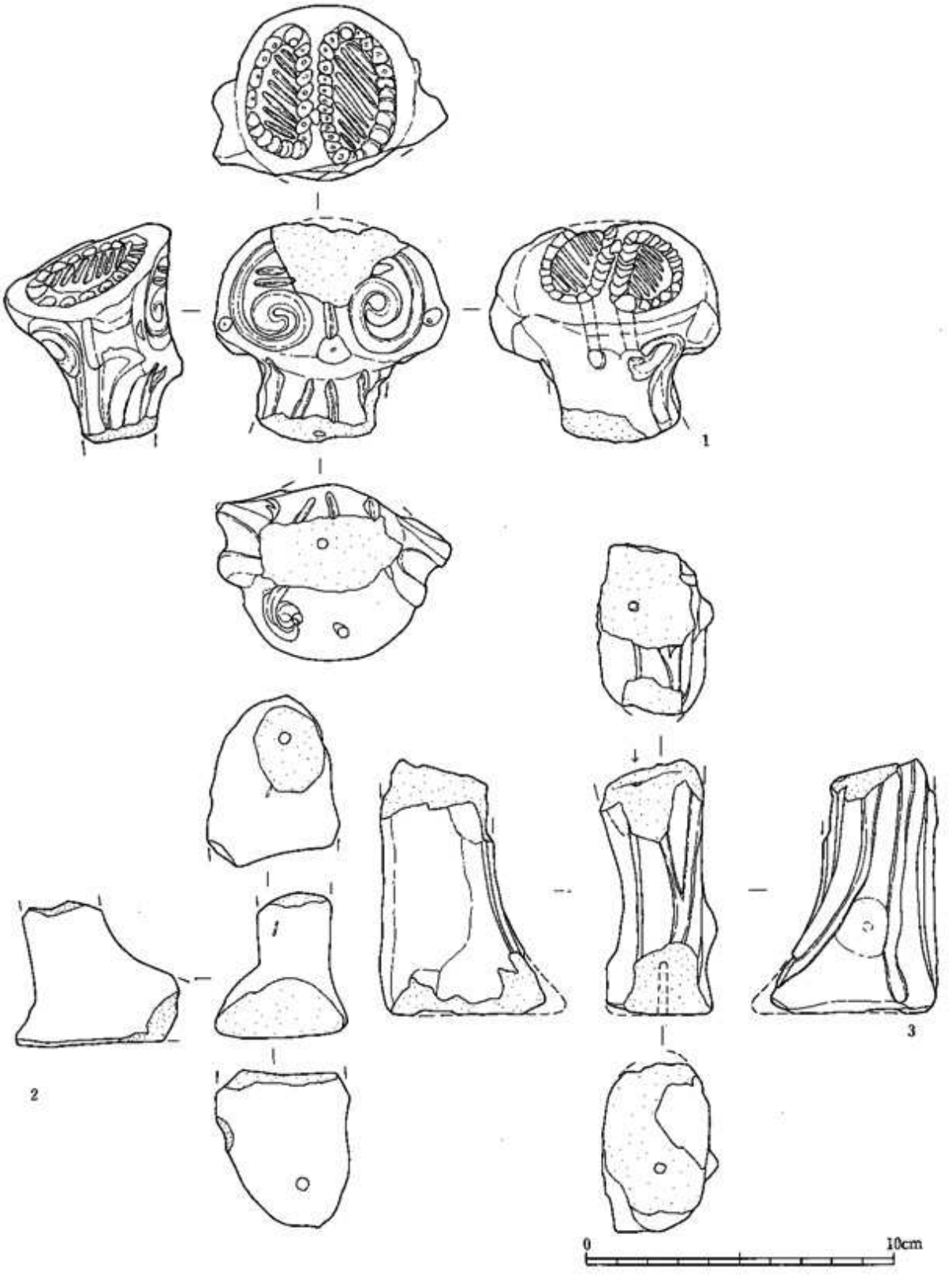
ミニチュア土器（11～15）は5点出土している。遺構別にみると住居から3点、検出面から2点が出土している。11は浅鉢形を呈し、手づくねによって製作されている。外面には指頭圧痕が顕著

に残り、内面には粘土をなでた際の凹線状の調整痕がみられる。12は深鉢形と考えられる底部の破片で、輪積みの接合部分で破損している。13は器種不明である。14は深鉢形を呈する。縄文が施文されているが不明瞭である。15は壺形を呈し、内面には指頭圧痕を顕著に残している。他のミニチュア土器と比べて胎土に砂粒が少ないこと、焼成の色合いの違いから、あるいは土師器に伴う土製品の可能性も考えられる。

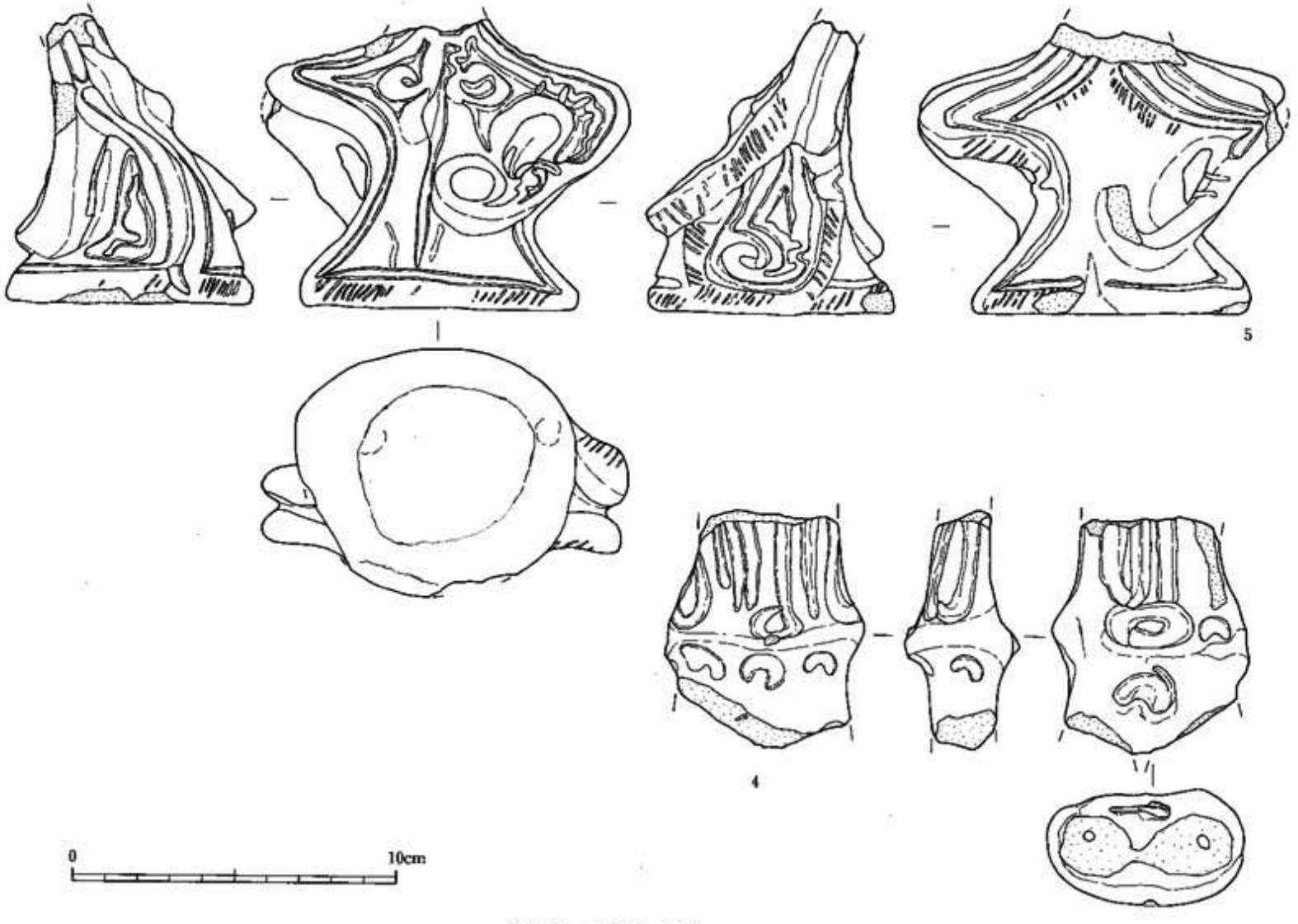
以上の他に種類不明の土製品（16・17）が9点出土している。16は大形の円盤状の土製品である。17は外面に縄文が施文されている、不整な環状を呈すと考えられる土製品である。土器の把手の可能性も考えられる。このほかに、図示できない小破片の土製品が7点出土している。

第2表　土製品一覧表

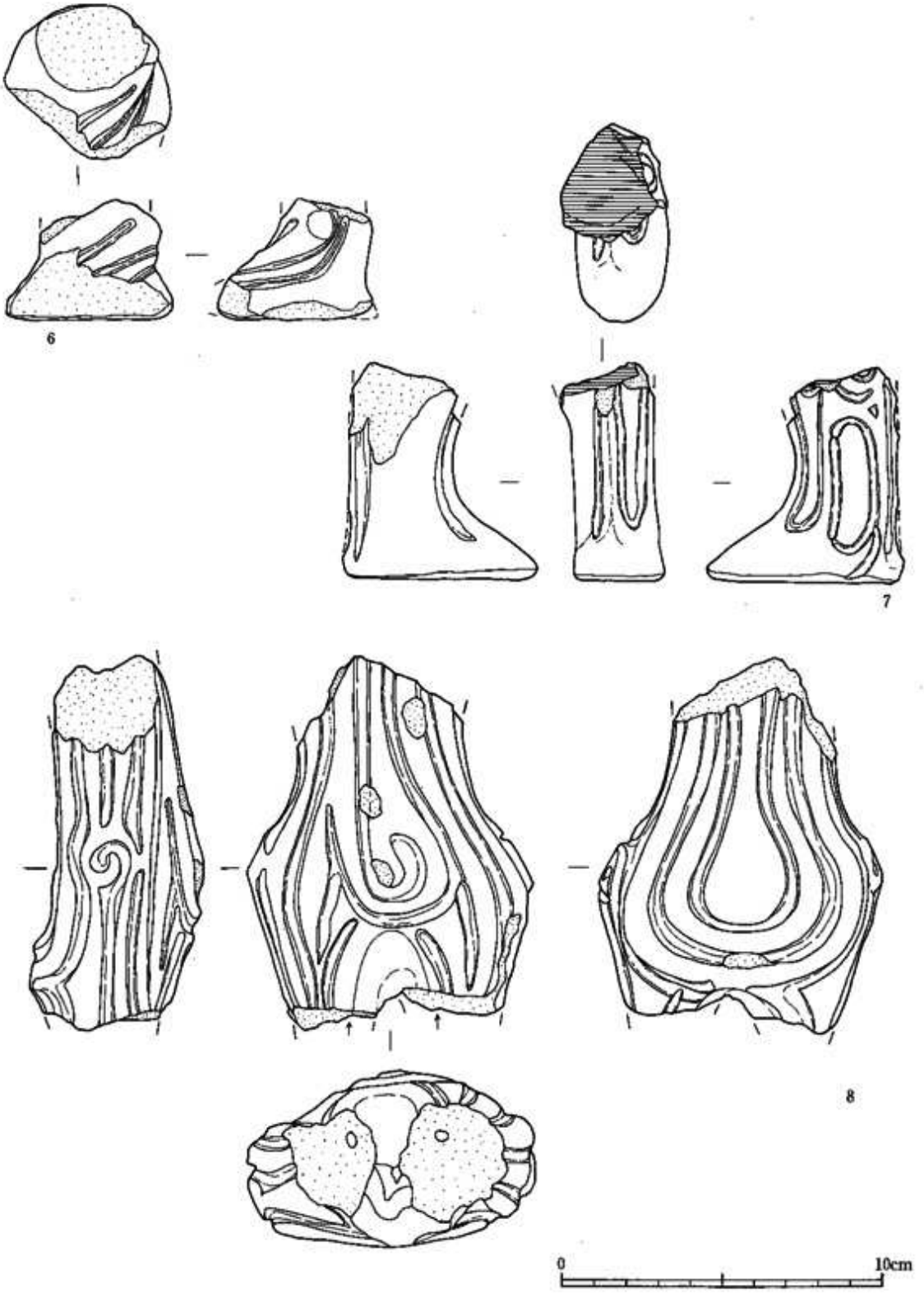
No.	図No.	種類	出土地点	長さ 口径 (cm)	幅 底径 (cm)	厚さ 器高 (cm)	重さ (g)	残存状況	備考
1	1	土偶	2住No.4	(6.9)	(7.5)	(5.7)	(160)	頭部	芯棒痕1
2	2	〃	〃 No.11	(4.5)	(4.3)	(5.6)	(68)	片脚	〃 1・底面穿孔
3	3	〃	4住	(8.2)	(3.5)	(5.4)	(122)	〃	〃 1・ 〃
4		〃	〃	—	—	—	(15)	不明	〃 2
5	4	〃	5住検	(7.3)	(6.1)	(3.4)	(106)	胴部	〃 2
6	5	〃	P107	(9.3)	8.7	7.4	(355)	腕・胴部	中空土偶
7		〃	1地区検	(4.6)	(3.7)	(2.8)	(38)	片脚	
8	6	〃	2地区〃	(3.7)	(5.2)	(4.8)	(67)	〃	
9	7	〃	3地区〃	(6.6)	(2.9)	(6.0)	(79)	〃	
10	8	〃	〃 〃	(11.7)	(8.9)	(5.2)	(370)	胴部	芯棒痕2
11	9	〃	不明	(9.5)	(14.0)	(3.0)	(276)	〃	〃 2
12	10	土製円盤	3地区検	4.1	4.6	1.0	22	完形	
13	11	ミニチュア土器	2住No.4	3.4	3.5	1.1	9	〃	浅鉢
14	12	〃	4住	—	(4.3)	—	(10)	底部	深鉢？
15	13	〃	〃	—	5.3	(5.2)	(78)	1/2欠	不明
16	14	〃	1地区検	—	—	(4.5)	(18)	口縁～胴部	深鉢
17	15	〃	3地区〃	4.0	—	(4.1)	(41)	1/2欠	器種不明、土師器？
18		不明	2住検	—	—	—	(10)	?	
19		〃	3住No.3	(2.7)	(3.7)	(2.9)	(29)	残片	沈線文
20		〃（耳栓？）	1地区検	2.1	(1.9)	(2.2)	(9)	ほぼ完形	表面剥落
21	16	〃	〃 〃	(5.9)	(5.1)	(1.0)	(26)	?	
22		〃	〃 〃	—	—	—	(10)	〃	
23		〃	〃 〃	—	—	—	(29)	〃	
24	17	〃	3地区〃	(4.6)	(3.1)	(1.0)	(17)	〃	
25		〃	〃 〃	—	—	—	(16)	〃	
26		〃	不明	—	—	—	(10)	〃	



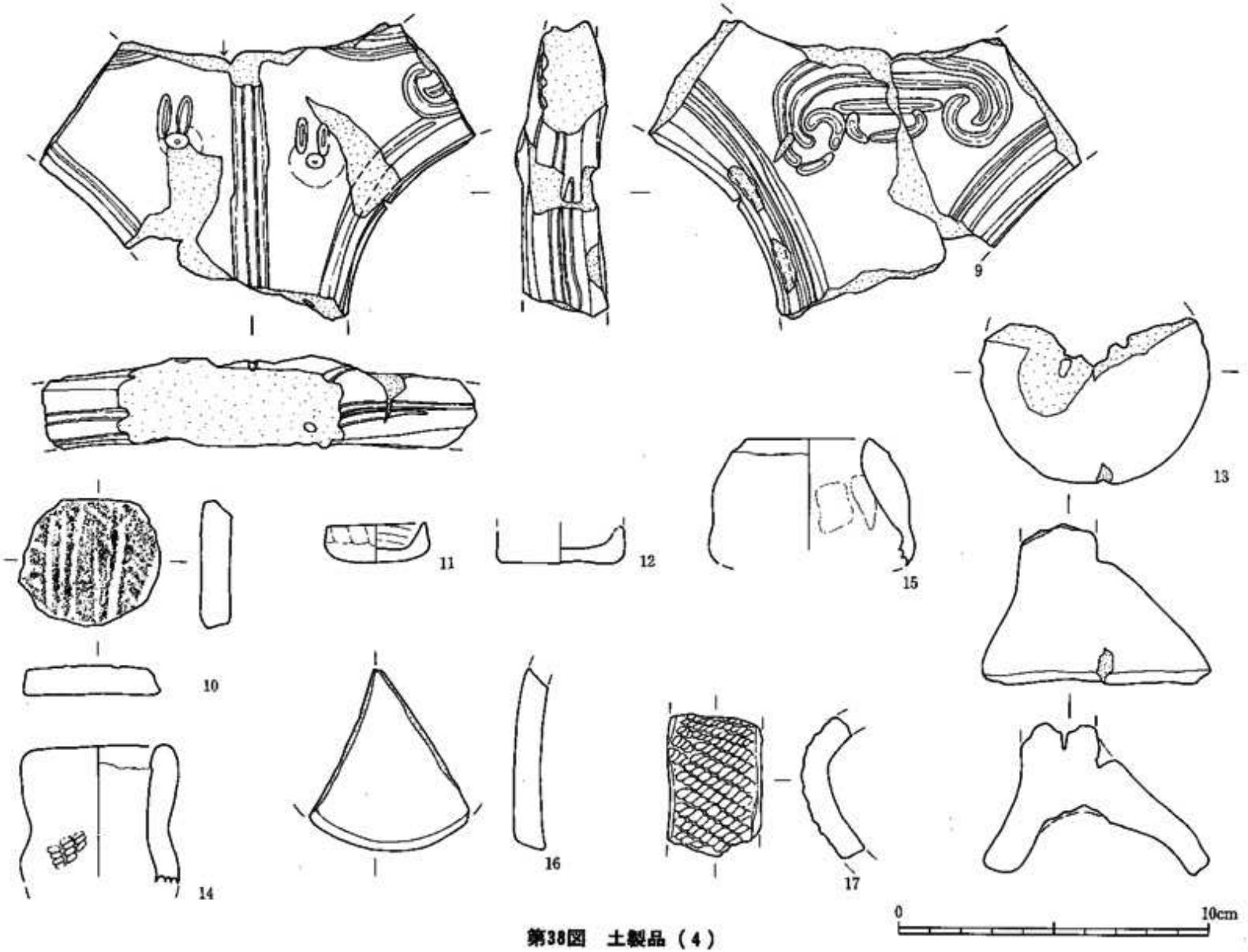
第35図　土製品（1）



第36図　土製品（2）



第37図　土製品（3）



第38図　土製品（4）

第4章　調査のまとめ

今回の調査では、東にある山塊の一部が短い尾根となって西に延び、その先端斜面上に縄文時代からの遺構が分布することがわかった。この南側が浅い山懐となって、以前から生妻遺跡として登録されていたところである。またその一帯からの伏流水が湧出するところが調査地の1地区にあたり、自然の池ないし湿地を形成していたと思われる。この尾根は北は現在「生妻池」となっているが、以前は入り込んだ谷があり、豊富な水を集めたことろであった。これらを含めたところが、昔からの生活環境を形成していた。西方には南東から急激な段差をもち、北流する和泉川があるが、その氾濫は試掘の様子と地形からみて、かろうじて調査地までは至っていないことがわかる。その点において、この地は安定していた場所といえる。

調査結果をみると、まず縄文時代では早期末から前期初頭の縄文あるいは撚糸文系の繊維土器の出土は、遺構に時期を与えてはいないものの一時期の良好な資料といえる。中期の土器は中期後葉のものを中心としている。第2～5号住居址がこの時期に該当し、近くで行なっていた弥生前遺跡の調査でもこれらが主体を成している。土器以外では石器、土製品などがあり、土製品には良好な資料が多い。

弥生時代をみると、中期初頭の土器と古墳時代に近接する時期の第8号住居址出土遺物の一群があるが、いずれも量は少ない。第9号住居址は古墳時代中期である。中期から後期になると、この周辺は山中に古墳が増え始め、本遺跡を取り囲むように棺護山の南斜面、東後ろの山中、向かいの中山北部に多数の古墳が造られた。フィールド調査ではその数がさらに増えそうである。このような周囲の状況からすると、本遺跡にはまだいくつかの古墳時代の遺構を想像することもできよう。

奈良時代の遺構・遺物はみえない。平安時代になると、1地区の湿地下方に排水路を設ける際、土師器甕の優品を得ており、これらとピット出土の遺物から前期末から中期の住居址を予想する。湧水が管理され、水田経営などより一層生活の枠を広げたものと思われる。水田址と溝はおそらくこれ以降のものである。本遺跡の近くでは水田址発見の例はまだみていないが、発掘所見によるとこの水田址は新旧2面あり、中を流れた溝もこれに対応し新旧がある。さらに時代が下がると、歴史的環境の項で述べているように、中山地区では丘陵上から南一帯の有力者を中心としながら、徐々にではあるが開発が行なわれており、この下和泉でも何人かの人物の名前がみえる。そのような生活基盤の背景となった遺構の前身と考えたらどうであろうか。

付表　土器対比表

報告No.	実測No.	注記	報告No.	実測No.	注記	報告No.	実測No.	注記
1	写・実	20住埋甕No.1	37	1区(P)－10	126	73	3下検－26	3区下段検出面
2	2－8	2住、炉、No.2	38	1区(P)－11	131	74	3下検－16	3区下段検
3	2－3	2住No.8、9	39	1区(P)－12	132	75	3下検－6	3区No.12
4	2－4	2住ベルト	40	1区(P)－13	135	76	3下検－10	3区下段検
5	2－1	2住No.12	41	1区(P)－14	135	77	3下検－21	3区下段検
6	2－7	2住炉内No.2	42	1区北カ－1	北カ	78	8－1	8住No.1
7	2－2	2住炉内Pit	43	1区北カ－2	北カベF	79	8－3	8住外南
8	2－6	2住No.5、ベルト	44	1区排－3	排、ミゾ	80	8－4	8住No.2
9	2－5	2住No.14	45	1区検－2	1区検出面	81	8－2	8住No.5
10	2－8	2住ベルト	46	1区検－1	1区検出面	82	9－5	P63→9住
11	3－1	3住No.5、6	47	1区検－3	1区検出面	83	9－3	P53→9住
12	4－3	4住No.5	48	3下検－8	3区下段検	84	9－4	P137→9住
13	4－2	4住No.10	49	3下検－13	3区下段検	85	9－6	3区検上段
14	4－1	4住No.8	50	3下検－22	No.3	86	9－1	P53No.1
15	4－6	4住フク土ユカ北東	51	3下検－19	3区下段検No.8	87	土壙－3	3区土壙4
16	4－4	4住No.6	52	3下検－20	3区下段検N22/W2 No.5	88	P－2	P33No.1
17	4－5	4住No.10	53	3下検－2	3区下段検No.14	89	P－1	P33No.2
18	5－1	5住フク土	54	3下検－1	3区下段検No.15	90	北カ－1	1区北カベ
19	5－2	5住検	55	3下検－23	3区下段検	91	北カ－2	1区北カベ2
20	7－1	7住No.2	56	3下検－29	3区下段検	92	北カ－4	1区北カベC
21	9－7	P64→9住	57	3下検－28	3区下段検N21/W3 No.8	93	北カ－5	1区北カベ5
22	9－8	P137→9住	58	3下検－25	3区下段検N22、W3	94	北カ－3	1区北カベE
23	土壙－1	1区土壙8	59	3下検－3	3区下段検出面	95	混－3	1区118
24	土壙－2	1区土壙8	60	3下検－1	3区下段検出面	96	混－1	1区109
25	土壙－5	土壙3No.1	61	3下検－5	3区下段検No.4－2	97	混－4	1区118
26	土壙－4	土壙3No.2	62	3下検－12	3区下段検	98	混－5	1区No.3
27	P－3	2区P26	63	3下検－15	3区下段検	99	北カ－6	1区北カベ4
28	1区(P)－1	1区117	64	3下検－9	3区下段検	100	混－2	1区113No.1
29	1区(P)－2	1区117	65	3下検－18	3区下段検N24No.4	101	混－8	3区下No.7
30	1区(P)－3	1区118	66	3下検－27	3区下段検N22/W2 No.5－①	102	混－9	3区検下段
31	1区(P)－4	1区122	67	3下検－24	3区下段検出面	103	混－7	3区下段検
32	1区(P)－5	1区123	68	3下検－17	3区下段検出面	104	混－6	3区検N24～25/W1～2 No.7
33	1区(P)－6	1区124	69	3下検－7	3区下段検N22/W2～3 No.6	105	1区排－2	1区排水用溝
34	1区(P)－7	1区125	70	3下検－30	3区下段検出面	106	1区排－1	1区排水用溝
35	1区(P)－8	1区126	71	3下検－11	3区下段検			
36	1区(P)－9	1区126	72	3下検－14	3区下段検			

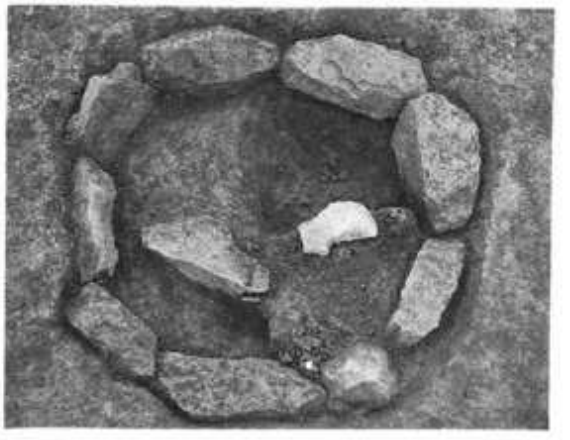
第 1 号住居址

第 2 号住居址

第 2 号住居址炉

同埋甕

第 3 号住居址



同炉

第2・3号住居址

第4号住居址

第5号住居址

第6号住居址

第7号住居址

第8号住居址

第9号住居址 P53

水田址・溝

単独出土土器No11

単独出土土器No12

第１号土坑

P33

１区Aトレンチ

調査地遠景西より

調査地遠景南西より

調査地より弘法山古墳を望む

14

52

105

54

66

106

87

88

1

2

6

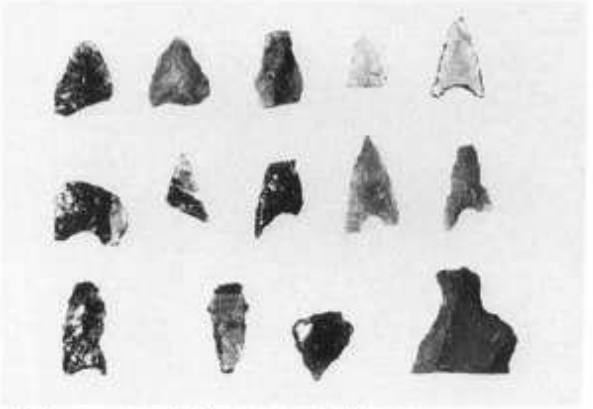
7

11

26

12

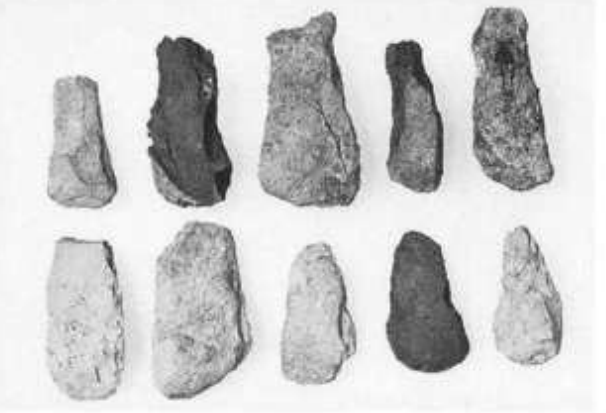
20



石鏃（1～11）・石錐（12・13）・石匙（22）

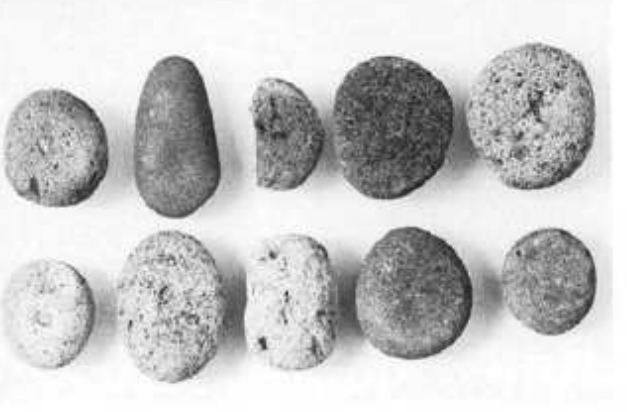
ピエス・エスキーユ（14～21）

スクレイパー（20～30）



打製石斧（31～40）

打製石斧（41～45）・磨製石斧（46～48）
砥石（59）・研磨礫（61）



凹・敲・磨石（49～58）

土偶(5)

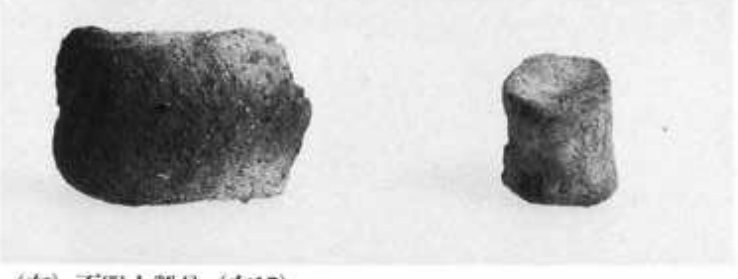
土偶(1)

土偶（4・9・8）

左同

土偶（2・3・7・6）

ミニチュア土器（左−13・右−15）・不明土製品



（右）不明土製品（左17）

松本市文化財調査報告　No.89

松本市生妻遺跡

平成３年３月20日　印刷

平成３年３月20日　発行

編集　松本市教育委員会
〒390　長野県松本市丸の内３－７
TEL ０２６３（３４）３０００

発行　松本市教育委員会

印刷　川越印刷株式会社